

---

# バカとテストと紅き閃光

霧氷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと紅き閃光

### 【Nコード】

N5132V

### 【作者名】

霧氷

### 【あらすじ】

ある日、スマートブレインの研究室から一つのベルトが盗み出された。後日、明久達は『死者が蘇る』という都市伝説を聞く。さらに、学園長である藤堂カオルから、ある物を渡される。そのある物が、明久達の運命を変える。バカとテストと召喚獣と仮面ライダー555のクロスです。もう一つの作品に比べたら、だいぶ更新が遅いかもかもしれませんが、楽しんで読む事ができたら幸いです。

## 序章（前書き）

まず、序章です。

## 序章

沈黙が支配する夜の中、その研究所だけは不気味な気配を放っている。

「うわあああああああ!!!!」

そんな研究所に、鋭い悲鳴が響き渡る。

「どうした!？」

「侵入者です!!!」

監視室にいる男はそれを聞くと、監視カメラの映像を見つめた。そこには――

「なっ……!!」

そこには、灰色の異形が通路を歩いていた。

ドンツッ!! と研究室の扉が打ち壊され、中にいた研究者達が逃げ惑う。

その異形は、研究室の中にあるケースに近づくと一気にそれを破壊した。

そして、その中からベルトのような物を掴み出した。

「……ファイズのベルトだけか。……後は全て奴の手に落ちたか、せめてこれだけでも……」

異形はそう言うと、そのベルトを持ち、研究所を去っていった。

## 設定（前書き）

この作品の設定です。

## 設定

世界観の設定を説明したいと思います。

・この世界はバカテスのパラレルワールドで、スマートブレインがファイズの原作のように大企業として君臨している。

・バカテスの時間軸は2巻と3巻の間。

・オルフェノクは世間に完全に認知されていないが、都市伝説として広まりつつある。

・藤堂カオルと元スマートブレイン社長の花形は親友。

・ライダーズギアはファイズの物以外は全てスマートブレインの物になっている。

・帝王のベルトである、サイガとオーガのベルトが開発されており、基本的にラッキークローバーなどしか変身出来ない。

## 設定（後書き）

コラボをカプトにするかファイズにするかすごく悩みました。最終的に自分的にはファイズの方が話を作りやすいので、ファイズにしました。

## 第一話 全ての始まり（前書き）

何かおかしい点があったらご指摘お願いします。

## 第一話 全ての始まり

「死者復活？」

文月学園、2-Fクラスで吉井明久はそんな噂を聞いていた。

「うむ、何でも最近死んだはずの人間が生き返って、生きている人間を襲っているという噂じゃ」

説明しているのは、明久のクラスメイトの木下秀吉。外見は立派な女子だが、本当は男子である。最近は、その事実がクラスから忘れ去られているが……。

「でもなあ、そんなの誰かが適当に流したウソなんじゃないか？」

「……俺もそう思う」

呆れたように返したのは、同じくクラスメイトでありクラス代表の坂本雄二と、旺盛な性的好奇心とその気持ちを隠そうとする姿勢から、ムツツリー二と呼ばれている土屋康太だ。

「そ、そうですね、ウソに決まってるじゃありませんか……」

「そ、そんなの信じるなんて、アキ達も子供ね……」

そう言いながらも震えているのは、数少ないFクラスの女子、姫路瑞希と島田美波だ。

「おーいお前ら、何か学園長が学園長室にくるようになってたぞ」

明久達に、クラスメイトの須川が言った。

「あのババアが？ 一体何をしたんだ明久」

「今から謝って来れば許してもらえるかもしれんぞ明久」

「……ファイト」

「正直に白状してきなさいよ、アキ」

「明久君……、今度は何をしたんですか？」

「ちよつと待って！ 何で僕が何かをやらかしたって事になってるの！？」

あまりにもひどい扱いに、明久が叫ぶ。

「冗談だ、とりあえず行くぞ。あのババアがいい知らせを持つてるわけないしな」

雄二の言葉に不安を持ちながらも、6人は学園長室に向かった。

「何の用ですかババア」

「早く帰らせるババア」

学園長、藤堂カオルに容赦ない毒舌が飛ぶ。ちなみに後の台詞を言ったのは雄二だ。

「・・・本当に礼儀のなつてないクソガキ共だね」

額に手を当てながら、嘆くように学園長が言った。

「・・・まあ、そんなことより本題に入らせてもらおうよ」

そう言うと、机の下から何かを引っ張り出した。

「実は、アンタ達にこれを預かってもらいたいんだよ」

机の上に出されたのは、一見普通のトランクケースだが、SMART BRAINのロゴが入っている。

「・・・おい、ババア、このスマートブレインってのはまさか・・・」

「ああ、あのスマートブレインさ」

日本で、その会社の名前を知らぬ者はいない。重工業や電子技術を中心事業としつつ、食品から医療から幅広い業種に進出している巨大複合企業で、日本有数の大企業である。

「こいつは数日前に親友から預かった物でね、預かって欲しいと言ったままどっか消えたよ、まったく勝手な奴さ」

「中身はなんですか？」

「知らないよ、まだ開けてないしね。ま、とりあえずあんた達に預かって欲しいというわけだよ」

「ちよつと待てババア、何でアンタに預けられた物を俺達が預からないといけないんだ」

「管理するのが面倒だからだよ」

「ふざけんなクソババア！！」

その理由に納得できないのか、雄二が叫びながら机を叩いた。まあその理由で納得できる人間も少ないだろうが。

「ごちゃごちゃわめくんじゃないよガキ共、言っとくけど、私はアంత達が校舎を壊したことを忘れたわけじゃないよ。文句を言うなら即刻停学でもいいんだよ」

「う……」

弱点を突かれてしまい、明久と雄二はたじろぐ。

「それにただ預かってもらうだけさ、それを使って何をやれってわけじゃない。簡単だろう？」

確かに、今までの事に比べたらはるかに簡単な条件だろう。それでも、明久達に何かメリットがあるわけではないが。

「さあ、これで話は終わりだ。分かったら、早く帰って次の授業の準備でもしな」

放課後、明久達六人は教室に残っていた。教室には彼ら以外誰もいない。

「どうしようかこれ」

「どうするも何も、まず中身を見てみるぞ」

「でも、勝手に開けちゃって大丈夫でしょうか……？」

姫路が不安そうに言った。

「これで中身が危険物だったら大変なことになるのは俺達だ。ましてや、あのババアの親友で良い奴がいるなんて思えないしな」

「ひどい偏見じゃのう……」

雄二の言葉に、秀吉は少し学園長に同情した。そう言いながらも、トランクケースを開けると、

「・・・なんだこりゃ？ ベルト・・・にこっちはケータイか？」

「これは・・・デジタルカメラかしら？」

「・・・デジタルトーチライト」

中身は、意外と普通な物ばかりだった。それでもスマートブレイン製の物なので、かなり高性能なものばかりだ。

「こんなもん、何に使おうってんだ？」

「うーん・・・、運動会とかの撮影とか？」

「運動会にトーチライトは必要ないでしょ？ ベルトも何に使うか分からないし・・・」

その道具の数々に、一同は頭を悩ます。

「はあ、考えてても仕方ねえ。とりあえず、これは明久が預かってくれ」

「何で僕なの!？」

「一人暮らしのお前の方が、事情とか聞かれなくて済むからな」

「ワシ等は全員家に家族があるしの」

「そして・・・、預かるのが面倒だからだ」

「あのババアと同じような事言わないで!!」

その後何度も懇願したが全て却下され、最後には余計な事を言ったせいで美波に間接を逆に曲げられ、泣々下校したのだった。

「はあ・・・」

明久はため息をつきながら、一人帰り道を歩いている。手には強制的に預けられたトランクケースがあった。

「どうしよう、これ・・・」

帰ったらそこら辺の床に置いておこうかな、と思っていた明久は、気が付くと前に一人の男が立っている事に気付く。

「えーと・・・、何か御用ですか？」

「・・・を・・・せ」



グマーカードバイス、通称ファイズポインターをセット、左側にデジタルカメラ型パンチングユニット、通称ファイズショットをセットする。そして最後にそれらがセットされたベルトを腰に巻き、ケータイを開く。

「無駄だ、お前如きではベルトの力を引き出せない」

さつきから怪人なのにちよくちよくよく喋るなあと明久は思いながら、

「そんなの・・・、やってみないとわからないだろ！」

画面に表示されているコードを見て、一番上のコードを押し、ENTERキーを押す。すなわち・・・、『555』のコードを。

『Standing by』

ケータイからそう発声され、ケータイを折りたたみ、ケータイ・ファイズフォンを天に掲げ叫ぶ！

「変身！！」

そして、ファイズフォンをドライバーのバツクル部・フォンコネクターに突き立て、左側に倒す。

『Complete』

「へっ？」

明久がそんな間抜けな声を出すと、異変が起こる。

ドライバーがフォトンストリームを生成、明久の体に沿ってフォトンフレームが形成され、ファイズフォンから一際強い光が放たれ、その光が止むと明久の姿が変わっていた。

その体を護るは、ダイアモンドに限りなく近い硬度を持つソル・メタニウム。胸部にある分厚い装甲は戦車の主砲の直撃を防ぐ、フルメタルラング。身にまとう黒いスーツは2000度の高温や絶対零度を防ぐ。フォトンストリームを通じて体をめぐるのは、安定性を重視した赤いフォトン・ブラッド。ギリシャ文字の をデザインとし、黄色の複眼を持つその名は、ファイズ。

「わわ・・・、な、何これ??？」

明久は今だ自分の状況があまり理解できていないのか、顔を触った

り、体を見たりしている。自分でもまさか変身できるとは思わなかったのだろう。

「クソッ!!」

異形は舌打ちをすると、明久・ファイズに襲い掛かる。

「うわっ!」

「ぐはっ!」

驚きながらも打ち出したパンチは、異形の腹に命中し、異形は吹っ飛んだ。

「す、すごい……、これなら……!」

ファイズは異形に近づくと、顔面を殴り、腹にけりを入れさらに顔を殴る。そして立て続けに殴り、最後に蹴りを異形の腹に叩き込む。

「ぐはっ!!」

異形が吹き飛ぶのを見ると、ベルトのポインターを外す。

「えーと……、ミッションメモリーをポインターにつけて……、

あ、これ?」

ファイズフォンからミッションメモリーを外し、ポインターにつけるが、説明書を見ながらやっているのていまいち緊張感が出ない。

『Ready』

ポインターの先端が伸び、そのポインターを右足にセットし、ファイズフォンを開きENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

発声と同時に、フォトンストリームを経由しポインターにフォトン・ブラッドが注入され、右足を異形に向ける。すると、ポインターから光線が放たれ、異形に当たると円錐状の赤い光になる。

「やああああああ!!」

その光に向かって跳び蹴りを放ち、異形を貫く!

「ぐああ!」

そしてファイズは異形の背後にいきなり現れ、異形に の文字が浮かび上がると青い炎の爆発をおこし、瞬時に灰になっていった。

「……はあ……はあ……」

ファイズはファイズフォンを外し、ENTERキーを押し変身を解除をすると、深呼吸をする。

「・・・何が、どうなってるんだ・・・」

明久はふらふらとよろつきながら、家へと帰っていった。

## 第一話 全ての始まり（後書き）

初めて仮面ライダーの小説を書いてみましたが、どうでしたか？  
感想お待ちします

第二話 敵の真実（前書き）

第二話です。

## 第二話 敵の真実

「お返しします」

「何寝ぼけたこと言ってるんだいバカ」

明久は学園長室でトランクケースを返しに行ったが、開口一番で却下された。

「昨日言ったはずだよ、そのトランクケースを預からなかったら停学でもいいってね」

「あんな目に遭うなら停学の方がマシです!!」

「じゃあ退学にしようか？」

「こ・・・のババア・・・!!」

怨嗟の声を漏らす明久に、学園長はため息をつき、

「一体何が不満だつて言うんだい、預かるだけだろう。それとも、預かれない理由でもあるのかい？」

「トランクケースを持ってたせいで化け物に襲われました」

「帰って勉強しな」

「待ってください！ 本当なんです！」

「信じてもらえないわけじゃないよねー・・・」

明久はこの間の文化祭で何とか取り戻した卓袱台に顔を伏せながら、負のオーラを出していた。学園長に何とかねばったものの、最終的には退学にすると言われ、しかも鉄人もとい西村先生がやってきたので仕方なく2-Fクラスに戻ってきたのだ。

「どうしたのアキ？」

「いつもに比べて元気がないのう・・・」

心配そうな声をかけてきたのは、秀吉と美波の二人だ。

「放っておけ、どうせくだらないことで落ち込んでんだろ」

横で寝ている雄二が冷たい声をかける。

「失礼だなあ、僕だってちゃんと真面目なことで落ち込んだりするよ」

「くだらないことで落ち込むのは否定しないんじゃないかな・・・」

「お前が真面目なことで落ち込むわけないだろ、バカも休み休み・・・」

「霧島さん、雄二がこの間女子大生とデートしてるの見たよー」

「は、何バカいつぎやあああああああ!!!」

「・・・雄二、浮気は許さない」

悲鳴を上げている雄二にアイアンクローをかけているのは、Aクラス所属の霧島翔子だ。しかし、AクラスとFクラスはかなり距離があるのに、いつの間ここに来たのだろうか？

「明久君、元気がないならこれを食べてください！ 昨日家で作ってきたんです、きつと元気が出ます！」

「へっ」

姫路がそう言いながら出したのは、クッキーだった。・・・黒いオ

ーラと死神の手招きが見えるのは明久たちの目の錯覚だと思いたい。

「よかつたじゃないか明久！ 姫路がお前のために作ってくれるなんてまずないぞ！」

「運がいいのう明久！」

「・・・ラッキー！」

その威力を知ってる雄二と秀吉とムツツリー二が明久の肩を掴む。理由は単純、獲物を逃げられなくするためだ。

「ちよつと待つてよ三人とも！ 友達なら食べるの手伝ってよ！」

「・・・今は違う。・・・獲物!!!」

「アキ、作ってきてくれたんだから食べてあげなよ。・・・そのうちウチも作るから・・・」

「いいから・・・、さつさと食べこらあああああ!!!」

「ぎゃあああああ!!!?」

さっきのお返しなのか、雄二が無理やり明久の口にクッキーを突っ

込み、明久は死と生の境をさまよう事になった。

「ひどい目にあつた・・・」

「正直、お主が来世の事を呟き始めたときはもうダメかと思つたぞ・・・」

明久は今日は雄二達と一緒に下校していた。クッキーを食べて、その後放課後まで生死の境をさまよつて明久と帰る時間が重なつたためだ。

「だけど大丈夫アキ？ 本当に顔色が悪かつたんだから・・・」

「大丈夫だよ美波、美波がそんなに心配するなんて似合わないよ？」

美波はもつとがさいだだだだだだだ！ ほ、骨がへしおれ・・・

「！！」

「だーれががさつで色気もないですつて!？」

「そこまでは言つてない！ 色気がないのは本当だけとただただだ！！」

「墓穴を掘つた上に、さらに広げているな・・・」

「・・・バカ」

そんな明久を、雄二とムツツリー二は呆れた目で見つめていた。

「だけど明久君、本当に大丈夫ですか？ 具合が悪いなら病院に行つた方が・・・」

「大丈夫だよ姫路さん・・・、今はその気遣いだけで嬉しいよ・・・」

「・・・雄二、病院でもし子供がお腹にいることが分かつたら結婚・・・」

「そんな事は100%ありえないから安心しろ」

雄二達の会話を耳にしなが、明久は平和な日常を噛み締めていた。確かに、苦しいときもあるが、雄二や美波達がいるこの現実が嬉しかった。昨日のような異常ではなく、普通の日常が。

しかし、その日常は。何の前触れもなく打ち壊される。

「・・・」

気が付くと、一同の目の前に30代前半の男が立っていた。ただ無言で、視線は明久のトランクケースに向けられている。

(・・・あれ、このパターンって・・・)

「どうした？ おっさん」

雄二がその男に声をかける。

「・・・ベルトをよこせ」

「・・・雄二のベルトは渡さない」

「そう言いながら俺のベルトを引っ張るのはやめろ」

雄二が自分のベルトから霧島を引き離しながら言った。

「いいから、ベルトをよこせ・・・!!」

そのやり取りに苛ついたのか、少し男が口調を強めると男の顔に模様が現れ、男は牛を模した灰色の化け物に変化した。

「「きゃあああああああ!!」」

それを見た姫路と美波が悲鳴を上げる。

「・・・!!!!」

「な、んだこいつ!？」

明久以外のメンバーはその光景に混乱している。その化け物は、姿以外は昨日明久が見た異形と似ていた。

「ちっ!」

雄二が舌打ちをすると、異形の顔面に蹴りを叩き込む。

「・・・これがどうした」

「何!？」

しかし、異形にはまったくその蹴りが効いていない。雄二が喧嘩慣れしている玄人であるにもかかわらず、だ。

「お前たち人間では、俺たちに勝つことはできないんだよ!」

そして、頭に生えている角を使い突進をくりだしてきた。

「おっわあ!!」

雄二はそれを避け異形は一旦止まるが、今度は姫路と美波の二人に

狙いを定めた。

「やめろ!!」

「アキ!？」

「明久君!？」

明久が異形に飛び掛るが、

「邪魔だ!」

腕を一振りさせただけで明久は吹き飛ばされ地面を転がる。

「くっ……!!」

「目障りだ、お前を先に殺すか」

そう言いながら、異形は明久に近づいていく。

「明久! 逃げるのじゃ!!」

秀吉が明久に逃げるように声を出す、

「……ごめん秀吉、皆を置いて逃げるわけにはいかないんだ!!」

明久は叫ぶ。こんな状況で、友達を置いて逃げられるほど明久は冷酷な人間ではない。たとえそれが、常々ひどい目に遭わされている雄二だろうが。そして、明久はトランクケースを開け、ファイズポインターとファイズショットをベルトにセットし、腰につける。

「無駄だ、お前ではベルトの力を引き出すことなんてできない」

「……それ昨日も言われたよ」

言葉を返しながらファイズフォンを開き、5の数字を3回押しENTERキーを押す。

『Standing by』

ファイズフォンを天に掲げ、

「変身!!」

ベルトにセットする。

『Complete』

その音声と共に、明久の体に沿って赤いフォトンフレームが形成され、赤い光が強く放たれその場の全員の目が塞がれる。その光が収まり目を開くと――

「……アキ?」

そこには、ファイズに変身した明久が立っていた。

「な・・・、貴様あ！！」

異形がファイズに襲い掛かると、ファイズはそれをかわし横腹に蹴りを入れる。異形がそれに怯むとさらに殴って追い討ちをかける。

「調子に乗るなあ！！」

異形が怒ったように叫ぶと、握り手状の鉄球をファイズにくらわせ、ファイズは地面を転がる。

「アキ！！」

「痛たた・・・」

ファイズに変身しているとはいえ、その痛みはかなりのものだ。長期戦になればこっちが危ない。ファイズはファイズショットを取り、ミッションメモリーを差し込む。

『Ready』

ファイズショットからグリップが現れ、それを掴みファイズフォンを開きENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

腕のフォトンストリームを通じ、ファイズショットにフォトンブラッドが注入される。

「うおおおおおおお！！」

異形とファイズショットが交差する。ファイズは鉄球をかわし、ファイズショットを異形の腹に叩き込む！

「う、がああああああああ！！」

ファイズの必殺技、グランインパクトが決まり、異形は の記号を浮かべながら爆発し灰になった。ファイズはENTERキーを押し、明久の姿に戻る。

「アキ・・・」

「明久君・・・」

声の方向に目を向けると、姫路と美波が心配そうな顔で明久を見つめている。

「二人とも大丈夫？」

「うん・・・、アキも大丈夫？」

「うん、二人とも無事でよかった」

「感動の場面のところ悪いんだが・・・」

そう言いながら、雄二たちが歩いてきた。

「あいつらは一体何なんだ？」

「お主のさつきの姿と何か関係があるのかのう・・・？」

「・・・詳しい説明が欲しい」

「・・・答えて」

雄二たちの質問に、明久は顔を雄二たちに向ける。

「・・・僕にも分からないんだ、あれが一体何なのか」

「それには私が答えよう」

その言葉は、いつの間にか明久の背後まで近づいていた老人が言ったことだった。歳は50代で、帽子を被っている。

「警戒するな、とは言わないから私の話を聞いて欲しい。私の名は花形、文月学園の学園長、藤堂カオルの親友であると同時にそのベルトを預けた者だ」

「ババアの？」

明久の横にいる雄二が言った。

「ああ、だが今はそんな話は後だ。今は君たちの質問に答えよう。まず、さつきの化け物はオルフェノクというものだ」

「・・・オルフェノク？」

「人類の進化形態とも呼ばれており、普通の人間の外見と、さつき君達が見た動植物の特性と高い戦闘能力を持つ異形へと変わる事ができる。オルフェノクの中には人間として生きようというものもあれば、その力に溺れて人間性を失い、人間を襲い自分たちの世界を作ろうという者もいる。そして、さつき君が変身したのはファイズ。オルフェノクを殺すためにスマートブレインが作った強化スーツを纏った人間を指す」

「おい、どうしてそんなに詳しいんだ？」

雄二が眉間にしわを寄せながら尋ねた。

「・・・今は知るときではない、しかし、これだけは聞いておきたい、吉井明久君。オルフェノクはこの後もそのベルトを狙い君の命を、友達の命を狙うだろう。そのベルトを使い、君の大切な人たちを護る覚悟はあるかね？」

その質問に明久はスツと顔を上げ、

「・・・覚悟も何も、オルフェノクとかいう奴らが何をしようかなんてわかりませんよ。だけど、僕の友達を狙うなら絶対に手は出させません」

その言葉に、花形はふつと笑った。

「・・・なるほど、聞いた通りのバカだ。しかし、そんな君なら、すべてを引っくり返せるかも知れないな。・・・君の家にあるものを送っておいた。後で見るといい、それと最後にベルトは肌身離さず持つておきなさい。いつ奴らが来るか分からないからね・・・」

そして花形はその場から去っていった。

「・・・何やら大変な事になってきたのう・・・」

「ま、このバカに任せるのは心配だが、仕方ないか」

「・・・無理はしないでくださいね」

「瑞希の言う通りよ、無茶はするんじゃないわよ。べ、別にあんたを心配してるわけじゃないんだから！」

「・・・素直じゃない」

「・・・吉井、気を付けて」

その場の皆から励ましの言葉をもらい、少し笑顔が出る。

「そう言えば、僕の家に贈り物って・・・？」

その言葉で、家まで急いで歩くとそこには・・・、

「バイクだー！！！」

届けられていたのは、結構格好いいバイクだった。ちなみに名前はオートバジンというらしい。

「うわあ、これがあれば遅刻しなくて済む！ やったー！！！」

「その前に免許証とれよ」

「いや、バレないように行けば何とか・・・」  
「・・・鉄人にはれたら大変なことになる」  
「・・・免許証って今からでもとれたっけ・・・？」  
そんな会話をしながら、明久は目の前の友達の日常を護るために戦うことを誓う。たとえ、自分の命が危険にさらされようとも。

「ファイズが動き出しました」

スマートブレインの社長室で、秘書風の女性が言った。彼女の目の前には男がガラス越しに景色を見ている。

「そうですか、ではカイザの使用許可をオルフェノクに与えてください。ファイズが敵にまわるならば用はありません。駒はいくらでもこちらにあります」

男の口調は紳士的だが、途轍もない威圧感を感じさせる口調だった。

「・・・かしこまりました」  
女性はそう言うと、部屋を出た。

「・・・花形さんも面倒なことをしてくれたものだ。しかし興味があるのはファイズに変身する少年、吉井明久君。普通の人間では変身できないライダーズギアを、なぜこの少年は使いこなせるのか・・・？・・・まあいい、邪魔するのであれば消すのみ」

そう言うと、男 - 村上は机の上にある明久の写真を手に取ると、その写真は青い炎に包まれて消えてしまった。

## 第二話 敵の真実（後書き）

次回からは学力強化合宿辺です。

### 第三話 合宿と脅迫と新ライダー（前書き）

第三話目です。今回からタイトルをバカテス風にしました。

### 第三話 合宿と脅迫と新ライダー

『あなたの秘密を握っています』

「最悪じゃあー！ーっ！！」

青く澄み渡る青空の下、吉井明久の叫びが響いた。

「・・・なるほど、今朝下駄箱を見てみたら脅迫状が入っていたというわけじゃな？」

「なんだ。良かったあ・・・」

脅迫状と聞いて胸をなでおろす美波に、明久は少し疑問を抱くが、それは後回しにする。

「して、その脅迫状にはなんて書いておったのじゃ？」

そんな美波とは対照的に、秀吉は心配そうに明久に声をかける。これが原因で、明久の秀吉に対する評価がプラス1になった。

「これには『あなたに在る異性にこれ以上近づかないこと』って書いてあるんだ」

「ふむ。その文面から察するに、手紙の主は明久の近くにおる異性に対して何らかの強い気持ちを抱いておるな。大方嫉妬じゃろうが。つまり・・・」

「うん。手紙の主はこのクラスのたった二人の異性、つまり姫路さんか秀吉に好意を寄せているヤツだったことがわかるね」

「明久。金属バットを取りに行った。島田が戻ってこないうちに逃げるのじゃ」

美波が戻ってきたら明久が見るのは地獄だろう。

「ところで何をネタに脅迫を受けておるのじゃ？」

「あ、そういえばまだ知らないや。なにに、『この忠告を聞き入

れない場合、同封されている写真を公表します』か。写真って、こ  
つちの封筒に入ってるやつかな？」

同封されている封筒には三枚の写真が入っており、その中身を見る。  
一枚目は、メイド服姿の明久だ。

「この前の学園祭の服装じゃな」

「い、いつのまに撮影なんて……」

「こうして改めて見ると、やはり似合っておるのう」

「それ、全然嬉しくないよ……」

明久から思わずため息が漏れ出る。こんな物が写されているので、

明久は自分以外に誰も見れないようにする。二枚目は……

メイド服姿の明久。トランクスのパンチラ

「……（ビリイ!!）」

「あ、明久！？ どうしたのじゃ!？」

「トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクス  
だから……」

「自我が崩壊するほどのものが写っておったのか!？」

自我が崩壊しそうになるが、気を取り直して三枚目を見る。

写っていたのは……ブラを持って立ち尽くす明久（着替え中メ  
イド服着崩れバージョン）

「もういやあああああつっ!!」

「何じゃ!？ 一体何が写っておったのじゃ!？」

「見ないで！ こんなに汚れた僕の写真を見ないで!」

明久が叫んでいるせいか、周囲の視線が明久に集まっている。あれ  
だけの写真を見せ付けられたら、それも仕方ないと思うが。

「はあ、はあ、はあ……。恐ろしい威力だった。僕にここ  
までダメージを与えるのは鉄人か美波かオルフェノクぐらいだと思  
つてたのに……」

「考えすぎではないかのう。メイド服ぐらい、人間一度は着るもの  
じゃ」

それは100%絶対嘘だろう。

「明久君、秀吉君、おはようございます」

二人の後ろから、二人に声がかけられた。

「この声は……やっぱり姫路さんか。おはよう」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かったんじゃない」

「はい。途中で忘れ物に気がついて一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

姫路ははにかむように笑った。

「丁度良い。先ほどの写真が騒ぐほどの物ではないと姫路に証明してもらおうでしょうか。姫路、少々良いか？」

「はい、何でしょうか？」

「うむ。姫路に質問なのじゃが、明久のメイド服姿の写真があったらどう思うかおう？」

その切り込み方はどうかと思う、と明久は内心呟いた。

「うくん、そうですね……」

もしここで嫌悪感を表すのなら、写真の公表はなんとしても避けな  
いとならないだろう。代償に、Fクラスの女子二名とAクラスの男  
子一名は悲しむだろう。

「もしそんな写真があったら……とりあえず、スキャナーを買  
います」

姫路からの返答は、かなり理解不能なものだった。

「へ？ スキャナー？ なんて？」

「だって、その……」

問われた姫路は少し恥ずかしげに頬を赤く染め、

「そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEBで発信できないじ  
やないですか……」

「明久落ち着くのじゃ！ 飛び降りなんて早まったまねをするでな  
い！ それでもやるというのなら、せめて変身してからにするのじ  
や！！」

「放して秀吉！ 僕はもう生きていける気がしないんだ！」

姫路の言葉に、自分は嫌われているんじゃないかと明久は思う。本

当はその逆なのだが、明久はその考えに至らない。

「そ、そうじゃ！ ムツツリー二じゃ！ ムツツリー二ならばこの手の話し合いには詳しいはずじゃ！ 事情を説明して……」

「ムツツリー二に笑われる？」

「違う！ 事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらおうのじゃ！」

「おおっ！ なるほど！」

たしかに盗撮や情報収集のエキスパートとも呼ばれるムツツリー二こと土屋康太ならば脅迫犯を突き止められる可能性が高いだろう。そうすればこの写真を取り戻すこともできるかもしれない。

「ナイスアドバイスだよ秀吉！ さすがは僕のお嫁さんだ！」

「婿の間違いじゃろう！？」

「あの……どっちも間違いだと思いますけど……」

さっそく相談しようとムツツリー二を探すと、本人は教室の隅で小さくなり誰かと話していた。

「助けてムツツリー二！ 僕の名誉の危機なんだ！」

ムツツリー二のいる席に駆け寄ると、明久の行く手を塞ぐように雄二が邪魔をしてきた。

「後にしろ。今は俺が先客だ」

「あれ？ 雄二？」

よく見てみると、雄二の髪の毛が少ししおれているように見える。何かあったのだろうか。

「ムツツリー二、何の話？」

「……雄二の結婚が近いらしい」

「雄二と霧島さんの結婚？ そんな既に決まってる事より、僕が校内の皆に女装趣味の変態として認識されそうってことが重要だよ！」

「なんだと？ お前が変態だなんて、それこそ今更だろうが！」

「黙れこの妻帯者！ 人生の墓場へ還れ！」

「うるさいこの変態！ とつとつメイド喫茶へ出勤しろ！」

「……」

「……」

「・・・・・・・・・・傷つくならお互い黙っていればいいのに」  
ムツツリー二の言葉通り、二人の目からは涙が流れていた。

「でもまだ結婚の話程度で済んで良かったじゃないか。僕はてつきり、あのペースだともう子供ができた事にされているのかと  
.....」

「・・・・・・・・明久。笑えない冗談はよせ」

その言葉は、暗にその冗談が叶えられそうだということを示していた。

「そこまで言うなら一応話を聞くよ。雄二に一体何があったの？」

「一応つてのが癪に障るが、まあいいだろう。実は今朝、翔子がMP3プレイヤーを隠し持ってたんだ」

「MP3プレイヤー？ それくらい別にいいんじゃないの？ 雄二だつて前に学校に持ってきてたし」

その後鉄人こと西村教師に没収されたが。

「いや、あいつは結構な機械オンチだからな。そんな物を持っていて、しかも学校に持つてくるなんて不自然なんだ。そこで怪しく思つて没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」

「・・・・・・・・・・」

一瞬、明久は召喚大会の準決勝のシーンが頭をよぎるのを感じた。そのプロポーズを捏造してしまったのが自分だと知ると、明久は罪悪感でいっぱいになった。

「き、霧島さんは可愛いねっ！ そんな台詞を記録しておきたいなんて.....」

「いや。婚約の証拠として父親に聞かせるつもりのような」

明久は罪悪感で押し潰されそうになった。

「MP3プレイヤーは没収したが、中身はおそらくコピーだろうし、オリジナルを消さない事には.....」

そう言いながら雄二が取り出した物は再生用のプレイヤーだった。確かにオリジナルを消さない事には問題の解決にはならないだろう。

「そんなわけで、ムッツリーニにはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい。さっきも言ったようにアイツは機械オンチだからな。密かに集音機をしかけるなんてことができるわけないから、きつと盗聴に長けた実行犯がいるはずなんだ」

明久には台詞を録音されていたような様子は特に記憶になかった。となると、確かに集音機を仕掛けられていた可能性が高いだらう。もしくは姫路か美波の盗聴や盗撮を企てた誰かが、その台詞を録音したのかもしれない。

「……明久は？」

ムッツリーニが明久の方を向く。今度は明久の事情を聞くようだ。あまり長々と話したい内容ではないので、端的に説明した。

「……そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。写真を撮られた覚えなんて無いから、きつと盗撮の得意なやつがこっそり撮影したんだと思う」

「なんだ。明久も俺と同じような境遇か」

「……脅迫の被害者同士」

「こんなことで仲間ができて……あ、そうだ」

明久が何かに気付いたように、ポケットに手を入れる。

「脅迫状と一緒になんか変な手紙が入ってたんだけど。脅迫状の事ですっかり忘れてたよ」

「ふーん、何が書かれてるんだ？」

「ちよつと待つてね、えーと……！？」

その手紙を見た瞬間、明久の顔が険しくなった。その様子に気がついたのか、雄二とムッツリーニが表情を変える。

「どうした？」

「……親愛なるファイズ様へ」

その言葉に、二人の表情が驚愕のものに変わる。明久「ファイズということを知ってるのは、現在では雄二とムッツリーニを入れ、姫路、美波、秀吉、霧島、そして花形を加え7人のはずだ。それ以外

の者には誰一人として言っていない。

「このたびは、学力強化合宿への旅を心よりお喜び申し上げます。合宿先の卯月高原にて、あなた様の来訪を心よりお待ちしております、か……」

その手紙を読み終わると、手紙からはらりと一枚の写真が落ちた。明久がその写真を見てみると、

「……何だ、これ？」

その言葉に雄二とムツツリニも写真を見る。

「……明久のファイズギアに似ている」

「何でこんな写真が入ってるんだ？」

写真に写っているのは、明久の持っているファイズドライバーに似たベルトだった。違いを言うならファイズドライバーが赤色を基調としているのに対し、こちらは黄色を基調としている所だろう。どうしてこんな写真が入っていたのかと三人が頭を悩ましていると、担任の鉄人が教室に入ってきた。

「……とにかく、調べておく」

「すまん。報酬に今度お前の気に入りそうな本を持ってくるよ」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションその2を持ってくるよ」

「……かならず調べておく」

話は終わり、明久たちは鉄人ににらまれないうちに席に座る。……その後、明久たちFクラスは現地集合という案内すらない扱いに涙した。

「明久、起きたか！ 良かった……。電気ショックが効いたようだな……。」

雄二は心底安心した表情でアイロンみたいな機械をしまう。

「……ええと、何が起きたの？ 確かみんなで旅館に行く電車に乗って……、それから確か……。」

「思い出すな明久、この世の地獄というのを知るぞ。」

一体明久の身に何が起きたのだろうか。

「ところで、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ。」

作り変えたという事は、召喚獣を呼び出せるという事だろう。そんなお金があるのなら無料の学食とかを作って欲しいと明久は思った。

「む。明久、無事じゃったか！ 良かったのう……。お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めたときには、正直もうダメじゃと……。」

部屋に入ってきた秀吉が胸をなでおろす。

「心配してくれてありがとう。秀吉もこの部屋で一緒なんだよね？」

「うむ。ムツツリー二も含めた四人でこの部屋を使うのじゃ。」

見たところこの部屋は八人ぐらい寝られそうなのだが、班分けの関係で明久たちは四人で使う事になったらしい。問題児を一箇所に固めるためではないだろう。

「ムツツリー二はどこ行つたの？」

明久が尋ねると同時、ガチャツツという音と共にムツツリー二が部屋の戻ってきた。

「……。ただいま。」

「おかえりムツツリー二。」

「……。明久。無事で何より。」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう。」

「……。情報も無駄にならずに済んだ。」

「情報？ 昨日俺と明久が頼んだ例のヤツか。ずいぶん早いな。」

情報と聞いて雄二が反応する。明久の盗撮写真と雄二の盗聴の犯人を探し出す件だろう。しかし一日しかたっていないのにもう情報を集めるとは、かなり仕事が早い。伊達に盗撮や情報収集のエキスパートと呼ばれてはいない。

「……そういえば明久、知らない女性からこんな手紙をもらった」

「えっ？」

ムツリーニから手紙を受け取ると、昨日も見たファイズドライバ―そっくりのベルトの写真と、『今すぐ裏の林にきてください』と書かれていた。

「……ごめん。ちょっとトイレに行つて来るよ」

「そうか、早く帰つてこいよ」

「うん」

明久は返事を返すと、ファイズギアの入ったトランクケースを持ち部屋を出た。

「……相変わらず明久はウソをつくのが下手」

「うむ、普通はトランクケースを持ってトイレに行かぬのに」

「まあ、大丈夫だろう。あいつはしぶといしな」

雄二たちは明久が嘘をついていることに気が付いているものの、あまり気にせずムツリーニの報告を聞く。……彼がこれから会うのが、どんなものかも知らず。

「ここら辺だよね……」

明久は手紙の指示どおり、裏の林に来ていた。辺りはもう夜の闇に染められているが、何故か明久は昔からこんな暗闇でも、物体や景

色が良く見えるのだ。辺りを見渡しながら歩いていくと、一人の女性立っているのが見えた。

「こんばんわ、吉井君。……いえ、ファイズ」

女性はそう言うとサボテンを模したオルフェノク、カクタスオルフェノクに姿を変える。

「オルフェノク……!!」

明久はファイズドライバーを装着、ファイズフォンを取り出しコードを押し、

『Standing by』

「変身!!」

『Complete』

ファイズフォンをベルトにセットし、ファイズに変身する。

「りゃあ!!」

ファイズはカクタスオルフェノクに向かって飛び掛り、顔面を殴る。さらに続けて蹴りを腹に入れる。

「はあ!!」

カクタスオルフェノクは負けじと針をファイズに飛ばすが、ファイズは横に跳びそれをかわす。一気にカクタスオルフェノクと距離を詰め、カクタスオルフェノクが蹴りを入れるが左腕でガードし連続で殴る。

「くっ……! なるほど、つい最近ベルトを手に入れたとは思えない戦いぶりね……!」

普通の人間ならともかく、明久は日々バイオレンスな光景が繰り広げられているFクラスに所属している。そのせいか、実戦でも戦えるようになってきているのだ。

「……確かに、あれを使ったほうが良さそうね」

「？」

カクタスオルフェノクは距離を空け、女性に戻る。よく見ると、ファイズギアによく似ているベルトを腰に着けている。ベルトの右側にはXを模した武器、左側にはファイズの物と同じパンチングユニ

ツトが装着されている。そして懐からターン式のケータイを取り出し、ケータイのボタンを押した。

『Standing by』

ファイズフォンより少々低い音声の流れ、

「・・・変身」

『Complete』

ベルトにケータイを装着し、黄色い光が暗闇を満たす。そして光が止み、カクタスオルフェノクの女性は別の姿に変わっていた。

複眼の色は紫色に染められ、フォトンストリームの色はファイズの赤色のフォトンストリームよりも高出力を誇る黄色。その高出力なフォトンブラッドの安定供給を図るため二本に分かれてマウントされたダブルストリーム。

「・・・ファイズ？」

その姿を見た明久が、呆然とした表情で呟いた。

「・・・ふふふ、違うわよ。これはカイザ。オルフェノクの王を護るために作られた五本のベルトの内の一つ・・・」

オルフェノクの王？ 五本のベルト？ 明久にはその言葉の意味が分からなかった。

「どういうこと・・・？ ベルトはオルフェノクを殺すために作られた物じゃないの？」

「確かにそういう機能もあるけど・・・。そんな事を聞くなんて、あなた何も知らないのね。オルフェノクについても、王についても、ベルトについても。まあいいわ、・・・あなたはもう死ぬんだし」  
そう言うと、カイザはファイズに突進し、強烈な右ストレートをファイズの胸に叩き込む。

「がは！！」

あまりの威力に、ファイズの呼吸が一瞬停止する。さらにファイズの顔を殴り、よろけたすきに胸を蹴る。その蹴りでファイズは吹き飛び、地面を転がる。ファイズが起き上がった瞬間。

『Burst Mode』

カイザが右側に装着されているXを模した剣・銃一体型のマルチウエポン、カイザブレイガンを持ち、手前にあるコッキングレバーを引くと、音声が響きガンモードが起動、濃縮フォトンブラッドの弾丸をファイズに撃つ。

「ぐっ！！」

さらに銃弾を放ち、ファイズは火花を散らせながらまたもや地面を転がる。

「ほらほら！ 寝るのは早いわよ！」

カイザはケータイ・カイザフォンにあるミッションメモリーをカイザブレイガンを挿入すると、『Ready』という音声と共にグリッブ下部からフォトンブラッドを帯びた刀身が生成され、ファイズを何回も切りつける。

「うわあああ！！」

ファイズはよろけ、カイザはファイズに銃弾を食らわせながら剣で切りつける。そのたびに火花がちり、地面に倒れそうになる。ファイズは後ろに跳び、ミッションメモリーをファイズショットに挿入する。

『Ready』

すると、それを見たカイザもカイザショットを取り出し、ミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

そして、二人同時にENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

二人のショットにフォトンブラッドが注入され、相手に向かって勢いよく走り出す！

「うおおおおりゃああああ！！」

二人の距離がゼロ距離になり、ファイズのグランインパクトがカイザの顔面に突き刺さる……、寸前、カイザがファイズの腕をはたく。

「！？？」

そして、カイザのグランインパクトがファイズの胸に決まった。

「うわああああああ!!!」

ファイズは大量の火花を散らしながら、樹にぶつかり倒れ、明久の姿に強制的に戻される。明久の体は傷だらけで、頭からは血が流れている。

「まだ生きていたとはね、これもファイズの装甲のおかげかしら？」

「……いや、当たるときに後ろに跳んでダメージを減らしたのね」  
カイザの言うとおり、明久はグランインパクトに当たる寸前に後ろに跳び、直撃を避けたのだ。しかし、もはや明久は虫の息だ。これ以上戦う事は不可能だろう。

「ここまでの悪あがきのご褒美に、苦しまないように殺してあげるわ。じゃあね」

そして明久目掛けカイザブレイガンが振り下ろされる……

……

「……ここか？ 変な音がしたというのは」

「それに変な光も見えたって言うてましたね」

数人の大人の声が聞こえてきた。その声にかイザの動きが止まり、カイザブレイガンが止まる。おそらく戦闘の光や音を見られたのだろう。

「……ふん、今ここで騒ぎになるのはまずいわね。良かったわね、少しは長生きできたわよ。じゃあまたね」

そう言い残し、カイザは姿を消した。明久はカイザが消え去ると同時に気を失った。

### 第三話 合宿と脅迫と新ライダー（後書き）

結構戦闘シーンを書くのは難しいです。変なところがあったらご指摘お願いします。

**第四話 看病とのそぎと急接近（前書き）**

今回、あの二人の距離が縮まります。



「・・・・・・・・・・傷だらけで林で見つかつて、それからずっと寝てた」

「えぐ・・・・・・・・先生が・・・・・・・・、危ないかもしれないって・・・・・・・・、ひぐ」

「明久君が・・・・・・・・、無事でよかったです・・・・・・・・」

美波と島田は大分落ち着いたが、目が真っ赤になっている。

「明久、お前にここまで深手を与える相手といったら・・・・・・・・、オルフェノクか？」

「うん・・・・・・・・。でも今までのヤツとは違ってちよつと変なんだ」  
「何？」

明久は雄二たちに、オルフェノクがカイザと呼んでいたファイズに似たものに変身した事、自分のファイズギアと相手のオルフェノクのベルトを含めて五本のベルトがあること、オルフェノクの王のことと話をした。

「オルフェノクの王？ 奴らにも王みたいな奴らがいるのか？」

「分からない、それ以上は何も言わなかったから」

「・・・・・・・・・・オルフェノクと戦ったなら、旅館に紛れ込んでいるかもしれない」

「そうだ！ 早く見つけないと！！・・・・・・・・痛つ・・・・・・・・！！」

明久は突然体に来た激痛に顔をしかめる。

「動いちゃダメ！ アキ、すごい傷だらけでここに運ばれたのよ！？」  
「動ける訳無いじゃない！！」

美波が急いで明久の体を抑える。

「だけど、急がないと誰かが襲われるかもしれないでしょ！？」

「落ち着け、それが本当ならオルフェノクはもう誰かを襲ってるはずだ。（・・・・・・・・それに、俺達の盗聴や盗撮の犯人の事を忘れたか？）」

「あ・・・・・・・・」

雄二の後半の声は小さかったが、その言葉で明久は自分の盗撮写真や、雄二の盗聴の犯人についてムツッリーニが調べていてくれた事

を思い出した。

「(ムツツリーニの情報で、犯人は尻に火傷の痕がある女子という事が分かった)」

「(ムツツリーニは一体何を調べたの!?)」

普通なら名前や顔が先に分かるのに、何故尻に火傷があるということとが先に分かるのかが分からなかった。一体どんな調査方法を使ったのだろう。

「(ムツツリーニが校内に仕掛けた小型録音機に録音されてたんだよ、俺のプロポーズの盗聴を売ってたヤツの特徴がな)」

「(それがお尻に火傷の痕なの?)」

「(ああ、だけど今の状況が悪くてな)」

「(どうして?)」

「(女子の風呂場の脱衣所からCCDカメラと小型集音機が見つかったんだが、女子はそれを俺たちが仕掛けたものと思っっているらしくてな。お前が出て行った後、女子が押し寄せてきたんだよ)」

この時、明久はあの時部屋にいなくて良かったと少し思った。

「(お前は逃げたって思われてたんだが、林の裏から傷だらけのお前が見つかったんだ。頑丈なお前が転んだとかじゃすまない傷でな、教師は暴力事件として見てるらしい。しかも女子の風呂場からは反対側だしな。覗きに行っただとしても不自然だろ? だから女子もお前は白に近いグレーとしてみるらしい)」

どうやら止めを刺されそうになった時、あの時来たのは先生達だったらしい。

「(まあ安心しろ、後でその犯人見つけに女子風呂に覗きに行くからな)」

「(何言ってるの?)」

「(まあ聞け、俺の盗聴とお前の盗撮犯は手口が同じなんだ。そして、俺の声を録音した犯人と風呂場にカメラを設置した犯人はムツツリーニによると使用機器が同じらしい)」

「(・・・どういう事?)」

明久がそう言うと、雄二は呆れた表情を見せ、

「（流石明久、この程度の事も分らないか。つまり俺とお前を脅している犯人は同じで、覗き犯の

カメラとマイクがその犯人と同じ物だった。そして、覗き犯は火傷の痕があるという話だから……）」

「（ああ、なるほど！ その火傷の痕がある人を探したら全部解決するってわけだ！）」

全部同じ犯人の手によるものだとすると、これは不幸中の幸いだ。

犯人がバラバラだったら、探するのが大変だし、明久と雄二の未来は真っ暗だっただろう。

「とりあえず、犯人は探し出しておくからお前は休んでろ。オルフエノクもこんな場所で騒ぎを起こすほどバカじゃないだろ」

「………任せておけ」

それは犯人探しなのか覗きなのか分からない。

「だけど看病人が必要だな。誰が」

「ウチがやるわ！」

「ああ！ 美波ちゃんずるいです！！！」

先に手を上げたのは美波が先だった。雄二はそれを見て笑うと、

「じゃあ島田、任せたぞ。姫路はもうすぐ風呂だろ？ 早くしたほうがいいじゃないのか」

「うう……。今度こそ絶対に……」

悔しさまじりに言いながら、姫路は部屋を出る。

「じゃあな明久。早く傷治せよ」

「くれぐれも無茶はせんようにな」

「………こつちも犯人を捕まえとく」

雄二たちも姫路に続き、部屋を出て行った。雄二たちが出て行った事で部屋に沈黙が訪れる。

「あ……。お腹減ってない？」

「うん、大丈夫だよ」

「そう……」

美波はそう言うと、顔をうつむかせてしまった。よく見てみると表情が少し暗い。何かあったのだろうか。

「・・・アキ、大変な目にあっちゃったね・・・」

「大丈夫だよ、これぐらい。いつも皆からひどい目にあってるしね」  
明久は笑いながら言った。美波の折檻や、姫路の料理、FFF団の暴行に虐げられてきた明久にしてみたらこのようなことは日常茶飯事に近い。それでも、今日のような傷を受けたのは今日が初めてだ  
が。

「・・・アキはどうして笑えるの？」

「えっ？」

「アキはさっきまで死んじやいそうだったのに、どうしてそんなに笑う事ができるの？・・・ウチはアキが死んじやうと思ってたのに、何もできなかった。アキがひどい目に遭ってるのに、くだらない事で怒ってた！・・・ねえアキ、もう無茶はしないで？」

美波は涙目で明久を見つめた。それは、普段の美波からは考えられないほど弱弱い姿だった。それほどまでに、明久の身を心配してたのである。気がつくと、明久の左手は美波の両手に包まれていた。明久はそんな美波の姿を見て、

「・・・ごめん、僕は戦いやめるわけにはいかないんだ」

「・・・どうして！？死んじやうかもしれないのよ！？」

ウチは、アキの側にいたい。アキがいなくなるなんて嫌だよ・・・」

「大丈夫だよ、僕は美波の側にいるから・・・死んだりしないから。約束する」

そう言うと、明久は美波の片手に右手を添える。その言葉を聞き、美波はじつと明久の目を見て、

「じゃあ、約束して？絶対に死なない事。ウチの側にいつもいること」

「うん、約束する」

その約束は、他人からすればプロポーズのように聞こえるが、鈍感な明久はそんなことに気付かない。美波はというと・・・

「（こ、これってプロポーズ!? しかも今、ずっと側にいるって!?!）」

内心滅茶苦茶混乱していた。もちろん明久はそんなことに気付いていない。

「でもまいったなー。この怪我じゃ何もできないや」

「そうね。合宿の意味なくなっちゃったかもね。でも安心なさい。ウチはここにいるから」

「へっ? どういう事?」

「怪我人のアキー人じゃ色々と不便でしょ? だからウチが面倒みてあげるわ。感謝なさい!」

表では結構偉そうだが、心の中では大喜びしていた。

「ひ、卑怯です美波ちゃん! 私も明久君の面倒を見てあげたいのに……」

姫路が何やら叫びながら部屋に入ってきた。手には何やら荷物を持っている。

「あれ、姫路さんその荷物何?」

「先生に坂本君が、美波ちゃんが明久君の看病をするって言ったら、美波ちゃんの荷物を持って行ってやれって言われたから持ってきたんです」

「でも何で姫路さんが?」

伝えたのはあくまで雄二だ。姫路が女子の部屋に入り荷物を回収し、雄二が持つてくるというのが普通の光景だろう。雄二は明久には外道だが、女子に対しては優しい部類になる。

「それが……、坂本君たちが女子のお風呂を覗こうとして西村先生に捕まっちゃって……」

「どうやら本当に覗きをしたらしい。」

「……でもでも、美波ちゃんだけです!! 一人で明久君の看病を出来るなんて!!」

「早い者勝ちよ瑞希! 悪いけど、今回はウチに譲ってもらおうわ!」

「えーと・・・、二人はなんでそんなに怒ってるの？」  
怒ってるというより、ただ単に明久の看病ができるのを羨ましがっ  
てるだけなのだが、明久がそれを知る事は永劫にないだろう。

#### 第四話 看病とのそぎと急接近（後書き）

次回は結構話が飛びます。明久が何も出来なくなっているのので、感想お待ちします。

**第五話 最終日と約束と変形バイク（前書き）**

合宿編終了です。

## 第五話 最終日と約束と変形バイク

とうとう合宿最終日になった。この日まで明久は動けなかったが、その代わり旅館では大変ことが起こっていた。雄二たちが覗きを失敗して、鉄人に指導されたり、鉄人に指導されたり。簡単に言えば、失敗ばかりなのだ。しかも犯人である、尻に火傷のある女子はまだ見つかっていない。このままでは明久と雄二の黒歴史が増えてしまう。

「今日が最終決戦だ」

明久が寝ている部屋で、雄二が意気込んで言った。

「今日を逃したらお前の写真は帰ってこないし、俺の将来も真っ暗になっちまう。今、A、B、Cクラスに交渉中だ」

交渉というのは、覗きの協力のことだろう。

「……………今日こそ借りを返す」

ムツリーニが密かに闘志を燃やしている。最初の覗きの時、ムツリーニは保健の大島教師に負けたのだ。しかもその後も、大島先生とAクラスの工藤愛子に覗きを阻まれている。

「とりあえず、もうすぐ作戦決行の時間だ。行ってくる」

「うん、頑張つてね」

「……………必ず犯人を捕まえて、覗きを成功させる」

明久は雄二たちが部屋を出る姿を見届ける。何故かその姿は、戦場に向かう兵士のように見えた。……戦場に行く理由は不純だが、明久はベッドに寝転がり、手紙を取り出し見る。

『今夜、あなたと私が初めて会った場所で決着をつけましょう』

その手紙はいつの間にかベッドに置かれていた物だ。おそらく、あのオルフェノクからの手紙だろう。初めて会った場所はその林。……この決着で、どちらかの命が失われる。

「ん・・・」

呻いたのは美波だった。髪を下ろし、明久のベッドを枕代わりのようにしながら寝ている。

「・・・・・・」

この合宿の最中は、美波は明久につきつきりだった。一生懸命に明久の看病をしてくれた。嫌な表情を一度も見せず、ただ笑顔で笑っていた。自分は美波に嫌われている、と思っていた明久にしてみれば予想外だった。一度、夫婦みたいだねと言ったら顔を真っ赤にした。この合宿で唯一楽しかった事は、美波と一緒にいたことかもしれない。そう思いながら、明久は静かにベッドから抜け出そうとする。

「・・・アキ」

突然、美波の手が明久の毛布を引っ張った。驚いて美波を見るが、起きている様子はない。どうやら、寝言と無意識の行動だったらしい。

「・・・どこにも・・・行かないで・・・」

そう言いながら毛布を引っ張る美波の目には、涙が流れている。明久は美波との約束を思い出す。絶対に美波の側を離れないという約束を。

「・・・大丈夫だよ。僕はいつも、君の側にいる」

そう言いながら美波の頭を撫で、トランクケースを持って部屋を静かに出た。

部屋を出ると、雄二とムッツリーニと秀吉が何やら話し合いをしていた。

「む？ 明久、どうしたのじゃ？」

最初に明久を見つけた秀吉が声をかけてくる。

「ちよっと、トイレに・・・」

「そうか、さつさと言って来いよ。島田が不安がるからな」

明久が襲われた翌日、明久がちょっとした間先生と話をしに部屋を出て行ったら、美波が不安そうな顔をして明久のところを駆け寄ってきた。何でもいきなり消えてしまったので心配になったらしい。そして勝手に部屋をでた罰と言って一発殴られた。何も言わないで出て行った明久も悪いかもしれないが、怪我人を殴る美波も少し悪いかもしれない。

「うん、分かったよ」

笑顔で言いながら、雄二達の横を通りすぎようとしたその時。

「……死ぬなよ」

「……死ぬでないぞ」

雄二達が一言呟いたその言葉に、明久は黙って前を走る。ここで後ろを振り返ったら、覚悟がぶれそうだから。

「あ、明久君……」

今度は、前に姫路が立っていた。

「どうしたんですか？」

「ちょっと用があつて……」

「……そうですか、無茶しないでくださいね。明久君が死んじゃったら、みんな悲しむんですから……」

姫路はなんとしても明久を止めたいはずだ。好きな人を戦場に行かせる人間などいない。しかし、引き止めても何を言っても明久は止まらないだろう。それが、姫路達の知ってる吉井明久だから。だから、行かせるしかない。明久は死なないと信じながら。

「……絶対に帰ってくるよ」

そう言い、明久は走る。

「……絶対！ 絶対ですよ！ 約束です！！」

姫路が叫ぶのを聞きながら、明久は戦場に走る。絶対に帰ると胸に誓いながら。

林に行くと、オルフェノクの女性が立っているのが見えた。

「・・・来たわね、ファイズ」

明久は腰にベルトを巻き、ファイズフォンを開く。

「一つ、聞いていい？」

「何？」

「僕はまったく動けなかったのに、どうして殺さなかったの？」

確かに、明久は怪我のせいでまったく動けなかったし、殺せるチャンスならいくらでもあったはずだ。それを何故、この女性は行わなかったのだろうか？

「旅館であなたを殺せば騒ぎになるのは目に見えてたしね、それにちよろちよろ逃げ回れても厄介だし。従業員に成りすまして行動を見てたのよ。さて、今日こそもうわよ、あなたの命」

「・・・死なないよ、絶対に帰らなきゃ殴られるから」

相手もカイザフォンを開き、二人は変身コードを押す。

『『 Standing by 』』

「変身！！」

『『 Complete 』』

赤色と黄色の光が溢れ、明久はファイズに、女性はカイザに変身する。そして二人同時に駆け出し、ファイズのパンチがカイザの胸に、カイザの蹴りがファイズの胸に当たる。

「くっ！」

ファイズ

のパンチがあまり効いていないのに対し、カイザの蹴りはかなりのダメージを与える。カイザはファイズの赤色のフォトンブラッドより高出力を誇る黄色のフォトンブラッドを持つ。その為、ファイズより力が強いのだ。ファイズはファイズフォンを取り出し、1、0、6の順にボタンを押す。

『『 Burst Mode 』』

音声が鳴りファイズフォンが横方向に折り曲げられ、銃のような形態・フォンブラスターになる。そして、アンテナの先から光弾が3発カイザに放たれる！

「きゃああ?!」

光弾がカイザに直撃し、カイザは地面を転がる。ファイズはその隙を見逃さず、カイザにパンチを食らわせる。カイザもパンチをファイズの顔面に繰り出すが、ファイズは顔を横にずらしパンチをかわし、左アッパーをカイザの顎に当てる。左アッパーを顎にくらいふらついた隙に、キックをカイザの胸に叩き込む。

「ど、どうして・・・!? 私のほうが強いはずなのに・・・!!」  
確かに、カイザのほうが力は強い。しかし普通では一つの部分を強力にする場合、何か一つを犠牲にしなければならぬ。例えば――  
- 瞬発力。カイザはファイズに比べ、力は勝るが瞬発力では劣る。その弱点をつき、極力攻撃を避けカウンターをくらわせたのだ。

「くそ・・・、なめるなよ人間ごときが!!」

「Ready」

ミッションメモリーをカイザブレイガンに挿入し、ブレードモードにしファイズに襲い掛かる。ファイズはその攻撃をかわすが、カイザはカイザフォンに手を伸ばす。

「Burst Mode」

カイザフォンがフォンブラスターになり、光弾がファイズに直撃する。

「うわああ!!」

今度は逆にファイズが地面を転がり、立ち上がるとカイザブレイガンに切り裂かれる。ファイズはカイザブレイガンの持ち手を掴むが、逆の手に持っていたフォンブラスターに撃たれ手を離してしまい、再びカイザブレイガンの刃の餌食になる。そして、カイザブレイガンとフォンブラスターの銃口を胸に押し付けられ、一斉に射撃された。その衝撃にファイズは地面を転がり、動けなくなる。

「・・・手間をてこずらせてくれたわね。でもこれで終わりよ!!」

カイザは怒鳴り声を上げ、ファイズに駆け出す。ファイズは動けず、絶体絶命の状況だ。そして、カイザがカイザブレイガンを振り上げた瞬間。

ドガガガガガガガガガガ！！！

「うわあああああ！？」

マシンガンのような銃声が聞こえ、カイザは何かに撃たれ、地面を転がる。空中から何やら音がするので空を見上げようとすると、その前にそれはファイズの目の前に降りてきた。

「・・・ロボット？」

それは人型のロボットだった。胸部には の形のスイッチがあり、左手の位置にはなんとタイヤがあり、よく見ると16門のガトリングマスルが仕込まれていて、煙が垂れている。まさかさっきの銃弾はこのロボットのものか？

「これ・・・何だろう？・・・ポチツとな」

ファイズが胸部のボタンを押すと、そのロボットはたちまち花形からもらったバイク・・・オートバジンに変わった。

「うわあ、すごいなコレ・・・ん？」

見ると、左のハンドルにミッションメモリーの挿入口がある。試しにミッションメモリーをその挿入口に入れてみた。

「Ready」

ハンドルが引き抜かれ、フォトンブラッドの刀身が生成されたことによりハンドルはバイクハンドル型エネルギーブレード、ファイズエッジになった。

「よし・・・、これなら・・・！」

ファイズはファイズエッジを片手に持ち、カイザに切りかかる。

「ぐっ！」

カイザは何とかカイザブレイガンで防ぐが、ファイズはカイザの胸を蹴り、バランスが崩れたところを何回も斬る！

「りゃあ！！！」

そしてファイズが横薙ぎに振るったファイズエッジがカイザドライ

バーに当たり、カイザドライバーは吹き飛ばされカクタスオルフェノクの姿に戻る。

「く・・・そ!!!」

カクタスオルフェノクは針を飛ばすがファイズエッジで弾き飛ばされ、袈裟斬りをくらい怯んだ所を立て続けに斬られ、最後に鋭い突きをくらい吹き飛ばされる!

「ぐわああ!!!」

ファイズはファイズフォンを開き、ENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

ファイズエッジにフォトンブラッドが注入され、刀身が紅く光る。そしてファイズエッジを振るうとファイズエッジから赤色のエネルギー波が放たれ、カクタスオルフェノクに当たると円筒形の赤いエネルギーフィールドとなりカクタスオルフェノクを拘束する!

「やああああああ!!!」

一気にカクタスオルフェノクに近づき連続で切り裂く。カクタスオルフェノクは の記号を浮かべながら、青い炎に包まれて灰になった。

「・・・や・・・つた・・・!!!」

ファイズは息切れしながらも歓声を上げる。そして落ちているカイザドライバーを拾い、変身を解除する。

「早く・・・帰らないと・・・美波に殴られる・・・」

力を使い果たし、息も絶え絶えになりながらも旅館に戻ろうとする。

『割りにあわねえーっつ!!!』

「おわあ!?!」

突然響いてきた声に明久は驚きながら、旅館に入る。

「ちよつとアキ!!! どこ行ってたのよ!!! 心配したじゃない・・・!!!」

明久を出迎えたのは、美波の今にも今にも泣きそうな顔と怒鳴り声だった。

(・・・やばい・・・、目の前が・・・)

かすれつつ視界を見ながら、明久はその場に倒れた。

「アキ！？しつかりして！！ アキ！！ アキイイイイイイイイイイイ！！！！」

「本当に申し訳ありません」

「うるさい！ バカアキ！ 約束を破ったくせに！！」

合宿を終えた明久を待っていたのは一週間の病院の入院だった。ボロボロに傷ついた体を治す為に、明久は現在入院中である。ちなみに、雄二たちは覗きをしたものの見れたものが学園長の裸という反吐が出る物。しかも学年の男子全員がその行為に協力したため、明久を除く全二年男子生徒が一週間の停学処分となった。そして現在明久は、ベッドの上で土下座しながら美波に説教をされていた。

「言っとくけど、この程度で済ます気はないわよ！！ あんたのありとあらゆる関節を逆方向に曲げてあげるわ！！」

「勘弁してください美波様！ 何でもいたしますから！！」

「・・・何でも？」

明久が気が付いたときはもう手遅れになっており、美波はスっ気全開の笑顔を浮かべていた。

「何でもって言ったわよねアキ？」

「し、しまった！ 美波の罠にはめられ・・・、嘘ですスイマセン何でもいたします！！！！」

拳を振り上げる美波に明久は急いで謝罪する。

「今度の休み、また駅前の『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいな」

「喜んで！」

「今度、二人つきりで如月ハイランドに行きたいな」

「喜んで！！」

「……一生ウチのそばにいて」

「喜んで！！！！」

明久はもう無我夢中で頷きまくっている。そしてそれを聞いた実波は顔を真っ赤にして、

「え……、本当……？　ウチのそばにいてくれるの……？」

「よろこ……！！」

「あ、あのー」

病室の扉から声が聞こえ、二人が目を向けるとそこには果物のかごを持った姫路が立っていた。

「お、お見舞いに来ました。明久君、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ姫路さん」

明久が答えると、姫路は少し頬を赤く染めて、

「そ、そうですね。それより、林檎剥きましようか？」

「うん、じゃあお願いしようかな……」

「ま、待ちなさい瑞希！　林檎剥くならウチがやってあげるわ！」

美波が姫路の手から、林檎とナイフを奪い取るうとする。

「い、嫌です！　今日は私が明久君の看病をしてあげるんです！」

美波ちゃんはまだもうしたからいいじゃないですか！」

「いいわけないでしょ！　早く寄越しなさい……！！」

「嫌です……！！」

林檎とナイフを取り合う二人を見て、明久は呆然とするしかなかった……。

「カイザが倒された？」

その報告を受け、村上は動揺する。

「はい、カイザのベルトも奪われました」

「・・・そうですか。今はまだこちらに部があるとはいえ、向こうに花形さんが手を貸しているとなると、少し厄介ですね・・・」

村上は眉間にしわをよせ、秘書の女性に向き直る。

「スマートレディに伝言をお願いします。ラッキークローバーに召集をかけてくださいと」

## 第五話 最終日と約束と変形バイク（後書き）

次回から新章に入ります。もしかしたらオリジナル章になるかもしれません。

第六話 キスと拷問と断ち切れる絆（前書き）

後半少しシリアスが入ります。

## 第六話 キスと拷問と断ち切れる絆

明久は少し早い時間に学校を前にしていた。ようやく病院から退院できて、登校することが許されたのだ。

「やれやれ。なんだか随分と久しぶりに学校に来たような気がするよ……」

強化合宿の期間も含めると二週間振りである。だが明久の場合は入院なので、停学を出され山ほど課題も出されたクラスメイトに比べると、少しばかり幸運だったかもしれない。

「あ、明久君っ」

不意に明久の耳に、誰かが駆けてくる音が聞こえてくる。

「おはようございます。もう怪我は大丈夫ですか？」

「姫路さん。うん、もう大丈夫だよ」

何故か姫路は明久が入院してたときは美波と一緒に毎日明久の看病をしていたので、明久は久しぶりに学校に来たが、二人にとっては毎日会っているようなものだった。

「でも、もうあんな無茶はしちゃダメですよ！ 明久君がいなくなっちゃたら、みんな悲しむんですからね！」

「わ、分かってるよ！」

姫路は明久が病院に入院しているときから、何回も同じような台詞を言っていた。よほど明久の身を心配していたのだろう。

「分かってるならいいです。また……、明久君と一緒に学校に来て良かったです」

「う、うん」

姫路のその言葉に、明久は赤面した。

「……ふふ。明久君、顔が真っ赤ですよ？」

「そ、そういう姫路さんだって慣れない事を言うから真っ赤だよ！」  
二人はお互いの顔を見ながら、お互いに笑った。結果はどうであれ、

明久にはいつもの日常が帰ってきた。明久には、それが嬉しくてたまらなかった。

「アキっ！」

そうやって笑いあっていると、遠くのほうから威勢のいい声が聞こえてくる。おそらく美波の声だろう。

「ん。おはよう美波」

声のした方を向くと、美波が走ってくるのが明久の目に入った。

「え？ あれ？ どうしたの？」

何故かは分からないが、美波はかなり真剣な顔をしている。何かあったのだろうか。

「美波ちゃん、どうしたんですか？」

その様子を見た姫路もキョトンとした顔になっている。

「アキ、目を瞑りなさいっ！」

「え？ は、はい！」

美波の大声に明久は驚いて目を閉じた。

「瑞希、ごめんね……………」

「え？ 何ですか美波ちゃん……………」

少しおかしい雰囲気にも明久が目を開けてみると、頬を染めた美波の顔が目前にあり、気がつくまで美波の唇が明久の唇に重ねられていた。明久が呆然としてみると、美波は弾かれるように明久から離れた。その……………冗談とかじゃ、ないから……………っ！顔をトマトのように赤くしながら、美波は去って行った。

「美波ちゃん……………やっぱり、明久君のことが……………」

明久には、近くで呟く姫路の声が妙に気にかかった。

「吉井、歯を食い縛れっ！！」

そして、不意打ち同然に鋭く重い須川の拳が明久の顔面に突き刺さった。よく見てみると、須川の後ろにFクラスのクラスメイト達が獲物を待ち構えているかのように近くにいた。須川は弾かれるように明久から離れ鋭い殺気のこもった視線を向け、

「そ、その……………冗談とか、じゃないから……………」

！・・・・・・・・本気でクロス」

「え！？ え！？ 待つて待つて！ 僕にも事情がわから・・・・・・・・ぎゃああああああっ！」

今までにない殺気と凄まじい暴力をFクラスから受け、明久は退院後初の登校日に意識を失った。

『諸君。ここはどこだ？』

『『『最期の審判を下す法廷だ！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』

『宜しい。これより・・・・・・・・F異端審問会を開催する！』

目を覚ますと、明久の周りには覆面に口ウソクや鞭を持ったFクラスノの集団で溢れていた。

「え？ あれ？ どういう事？」

暗幕が引かれているが、暗闇でもよく見える明久の目と畳の感触でそこがいつものFクラスの教室だと分かった。しかし何故明久はそんな所で手足を縛られ、拷問まがいな目に遭おうとしているのか。

「起きたか明久」

近くから聞きなれた声が聞こえた。明久がその方向に顔を向けるとそこには明久と同じように手足を縛られ転がされている雄二の姿が

あつた。

「……………雄二、何やってんの？」

「……………お前の巻き添えだ」

忌々しげに顔を歪ませながら雄二が吐き捨てるように言った。まさ  
に檻に繋がれた野獣という言葉が良く似合う。

「巻き添えって？」

「お前のせいで『寝ている間に翔子にキスをされた』って話がアイ  
ツらにバレたんだ。とんだ迷惑だ畜生」

キスという単語に、明久の中に憎悪の業火が生まれた。

「皆大変だ！ 坂本雄二に異端者の疑いがある！ 至急異端審問会  
の準備を始めるんだ！」

「待て明久！ お前、如月ハイランドの一件ではむしろキスをさせ  
ようとしてなかったか！？ というか、お前こそが異端者だろうが  
！」

雄二が言い返すが明久は気にせず、

「雄二、見苦しいぞ！ そうやって謂れもない疑いを僕にかけて自  
分の身を護ろうって魂胆だな！ その手は食うもんか！」

「こ、このバカ野郎が……………！ 信じられないのならあいつ  
らの言っていることを聞いてみる！」

明久はとりあえず雄二の言うとおりに会話に耳を傾ける事にした。  
聞こえてきたのは、クラスメイト達の奇妙な会話だった。

『……………罪状を読み上げたまえ』

『はつ。須川会長。えー、被告、吉井明久（以下、この者を甲とす  
る）は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この者は我ら  
が教理に反した疑いがある。甲の罪状は強制猥褻及び背信行為であ  
る。本日未明、甲が同Fクラスの女子生徒である島田美波（以下、  
この者をペツタンコとする）に対して強制的に猥褻行為を働いてい  
た所を我らが同胞が確保。現在に至る。今後、甲とペツタンコの関  
係に対して十分な調査を行った後、甲に対して然るべき対応を……』

『……………』

「御託はいい。結論だけを述べたまえ」

「キスをしていたので羨ましいであります！」

「うむ。実にわかりやすい報告だ」

その報告に、明久は一瞬呆然とする。

「明久。あまりのシヨックに記憶が飛んでいるようだから教えてやる。お前は今朝、島田とキスをしたんだ。しかも姫路の目の前で」

雄二が言い聞かせるように明久に告げる。しかし、明久にはそんな事は信じられなかった。自分は——だから、そんな事はありえない。

「ははつ。冗談はよしてよ雄二。だって、あの美波が僕なんかにキスをするわけじゃないか」

自分には勉強ができるわけでも、運動ができるわけでもないし、他に取り得があるわけでもない。そんな自分にキスをしてくれる人物なんて、世界中探したっていないだろう。……自分のようないに。

「まあそう卑下するな明久。確かにお前は容姿学力性格が最低だが、それらに目を瞑れば甲斐性と財力が皆無というだけじゃないか」

「この野郎！ 言うに事欠いて僕の取り得は肩たたきがけだど！」

「その歳で肩たたき！？ 反論するにしても他に何か取り得はなかったのか！？」

バカにするのも程がある、と明久は思う。おそらく手足を縛られていなければ掴みかかっている事だろう。

「それはともかく、お前が島田とキスをしていたのは事実だ。証拠も押さえられているようだしな」

証拠って何、と聞き返す前に明久の目の前に一枚の写真が突きつけられる。

「……裏切る者には、死を」

写真を手にして低く呟いたのはムツリーニだった。いつもは存在感を消して写真撮影をしているというのに、今は暗殺実行寸前の忍者のように静かな殺気を放っている。

そしてムツリーニが手にしている写真に写っているのは、明久と

美波のキスシーンだった。

「ええっ!? これホント!? アレは夢じゃなかったの!?!」

「夢だったなら今こうして縛られるような事はないんだがな」

「………そう」

うつすらとそんな記憶はあるが、まさか本当の事だとは思えない。

「耳まで真っ赤になっているところ悪いんだが、質問がある」

「ち、ちがつ………! これは、その、顔が熱いだけで……

……!」

「わかったわかった。んで、どうしてお前はそんな事になったんだ?」

「………そんなの、僕が聞きたいよ」

美波が急にあんな事をした理由など見当もつかない。誰かに脅されたとか、自分を畏にハメルためとか、そう言った理由しか思いつかない。

「そのスポンジのような頭でよく考えてみる。最近何か様子がおかしかったとか、どこか思い当たるフシがあるんじゃないか?」

「………分からないよ。どうして僕にそんな事……」

「………分からないって、どういう事?」

その声は、教室の扉から聞こえてきた。そこには、たった今話題になっっている島田美波だった。

「分からないって、どういう事? アキ、一生ウチの側にいてくれるっていったわよね? 嘘じゃ……ないわよね?」

その言葉は本当だ。病院の時、何でもすると言った明久に美波が言った要求だった。しかし、明久はあの時無我夢中で頷いていた。つまり、その時の記憶が曖昧なのだ。

そして、明久は最悪の言葉を放つ。その言葉が、どれだけ目の前の少女の心を傷つけるものか知らず。

「………そんな事、言っただけ?」

「………!!!」

美波の表情に、明久は絶句する。その表情は、まるで愛する者に騙

されたような。まるで、愛する者が死んだときのような表情だった。美波は唇を結び、明久に歩み寄り……

高い音がFクラスに響き渡る。それは、美波の平手が明久の頬を直撃した音だった。

「……最低。……もうウチに話しかけないで。……大嫌い」

そう言うと、美波は自分の席に座る。  
バキッ！！

また音が響き、明久が壁に衝突する。雄二が明久を思いつき蹴り飛ばしたのだ。

「……明久……！ テメエって奴は……！！」

「お、落ち着け坂本！！」

「うるせえ！！ 放せ！！」

Fクラスの何人が雄二を羽交い絞めにする。そうしなければ、明久を殺しかねない勢いなのだ。

「こら！！ 君達は一体何をしているのですか！！」

一時間目の先生が登場するが、それでも雄二は止まらず、美波は机にうづくまっている。

明久は、壁に寄りかかったままどこか虚ろな目をしていた。

第六話 キスと拷問と断ち切れる絆（後書き）

美波との絆を失ってしまった明久。果たして、また元のような関係になれるのだろうか？  
感想お待ちします。

第七話 危機と想いと護りたい者（前書き）

だいぶ遅くなって申し訳ありません。

## 第七話 危機と想いと護りたい者

バー「クローバー」。そこに三人の男女がいた。一人は眼鏡をかけた知的な外見の男性で、ウィリアム・バトラー・イエイツの詩を読んでいる。

二人目はバーテンダーの女性で容姿はかなり美しいが、どこか妖艶な雰囲気を漂わせている。

三人目は屈強な肉体を持つ黒人男性で、膝にチワワを乗せ撫でている。

「しかし僕達を呼び出しておきながら、村上さんは遅いですね」  
眼鏡をかけている男性が言った。

「仕方ないわ。あの人は前からそういう人だもの。そういえば、北崎君も来ないわね。まあ彼もきまぐれだから仕方ないかもしれないけど」

「ぼ、僕は別に来てくれなくてもいいんですけどね」

北崎という名前が出た瞬間、眼鏡の男性が少し怯えたような表情を見せる。その時バーの扉が開き、紳士的な男……村上が店内に入り、席に座る。

「お久しぶりです皆さん」

「何の用ですか村上さん。つまらない事に僕達を使わないのは、あなたに協力する条件だったはずですよ」

「そう言わないでください琢磨さん。実は少し厄介な事になりましたね……」

眼鏡の男性……琢磨が不満げに言うと、村上が額に手を当てながら村上が言った。

「ファイズが動き出しました。すでにカイザのベルトも奪われています」

「ファイズが？ でもベルトは人間には使えないはずでしょ？」

女性が驚き混じりの表情で言った。その話には琢磨も興味があるのか、村上の方に目を向ける。

「ええ、そのはずなんです。しかし現にオルフェノクはもう何体か消され、カイザのベルトも奪われていることは確かです。現在ファイズに変身しているのは文月学園2-F所属、吉井明久君です」

村上は明久の写った写真をカウンターの上に出す。女性はカウンターの上に出された明久の写真を手に取ると、笑みを浮かべた。

「へえ……、中々可愛い子ね」

「ここで『上の上』のオルフェノクである皆さんに、この吉井明久君を殺すことをお願いします」

その言葉に、その場の空気がピンと張った糸のように張り詰める。

「……この少年がそれほどの脅威だとも言うのですか？」

「ファイズギアを使いこなしている以上、油断はできませんよ。それに、あちらには花形さんがついているようですよ」

「花形って、確か前社長のことかしら？」

「ええ、敵には回したくありませんでしたが、こうなったからには仕方ありません」

村上はそこでため息をついた。

「まずは、ジエイ。あなたが行って下さい。成功したら、チャコと一緒に旅行に行くのがいいでしょう」

その言葉にジエイはコクリと頷き、村上はチャコと呼ばれたチワワの頭を撫でた。

「でも、ファイズとカイザのベルトはどうするの？」

「別に壊しても構いませんよ、影山さん。後の三本のベルトがあれば、どうにでもなります」

「……デルタのベルトと、帝王のベルトですか」

話を聞いていた琢磨が、ポツリと呟いた。

「あの三本のベルトがあれば、人間など虫けらのようなものですからね。ああ、それとジエイ。吉井君を誘き出したい時は、彼と同じ学校の人間を狙えば良いと思います。彼は絶対に来ますよ」

ジェイはまた頷き、カウンターの上のビールを一口すすった。  
「残念ね……。こんな可愛い子を殺すことになるなんて……」  
影山は悔しそうに呟くと、写真に火をつけ燃やした。

「大丈夫かのう、明久に島田は……」

「島田は心配だが、明久は知るか。あのバカ」

「……明久があそこまでバカとは思わなかった」

放課後の2-Fクラスで、雄二とムツツリー二と秀吉は美波と明久の姿を見て心配そうな表情を浮かべていた。美波は誰とも話さずただ帰宅の準備をし、明久は自分の席でうわの空の状態である。

「しかし、島田も凄まじかったの……」

「ああ、姫路が明久の事を言おうとした瞬間、『あのバカの話をしてないで!!』だからな」

「……相当頭に来ている」

明久と美波は朝の一件から全く口をきいていない。明久は謝罪の一言でも言いそうだが、その様子はまったく見られずただボーっとしていた。

「……ウチ、帰るわね」

美波はそう言うつと荷物を荒々しげに持ち上げ、教室を早足で出て行った。それでも、明久はただボーっとしているだけだ。

「明久君、後を追わないんですか？」

その様子を見た姫路が心配そうに明久に言った。

「……追ってどうするの？」

「そんなの謝るに決まっておるじゃろ！ そうすれば島田も……」  
「許してくれるわけないでしょ？ 告白を流して、それであんな事

を言つて、あんな顔をしてた美波にどうという言葉で謝ればいいのさ。  
・・・

明久は、あの時自分が何気なく放つた一言で浮かんだ美波の表情が忘れられなかった。見ているこつちが苦しくなるぐらいの、悲しみに満ちた表情を。いつも元気で笑顔が似合う美波に、あんな表情にさせてしまったのは紛れもなく自分だ。そんな自分が、どんな顔をして美波に謝ればいいのだろうか。そんな明久を見て、秀吉が口を開いた。

「・・・明久。確かにお主はやつてはならんことをしたかもしれん。だが、このままお主は終わる気か？」

このまま島田に自分の気持ち伝えぬまま、一年間を過ごすつもりか！？ もう二度と口を利かぬ気か！？ みなを・・・、島田を護るのではなかったのか！？ 答えるのじゃ明久！！」

その声は、今まで明久が聞いた事のないぐらい秀吉の想いがこもっていた。そして、明久は机から立ち上がった。

「・・・美波に謝ってくる。許してくれるか分からないけど、  
・・・今の秀吉の言葉を聞いて、謝らないと後悔すると思うから・・・、謝ってくる」

その言葉に秀吉は笑みを浮かべ、

「うむ。では早く追いかけた方がいいじゃろう」

「うん」

明久は荷物とトランクケースを持ち、教室から駆け足で出て行った。

「秀吉、お前があんなに感情を剥き出すのって珍しいな。いつもならもつと冷静だろお前」

雄二が驚き半分で言った。秀吉は基本的にポーカーフェイスなので、あんな風に表情を変えるのは少し珍しい。

「うむ・・・、だが明久も島田も言いたい事を言えないように見えただのな。言えない事を言えぬまま終わるのは少し寂しいじゃろうと思つてのう」

「そうですね……。美波ちゃんも明久君も仲直りできたらいいですね」

「……………もしかしたら、仲直り以上になるかもな」

雄二が少し笑みを浮かべながら言った。その言葉に姫路は少し慌て、

「ええっ!? そ、それは少し困ります……………!! でも二人には仲直りして欲しいです……………」

「……………とにかく、二人の仲直りが最優先」

ムツツリー二の言葉には、その場の全員が同感だった。日々なんだかんだ言いながらも、明久と美波は同じFクラスの仲間なのだ。その仲間を放つて置くなど、雄二たちにはできないのだ。

美波は一人、学校の帰り道を歩いていた。その表情は暗く、沈んだ雰囲気を出している。原因は言うまでもなく、明久との一件だ。あれから明久とは一言も口を利かず、話題に出れば怒りがこみ上げ

る。

「……………アキのバカ……………大っ嫌い!」

普段なら冗談でも言わないが、今の美波は本気でそう思っていた。それほどまでに美波の心は傷ついていたのだ。本気で一緒にいてくれると思ったのに、全てなかった事にされていた……………一体あのキスは、気持ちを込めた自分のあの言葉は一体何だったのだろうか。そんな事を考えながら、一人道を歩いていた。

そして、それを見つめている男がいた。その男……ジェイはその少女が文月学園の制服を着ていること、文月学園の生徒を襲えばファイズが文月学園の生徒を助けるだろうという村上の言葉を思い出し、ジェイはワニの性質を持つオルフェノク、クロコダイルオルフェノクになり美波の前に出た。

「……！！ オルフェノク……！！」

突然自分の目の前に現れたクロコダイルオルフェノクに、美波は驚きを隠せない。クロコダイルオルフェノクはワニの歯を模したバツカラーで美波に襲い掛かる。

「きゃああああ！！」

美波は間一髪地面を転がり攻撃をかわし、クロコダイルオルフェノクの攻撃は地面に当たる。しかしその攻撃は容易く地面を砕き、美波は恐怖で動けなくなった。クロコダイルオルフェノクはそんな美波に近づく。美波の頭には、今までの思い出……走馬灯が駆け巡っていた。そして、クロコダイルオルフェノクの拳が美波に振り上げられる……ブウンツ！！

その時、一台のバイクが拳を振り上げたクロコダイルオルフェノクに飛び掛かり、攻撃を中止させた。そのバイクは地面に着地し、運転手がバイク……オートバジンから降りヘルメットを脱ぐ。

「大丈夫？ 美波」

運転手……明久は心配そうな声で呼びかけた。

「……アキ」

美波は今にも泣きそうな声で明久の名を呼ぶ。それを見て明久は、クロコダイルオルフェノクを睨みつけながらオートバジンの後部にあるトランクケースからベルトを取り出し、腰に着けファイズフォンを開きコードを入力する。

『Standing by』

「変身！！」

『Complete』

明久はファイズに変身し、クロコダイルオルフェノクに殴りかかる。しかし、その体はかなり硬くダメージをほとんど与えられていない。逆にクロコダイルオルフェノクに殴られ、地面を転がる。

「う……おおおお！！！」

だがそれでも怯まず、クロコダイルオルフェノクにキックを叩き込む。しかしそのキックも効かず、胸に強烈なパンチをくらいい地面を転がる。そして無理やり起こされ、顔面を殴られる。そのせいでまた転がるが、再び起き上がる。

「……もうやめてよ！！！」

その時、美波の大声がその場に響き渡った。

「……もうやめてよ。どうしてそこまでするのよ。どうでもいいんでしょウチの事なんて！！ もうウチの事なんか放って置いて逃げて……」

「ふざけるなよ！！！！」

その大声に、美波がびくりと震える。今まで聞いた事のない程の明久の大声に。

「美波のことを置いて……逃げられるわけないだろ……！！」

僕はバカだから、美波を傷つけた。もう絶対に傷つけない。美波を傷つける奴がいたら、絶対に傷つかせない！！ 例え世界を敵に回しても、君を護る！！」

そしてファイズが再びクロコダイルオルフェノクに襲い掛かり、クロコダイルオルフェノクに強烈なパンチをくらう。だが、倒れずにふんばり顔面を殴る！ さらにその隙にから空きになった胸にキックを叩き込み、ファイズフォンを取り出しキーを押す。

『Burst Mode』

ファイズフォンをフォンブラスターにし、クロコダイルオルフェノクを撃ち抜く！ クロコダイルオルフェノクは地面を転がり、そ



美波は明久の胸で大声で泣いた。明久はただ黙って、美波の頭を撫でた。

「……気は済んだ？」

「……うん」

数分後、美波は泣き止んでいた。

「そろそろ帰ろうか。……乗っていく？」

明久はオートバジンに乗り、ヘルメットを持っている手を美波に向ける。美波は無言でそれを受け取り、明久の後ろに乗りながらヘルメットを被り、明久の腹に手を回す。明久もヘルメットを被り、オートバジンを発進させる。

「……アキ」

「何？」

「……さっきの言葉、嘘じゃないわよね？」

「当然でしょ？」

「……ふーん……ありがとうございます」

美波は最後の言葉は明久に聞こえないぐらい小さい声で言った。そしてそのまま頭を明久の背中にうずめた。

明久と美波が去った道に、クロコダイルオルフェノクの残骸ともいえる灰が残っていた。その灰が風に吹かれた瞬間、灰が一箇所に集まり、その灰はみるみるクロコダイルオルフェノクの姿を形成した。クロコダイルオルフェノクはジェイの姿に戻り、そこに走って

きたチャコを抱き上げ、その場を離れた。

## 第七話 危機と想いと護りたい者（後書き）

たっくん流クリムゾンスマッシュが出ました（笑）  
次回からはオ  
リジナル章が続くと思います。  
感想お待ちします。

**第八話 ケーキと敗北と新たなカイザ（前書き）**

今回、とうとうあの人物がカイザに変身します。

## 第八話 ケーキと敗北と新たなカイザ

「食べないの？ アキ」

「このケーキは美味しいですよ？」

「いや、食べるよ・・・」

「・・・雄二、あーん」

「遠慮しておく。何やら怪しい薬が入ってるのが見えたからな」

美波と姫路の言葉に明久は苦笑しながら返事を返し、雄二は霧島からの何か薬物が入っているケーキを食べないようにしていた。

明久、雄二、姫路、美波、秀吉、ムッツリーニ、霧島の七人は現在今流行のケーキ屋にいた。しかし、七人はケーキを食べに来たわけではない。

「おいおいお前ら、今回の話の目的を忘れてないか？」

「分かってるわよ。アキが持つてるもう一つのベルトでしょ？」

そう、今回の話の主題は明久が持つているファイズギアと、もう一つのベルト・・・カイザギアについてだ。ちなみにカイザギアは話し合いに出すため、明久が持つてきている。

「今現在の問題は二つ。明久がファイズに変身できた時のようにこいつにも変身できるか、そしてもう一つの問題は・・・」

「・・・俺達でも変身できるか」

「そうだ、ムッツリーニ」

「？ どうして僕以外が変身する事になるの？」

明久が首を傾げながら尋ねた。

「今は明久がオルフェノクを退治しているから何とかなっているが、この前の島田の時のように、明久がいないときにオルフェノクに攻め込まれたら厄介だ。奴らが何体いるかさえもわからないからな。戦力は多いほうがいい」

確かに明久が留守のときに攻め込まれたら、ただの人間の雄二た

中には勝ち目はないだろう。抵抗するためには、ファイズと同じオルフェノクを倒す力を持つカイザの力が必要になる。しかし、カイザになるための条件があるかもしれない。だがそれさえ分かれば変身できる。

「くそ、せめて花形のおっさんがいてくれりゃあ……」

「呼んだかね？」

『うわあ!!!?』

いつの間になっていたのか、明久の隣に今噂していた花形が座っており、ケーキを食べている。

「いつからいたんですか!? てかそれ僕のケーキですし!!」

「それは済まなかったな。だが私は謝らない」

「ウソダンドドコドーン!!!」

「落ち着け明久。地球の言葉を話せ」

暴走してオン○ウル語を叫ぶ明久に、雄二が冷静にツツこんだ。

ちなみに花形は今だ明久のケーキを食べている。

「と、とりあえずそのベルトの事を話してくれませんか?」

「……良いだろう。君達もそろそろ知るときが来た」

姫路の言葉に、花形は口元を拭きながら言った。その場の空気が一気に張り詰める。

「五本のベルトの事はもう知ってると思うが、吉井君のファイズのベルトを含め、オルフェノクを殺すためのベルトは五本存在する。ファイズギア、カイザギア、デルタギア、そして『帝王のベルト』と呼ばれるサイガギアとオーガギアの五つのベルトがね。そしてこれらのベルトには変身するための条件があり、その条件を満たした者だけが変身する事ができる」

「……それは、ファイズギアも?」

霧島の言った言葉に花形は頷き、

「ああ、ファイズギアも例外ではない。しかし、私の推測だが吉井君以外の君達はファイズに変身する事ができないだろう」

「その条件というのは、一体何なのじゃ?」

「……………」

その言葉に、何故か花形は黙ってしまった。何故か言っていると明久に悪いという考えが漂ってきてしまう。

「なるほど……、つまり、明久レベルの馬鹿にしか変身できないということか？」

「だけど、そうなるとカイザになったオルフェノクもアキ並みの馬鹿って事になるわよ？」

「明久レベルの馬鹿となると、明久しかおらんような気がするのう」「ちよつと待ってみんな！！ 何で変身条件〓馬鹿ってことになるの！？」

あまりの扱いに明久が叫ぶ。その意見には花形も賛成しかねるのか、

「いや違う。もっと根本的な理由だ。だが、君達はカイザになることはできる。……大きなリスクを負うがね」

「何だそのリスクって？ 体力を消耗するとかか？」

「灰になって死ぬ」

「リスクがでかすぎるわ！！」

雄二が机を勢い良く叩きながら叫んだ。だが確かにリスクが高すぎる。灰になり死ぬのでは、戦力を増大するも何もない。

「仕方ないだろう。カイザギアはファイズギアと違って安全設計ではない。さて、答えた事には答えたし、そろそろ私は帰るとしよう」

「ちよ、ちよつと待ってください花形さん！！ まだ聞きたいことがいっぱい……！！」

しかし花形は人間ではありえないスピードでその場を離れてしまった。そのスピードは、下手をしたらムッツリー二の召喚獣を超えているほどに。

結局、五本のベルトの事は分かったがそれ以外の事は何一つ分からず、七人は撤収する事になった。カイザギアは今雄二が持っている。

「ったく、あのおっさん肝心な所で役にたたねーな」

「五本のベルトの事が分かっただけでも前進ではないか。何をそんなにいらついでおるのじゃ？」

どこか不満げな雄二に、秀吉が尋ねた。

「分からない事がありすぎるんだよ。オルフェノクの王に、その王様を護る為の五本のベルト。あのおっさんは絶対何かを隠してる」

「でも、一体何を隠してるんでしょうか」

「さあな。だが、隠しているからにはロクなものじゃなさそうだな」

そんな事を話していると、目の前に黒人の男が現れ、そしてその男……ジエイはクロコダイルオルフェノクに姿を変えた。

「おいおい、話してるそばから来やがった！」

「でも、このオルフェノクはアキが倒したはずなのに……！」

「みんな下がって！」

明久はベルトを腰につけ、変身コードを押す。

『Standing by』

「変身……！」

『Complete』

明久はファイズに変身し、クロコダイルオルフェノクに殴りかかる。しかし、やはり体が硬くパンチが効いていない。

「（なら前に効いたこれが効くはず……！！）」

ファイズはファイズフォンを取り出し、フォンブラスターに変形させ、コードを押す。

『Burst Mode』

エネルギー弾をクロコダイルオルフェノクに連射する。だが、前に効いたはずのフォンブラスターが全く効いていない。それどころか銃弾を受けながらもワニの歯のような特殊な形状の剣を持ち、フ

アイズに斬りかかる。

「うわあっ!!」

さらに胸を何回も切り裂かれ、激しく火花が散る。地面に転んだ所を蹴り転がされ、さらに剣で追い討ちをかけられ吹き飛ばす。

「明久君!!」

それを見た姫路が悲鳴じみた声を上げる。明久はポインターをベルトから外し、ミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

そしてフラフラと立ち上がりながらポインターを右足に装着し、ファイズフォンのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

ポインターにフォトンブラッドが注入され、空中にジャンプし前方一回転する。右足のポインターから赤い円錐状の光を放ち、クロコダイルオルフェノクをロックオンする。

「やああああああ!!」

必殺キック・クリムゾンスマッシュがクロコダイルオルフェノクに直撃し、クロコダイルオルフェノクは灰になる。

「・・・・・・・・と思われた。」

「・・・・・・・・ぶうぶうぶう」

だが、クリムゾンスマッシュはクロコダイルオルフェノクの両腕に止められていた。

「なっ!?!」

「おおおおお!!」

次の瞬間、クリムゾンスマッシュを放ったファイズが弾き飛ばされ、コンクリートの壁を貫通し地面を転がった。

「う・・・・・・・・あ・・・・・・・・!」

クロコダイルオルフェノクは立ち上がったファイズに容赦なくパンチを叩き込み、剣と拳でさらにダメージを与える。

「明久!・・・・・・・・クソッ!」

雄二は手に持っていたトランクケースからカイザギアを取り出し、腰につける。

「何をするつもりじゃ雄二!」

「変身するに決まってるだろ!」

「だが、変身条件を満たさなかったら灰になって死ぬのじゃぞ!」

「・・・そんなのダメ!」

「じゃあ黙って見てろっていうのかよ!」

「・・・!! それは・・・」

霧島が返答に詰まっていると、ファイズがまたクロコダイルオルフェノクに吹き飛ばされる。

「が・・・!」

もはやファイズは動く事すらままならない。そのファイズにクロコダイルオルフェノクは勢い良く突進し、強烈なパンチを直撃させた。

「明久ああああああ!!!!」

秀吉の絶叫が響き、ファイズは盛大に火花を散らしながら変身を強制解除され明久の姿に戻り、宙を飛び近くに流れている川へと転落し、水柱を豪快に上げた。それを見たクロコダイルオルフェノクは、もはや雄二たちには興味無いかすぐにその場を離れてしまった。

「おい、待ててめ・・・」

「落ち着くのじゃ雄二! まずは明久を捜すのが優先じゃろう!」

「・・・つく!!」

雄二が秀吉たちと一緒に明久を捜しに行こうとしたその時。

「・・・カイザを使いこなす気はあるかね?」

突然、雄二の背後から声がした。振り返ると、ついさっき別れた花形が立っていた。

「もう一度聞く。君にはカイザの力を使いこなし、戦いに身を投げる覚悟はあるかね?」

「・・・何言ってるんだアンタ。カイザの変身条件を満たさなかった

ら……」

続きを言う前に、花形が口を開いた。

「ああ、灰になり死ぬ。だが、一つだけ死なずにカイザになる方法がある」

「……本当か？」

「君に戦う覚悟があるならば、今すぐにも教えてあげよう」

「……いいぜ、その方法を教える」

「雄二！」

霧島が、普段では絶対に出さないような音量で不安そうな声を上げた。

「心配すんな翔子。すぐに帰れるし」

「雄二……」

「それに、お前のストーキングから逃れられるかぐうああああああああああ！！！！」

「……余計な事を言うからひどい目にあう」

霧島に一言多かったせいで、雄二の頭蓋が握り潰される一歩手前にされた。そして雄二と花形は一緒に行動を共にし、秀吉達は川に流された明久を捜す事になった。

数分後、雄二はどこか分からない地下の施設に座っていた。周りにはよく分からない機械が置かれており、何かの実験施設にも見える。

「これを見たまえ」

花形が指差したのは、ガラスのケースに入っている『X』の記号のような物だ。少し青白く、ケースの中でふよふよと漂っている。

「これはオルフェノクの記号を改造した物……、カイザの記号だ」

「カイザの記号？」

「オルフェノクの記号は元々人間をオルフェノクにする実験で使われていた。そしてこれは私が改造した物だ。オルフェノクの記号はその人間との適合率が強ければオルフェノクにする事ができるが、弱ければオルフェノクにすることはできず、カイザに変身しても灰になり死ぬだけだ。たとえカイザに変身しつづけても記号の力は失われていき、最終的にはその人間も死ぬ。だが、このカイザの記号はオルフェノクにせず、ただカイザに変身するためだけに私が作ったものだ。これを使えば記号は消耗される事なく、装着者を死亡させる事も無く、装着者をカイザに変身させる事ができる」

「そんな便利な物があるなら、最初から使えば良いんじゃないの？」

確かに変身しても死なず、消耗もされないなら最初から使えば良いのかもしれない。しかし雄二の疑問に花形は首を振り、

「いや、そんなに単純な物ではない。確かに適合率が高ければカイザに一生変身し続ける事は可能だ。だがもし低ければ、カイザに変身しても死ぬ。それでも君はこれを受け入れるかね」

その問いに、雄二は笑みを浮かべただけだ。だがそれを肯定と受け取ったのか、花形は目をつむり、

「・・・しかし、何故戦うのだね。吉井君を助けたいからか？」

「馬鹿なこと言うなよ、誰もあんな馬鹿死のうが知ったこっちゃ無い。ただ・・・、あいつに良いとこ取りされるのはムカつくだけだ」

その言葉を聞き、花形も笑みを見せた。

「・・・良いだろう、では準備に取り掛かるから少し待っていてくれ」

花形はその場から消え、雄二は大きな欠伸あくびをした。

『そうですか、ファイズは仕留めそこないましたか』

ジェイは現在、村上と連絡を取っている。ファイズを仕留め損ない、ベルトも明久と一緒に流された今、次をどうするか聞かためだ。『ならばカイザのベルトの奪取か破壊をお願いします。邪魔する人間は、消しても構いません』

ジェイは携帯電話の通話を切り、クロコダイルオルフェノクとなりその場を去った。

「アキー!!!」

「明久ー!!!」

「明久くーん!!!」

雄二が花形と共に去った数分後、秀吉達は川に落ちた明久を捜していたが、まったく影も形も見えず困っていた。

「困ったのう……。ここら辺まで流されていてもおかしくはないのじゃが……」

「そんな……。見つからなかったらどうしよう……」

「あ、諦めちゃダメです美波ちゃん！絶対に見つかります！だから諦めないでください！」

少し弱気になる美波に姫路が励ます。姫路も不安な気持ちは一緒だろうが、嘆いていても明久は見つからない。今自分達にできることは、明久を一刻も早く見つけ出す事だ。

その時、バイクのエンジン音が聞こえてきた。その方向に目を向けてみると、サイドカー付きのバイクが近づいてきている。そのバイクは秀吉たちの前に止まり、運転手がバイクから降りた。

「明久は見つかったか？」

その運転手は、野性味たっぷりの顔に短い髪の毛がたてがみのようにツンツンと立っている男……雄二だった。

「いや・・・、まだ見つかっておらん。それより、話はもう終わったのかのう?」

「ああ、ついでにバイクももらった。ばばあの親友にしちゃあいい奴だ・・・それに敵も来たみたいだしな」

雄二が横に目を向けると、その方向からクロコダイルオルフェノクがゆっくりと歩いてきた。

「明久がいない今なら、余裕で殺せるってか?・・・舐めるなよ」

雄二は余裕の表情を浮かべながら、カイザギアを腰につける。そして、カイザフォンを開き、変身コードを押す。

『Standing by』

カイザフォンを閉じ、胸の前にかざす。

「変身!」

『Complete』

カイザギアにカイザフォンをセットし、フェイスフォンより少々低めの音声が流れる。次の瞬間、雄二の体に沿って黄色いフォトンフレームが形成され、一際強く黄色の光が放たれる。そして、雄二はカイザへと変身を遂げた。

「おらあ!!!」

カイザから強烈なパンチがクロコダイルオルフェノクに放たれ、クロコダイルオルフェノクは後ろに後ずさる。さらに強烈なパンチの連打が繰り返され、最後に胸を強く蹴りこむ。クロコダイルオルフェノクは剣を片手に突っ込もうとするが、カイザはカイザブレイガンをベルトから外しコツキングレバーを引く。

『Burst Mode』

カイザブレイガンの銃口からフォトンブラッド弾が放たれ、クロコダイルオルフェノクに命中する。さらにクロコダイルオルフェノクに連射しなくなり、クロコダイルオルフェノクは地面を転がる。

「はっはっは!!! 無駄無駄無駄無駄無駄あ!!!」

悪役のような事を叫びながら敵を撃ちまくるカイザは、悪役にしか見えない。さらにカイザはミッシェンメモリーをカイザブレイガ

ンに挿入する。

『Ready』

カイザブレイガンをブレードモードにし、クロコダイルオルフェノクを斬りまくり、さらにガンモードで撃ちまくる。

そしてカイザはカイザフォンのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

カイザブレイガンにフォトンブラッドが注入され、クロコダイルオルフェノクに黄色いエネルギーネットを撃ち出し、クロコダイルオルフェノクを拘束する。

「おらあああああ！！！」

カイザブレイガンを右手で逆手に持ち、黄色いXの記号と共にクロコダイルオルフェノクに突進し斬り伏せる必殺技・カイザスラッシュが放たれる。

クロコダイルオルフェノクは黄色のXの記号を浮かべながら、青い炎の爆発をおこし灰になっていった。

「・・・ふう」

カイザはカイザフォンを外し、雄二の姿に戻る。変身を解いた雄二に霧島が駆け寄る。

「雄二・・・、大丈夫・・・？」

「ああ、心配すんな」

「・・・そう」

霧島はどこかほっとしたような表情を浮かべながら言った。そんな雄二たちに秀吉たちも駆け寄る。

「雄二、灰にならないということは花形殿の方法はうまくいったのか？」

「ああ、なんとかな」

「ふむ、どうやらうまくカイザの力を使いこなせたようだね」

突然声がしたかと思うと、雄二の横に花形が現れた。相変わらず神出鬼没な登場の仕方である。

「おっさん、今度は何のようだ？」

「君に渡すものがもう一つあってね。ベルトの後部に付けておきなさい」

花形が渡したのは、デジタル双眼鏡型ポインティングマーカードバイス、カイザポインターだった。雄二はそれを受け取ると、言われたとおりベルトの後部につけた。

「さて、後は吉井君を見つけることだけだね。早く見つけたほうが良い、彼の今の状態ではおそらくオルフェノクに対抗できないだろう」

「おい待ておっさ・・・」

しかし花形は再びその場を離れ、どこへともなく消えてしまった。「ったく、なんなんだあのおっさんは」

「・・・そんなことより、早く明久を見つけることが最優先だ」

「はい、川に流されてしまったなら絶対にいるはずですよ。早く明久君を見つけてみましょう！」

明久を見つげるため七人はその場を離れる。その後、クロコダイルオルフェノクの灰が再びクロコダイルオルフェノクの形を成す。クロコダイルオルフェノクはジェイの姿に戻りその場を離れた。

## 第八話 ケーキと敗北と新たなカイザ（後書き）

カイザの記号は、自分のオリジナルで考えました。  
感想お待ちします。

## 第九話 真実とオルフェノクと人間の心（前書き）

結構シリアスです。オーズ次回で最終回か……。面白かったのに残念です。

## 第九話 真実とオルフェノクと人間の心

「ぐ……」

明久は激痛に耐えながら、目を覚ました。辺りを見渡してみると、そこはどこかの廃工場のような所だった。何故か自分の体に毛布がかけられている。

（えーと……、確か美波達と一緒にケーキ屋に言って……、その後にはオルフェノクに襲われて……、……そうだ川に流されたんだ）

どうやら川に流された自分を誰かが拾ってくれたらしい。しかし廃工場に寝かされていたとはどういう事だろうか？

「あ……気がついた？」

突然、女性のものと思われる声が聞こえ、その方向に目を向ける。そこには、明久と同じ年ぐらいの少女がいた。眼鏡にサラサラとした黒い長髪が目を引く。その少女は明久が目を覚ましたのを確認するとホツとした表情になり、

「目が覚めて良かった。川で流されてたからびっくりしちゃった。それとあなたの持ち物はあそこに置いたわよ」「

少女が指差した方向を見ると、ファイズギアなどが置かれていた。

「あ、自己紹介が遅れたわね。私の名前は蟹川飛鳥よ」

「僕は吉井明久。助けてくれてありがとう」

二人は自己紹介を済ませながら、状況を説明することにした。

「あなたは何で川に流されてたの？」

「えーと……転んだらすぐ前に川があつて……」

「すぐにバレる大嘘をありがとう」

「どうやら明久の嘘はすぐにばれるようだ。」

「まあいいわ。私は少し前からここに住んでるの。ここ、見た目は

こんなだけ結構快適だから」

「でも、お父さんやお母さんは心配しないの？」

明久がそう言うと、飛鳥の顔が少し曇った。明久はその表情を見て、自分は何か悪い事を言ったのかと思った。

「両親は少し前に死んじゃったから。今は私一人だけなの」

「あ・・・ごめん」

「うん。いいわ、もう死んじゃったの結構前だし」

蟹川はすぐに笑顔を戻し、なんでもないかのように言った。だが、さっきの表情から見て完全には気にしていないはずだ。

「そうだ。何か食べる？ おなか減ってるかもしれない・・・」

その時、何者かの足音が聞こえた。飛鳥が後ろを振り向くと、そこにはサングラスに黒コートの男が歩いてきた。

「まさか、こんな所でファイズが見つかるかと夢にも思わなかったな。まあいい、お前の命、貰うぞ」

男の顔に模様が浮かび上がり、男は蠚螂かまきりの性質を持つオルフェノク、マンティスオルフェノクに姿を変えた。

「オルフェノク・・・!!」

明久がとつさにベルトを取りに行こうとすると、飛鳥が明久を護るようにマンティスオルフェノクの前に立ちふさがる。

「邪魔だ。どけ」

しかしその言葉に飛鳥は耳を貸さず、そのまま立ちふさがる。

そして・・・飛鳥の目が灰色になり、模様が浮かぶ。

「何!？」

「!？」

男と明久が驚愕していると、飛鳥は見る間に蟹の性質を持つオルフェノク・・・クラブオルフェノクに姿を変えた。だが普通のオルフェノクとは異なり、左半身が機械化している。

「はあああああ!!」

クラブオルフェノクがマンティスオルフェノクに襲い掛かる。明久の目の前では、仲間であるはずのオルフェノク同士が戦うという、

奇妙な光景が作り出された。

「吉井君！ 早く逃げて！」

クラブオルフェノクが明久に叫ぶ。だが、明久は動けずにいた。今まで自分に襲ってきたオルフェノクは自分や友達を殺そうとしてきた。自分にとってオルフェノクは倒すべき敵でしかない。そのオルフェノクが自分を護る為に戦っている。目の前の二体のオルフェノクを倒すか、それともマンティスオルフェノクのみを倒すか。明久は、自分がどうすればいいか分からなかった。

「くそ・・・この裏切り者が！！」

マンティスオルフェノクの両腕にある鎌がクラブオルフェノクを切り裂き、クラブオルフェノクは吹き飛ばされ飛鳥の姿に戻る。さらに、マンティスオルフェノクは両手の鎌から複数の刃状のエネルギーを生み出し、それを一斉に飛鳥に放つ。飛鳥の姿は煙で見えなくなってしまう。

「ふん。これが裏切り者の末路だ」

マンティスオルフェノクが吐き捨てるように言った。明久はその言葉に怒りを覚えながらも、置いてあるファイズギアを取り、ベルトを腰につける。そしてファイズフォンを開き、コードを押す。

『Standing by』

「変身！！」

『Complete』

明久はファイズに変身し、マンティスオルフェノクの腹にキックを叩き込む。よるめいたマンティスオルフェノクの顔を殴り、次にマンティスオルフェノクの肩を押さえ、腹に何回も膝蹴りを叩き込む。最後に強烈なパンチを叩き込む。マンティスオルフェノクは鎌を振り回すが、ファイズはバックステップでそれをかわし、ファイズフォンを取り出す。

『Burst Mode』

フォンブラスターから光弾が放たれ、マンティスオルフェノクは刃状のエネルギーを生み出し光弾に向けて放つ。お互いの攻撃がぶ

つかり合い、攻撃は相殺されるがファイズはマンティスオルフェノクの顔面を殴る。マンティスオルフェノクは地面に転がり、ファイズはマンティスオルフェノクに馬乗りになり顔面を殴りまくる。

「ぐは！　ぐお！　ぐああ！！」

そして無理やりマンティスオルフェノクを立ち上がらせ、キックを腹に叩き込む！

「うわああ！！」

ファイズはミッションメモリとポインターを外し、ミッションメモリーをポインターに挿入する。

『Ready』

ポインターを右足に装着し、ファイズフォンのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

ポインターにフォトンブラッドが注入され、空中にジャンプし前転一回転をするとポインターから赤い円錐状の光が放たれマンティスオルフェノクをロックオンする。

「ぐ・・・お・・・！！」

マンティスオルフェノクは逃げようとするが、体がまったく動かせない。

「やあああああ！！」

ファイズのクリムゾンスマッシュがマンティスオルフェノクに突き刺さり、マンティスオルフェノクの背後にファイズが現れる。

「うわああああ・・・！！」

そしてマンティスオルフェノクは　の記号を浮かべながら、青い炎の爆発を起こし灰になっていった。

「飛鳥さん！」

ファイズは変身を解き、飛鳥に駆け寄る。飛鳥は仰向けに倒れていて、体から青い炎が出ていた。

「・・・吉井君？　・・・良かった、あいつに勝ったのね・・・」

「・・・飛鳥さん。どうして僕を・・・？」

何故、同じオルフェノクを相手にしてまで明久を護ろうとしたのか。明久にはそれが不思議だった。

「・・・少し昔話になるわ。私は昔、一回死んだの」

「えっ・・・？」

「・・・知らないの？ オルフェノクが一体どういう存在なのかを・・・」

「僕が知っている事は・・・、人類の進化系だとか・・・」

「どうして人類の進化系と言われているかは知らないのね・・・。・・・教えてあげる。オルフェノクは元々・・・」

そこで一回飛鳥は黙った。だが、意を決したようにその口から真実を話した。

「ただの、普通の人間だったの」

「え・・・？」

その言葉に、明久の呼吸が停止した。あの異形の存在が、元々人間だった？ そんな事、信じられない。信じたくない。

「オルフェノクは・・・、一度死んだ人間が蘇ってなった存在。だからオルフェノクは人類の進化系と呼ばれているの。とは言っても、自然死してオルフェノクになった人はそんなにいない。そのオルフェノクをオリジナルと呼ぶけど、ほとんどはただの人間がオルフェノクに襲われオルフェノクの力を注ぎ込まれて、オルフェノクになる。オルフェノクには人間をオルフェノクにする力があるから。と

は言ってもその力に耐え切れる人間は少なく、大半の人はオルフェノクになれず死ぬ。・・・私はオリジナルだけどね」

自嘲するように飛鳥は笑った。まるで、そんな力を手に入れても嬉しくないと言っているかのうように。

「私がオルフェノクになった時には、もう両親はいなかった。そんな私にある日、スマートレディっていう女の人 came の。オルフェノクの事はその人に教えてもらったわ。彼女は言ってた、私がもしオルフェノクとして人を襲い、仲間を増やさないと裏切り者として始末するって」

「・・・何だよそれ」

明久は腹がたった。元々は普通の人間だった人に、人間を襲えなんてふざけている。そんな事ができるわけが無い。

「だけど私は人間として過ごしたかった。だから私はその後も人間を襲わないで普通の生活をしていたの。・・・警察に捕らえられる日まではね」

「どうして警察が？」

「普通の人や警察官は知らないけど、警察の一部はオルフェノクが存在を認知しているのよ。そして、大半のオルフェノクを束ねている組織と、その警察の一部は結託していて、裏切り者の私を実験台に捕まえたの。・・・地獄だったわ。日々私の目の前ではオルフェノクの力を奪う実験や、逆に人間の姿を失わせる実験が行われた。私は左半身を機械化されたけど、何とか研究所を脱走したのよ。それ以来、私はここに住んでるの。逮捕された以上、もう家には帰れないから」

「・・・」

明久は言葉を失っていた。人間の欲望が彼女をここまで苦しめた。そして、彼女の人生を奪った。なのに、何故彼女は自分を助けたのだろうか。

「・・・どうしてあなたを助けたって顔してるわね・・・」

「・・・はい」

「人間が好きだから」

「……」

「たとえどんなに酷い目にあっても、私は人間が好き。確かにあの人たちは酷い人かもしれないけど、全ての人が酷いわけじゃない。人間の中には、絶対に優しい人がいる。……あなたのような。……だから私は人間として生きて、あなたを助けた」

ただ、人間が好きだからという理由。自分が過酷な目にあってきたのにも関わらず、誰かを助けようとし、人間として生きようとするオルフェノク。そして、飛鳥の体の青い炎の勢いが増した。

「飛鳥さん！」

「……もう……ダメね……。最後に……。……お願いを言つて……。いい？」

「……はい」

「……大半のオルフェノクは、大きな力を手にして、人間の心を失い化物となつて人間を襲っている。そんなオルフェノクから、何の罪も無い人たちを護ってください。……いつか、人間と人間の心を持ったオルフェノクは共存できるって、私は信じてる。だから……私の大切に、大好きな人たちを……。……護つて……。……ください……。……ファイズ……。……」

そして、飛鳥の体は青い炎に包まれ、灰になっていた。

「……さようなら。飛鳥さん」

飛鳥の遺骨とも言える灰を握り締めながら、明久は涙を流しながら静かに呟いた。

数分後、明久は廃工場を出て家に帰ろうとしていた。

「アキーー!!!」

前方から聞き慣れた声が聞こえ、前を向くと美波が自分に向かってまっすぐ走ってきていた。そして、自分の胸に抱きついてきた。

「バカ！！ どこ行ってたのよ！！ 後で殴るからね！！」

「・・・ごめんね」

「謝って許してもらえと思うてんじやないわよ！！ バカ！！」

自分の胸で少し泣いている美波の頭を明久は撫でた。しかし、その顔はとても悲しげだった。

## 第九話 真実とオルフェノクと人間の心（後書き）

現在、原作ファイズを一話から見えています。啓太郎の二股の所が面白い（笑）

感想お待ちしております。

第十話 迷いと戦いと決意（前書き）

とうとうオーズ終わりか……。でもフォーゼも楽しみです。

## 第十話 迷いと戦いと決意

雄二がカイザに変身したり、明久が川に落とされたりした日から二日後。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ」

明久は、自分の卓袱台のため息をついていた。

「どうしたのじゃ？ 明久」

「少し元気が無いように見えますけど・・・・・・・・」

心配そうに声をかけた秀吉と姫路に、明久はゆっくりと首を向け、  
「いや・・・・・・・・何でもないよ」

そう言つと、明久はまた卓袱台にひじをつきながらため息をついた。

「・・・・・・・・明久」

今度は、ムツツリーニが明久の側に現れる。

「・・・・・・・・新作入荷・・・・・・・・、・・・・これは自信作」

少し自信ありげにムツツリーニが見せたのは、秀吉のメイド姿が写っている写真と姫路の水着写真だった。だが、いつもなら興奮して買おうとする明久が、

「・・・・・・・・そう」

まったく反応を見せず、そのままポーっとしている。

「・・・・・・・・！！？」

この異変には遠くで見ていた雄二と美波も気付いたのか、明久の側に駆け寄り、

「おい知ってるか明久！ 鉄人が結婚するらしいぞ！」

「・・・・・・・・そう」

「ねえ知ってるアキ！ ウチ、少し胸が大きくなったのよ！」

「・・・・・・・・そう」

「知っておるか明久！ わしは転校するのじゃぞ！」

「……………そう」

ツツコミが入りそうな発現が飛んでいるのにも関わらず、明久は上の空の状態を受け答えしている。そしてまたため息をついた。そんな明久の様子を見て、雄二たちは少し離れ輪を作る。

「（おいどうなっちまったんだ明久は！ いつもならずかさずツツコミが入るだろ！）」

「（うむ……。確かに様子がおかしいのう。特に島田の胸である嘘が出たら、間違いなく余計な事を言い島田に関節技をくらいそうなのじゃが）」

「（……………あの写真にも、絶対に反応を示すはず）」

「（……………こうなったら仕方ねえ。島田、ちよつとあいつに何があつたのか聞いてきてくれないか？）」

「（な、何でウチが！？）」

「（お前相手なら本当の事を言いそうだからだ。頼む）」

「（私からもお願いします美波ちゃん）」

「（……………し、仕方ないわね。坂本達がそこまで言うなら、行ってあげるわ）」

本当は自分も聞きたかつたのだが、それは少し照れくさいので雄二達の言葉を建前にすることにした。

「ねえアキ、どうしたの？ いつものアキらしくないけど」

「……………美波」

ゆっくりと明久は美波に顔を向けた。その表情からはいつもの元気と明るさが無く、美波は胸が苦しくなった。

「アキ、ウチじゃ何の力にもなれないかもしれないけど、どうしたのか言ってみて？ そんなアキ見てるの、辛い」

明久は美波の言葉を聞き、少し間を空け、口を開いた。

「……………もしもオルフェノクに、人間の心が残ってる奴がいたら、美波ならどうする？」

「……………それって、飛鳥さんの事？」

美波達は明久が廃工場から帰ってきて合流した後、明久からオル

フェノクの事、そして飛鳥の事を聞いたのだ。

「ううん。もしもオルフェノクに戦うとき、そいつに人間の心が残っていたら僕はどうすればいいんだろうって思うんだ。もしかしたら、そいつは人間の心が残ってるかもしれない。もしかしたら、そいつはもう化物かもしれない。そうだったら、僕はどうしたら良いんだろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それに・・・・、オルフェノクは人間が生き返って復活してなったって言った。・・・・・・・・じゃあ僕は、・・・・人間を」

「違う！ アキはただウチ達を助けるためにオルフェノクを倒したのよ。アキのせいじゃない！」

「・・・・でも、これから先、オルフェノクが出てきたら、僕はそいつを倒して良いのか分からないよ・・・・」

明久の性格は一言で言えば『優しい』だ。別にその優しさは悪いことではない。その優しさに姫路と美波は惹かれたのだから。だが、今はその優しさが迷いを生み出していた。

オルフェノクでありながら、最後まで人間を愛し、人間の心を持ち死んでいった飛鳥。彼女は心を失ったオルフェノクから罪無き人々を護ってくれと言った。だが、もしかしたら彼女のように人間の心を持ったオルフェノクがいるかもしれない。そのようなオルフェノクがいたら、自分はどうすればいいのか。もちろん殺したくない。しかし、もしかしたら人を殺してしまうかもしれない。その時、自分はそのオルフェノクを殺すのか。それとも、また人間の心が宿るのを信じ、殺さないのか。

そしてもう一つの悩みは、オルフェノクを殺すことだ。オルフェノクは一度死んだ人間が復活した存在。ならば、オルフェノクは元は人間ということだ。自分がやっていることは、人を殺すことなのではないか？ そう考えると、明久はどうすればいいのかわからなかった。

「・・・・・・・・ごめん。今は一人にしてくれない？」

「・・・うん」

明久に言われ、美波は雄二達の所へ戻った。

「そういうことか・・・、あいつらしいと言えばあいつらしい問題だな」

「うむ。これは明久の問題じゃな。わしらが口を出していい問題ではない」

今明久が抱えている問題は、明久が解決しなくてはならない。そう思った雄二達は、明久にはこの話題を出さないことにし、この後にこの話題が再び出ることには無かった。

後日、美波と秀吉は図書館にいた。とは言っても、二人はデートなどをしている訳ではない。たまたま図書館に来ていた秀吉に、本を借りに来た美波が会っただけである。

「しかし島田よ。その本は明久のために借りたのかの？」

「な、何言ってるのよ！ そんな訳無いでしょ！」

「・・・そのような本を持っていても説得力がないと思うのじゃが・・・」

美波の持っている本には、『馬鹿を天才に変える方法』や『馬鹿を直す方法』、さらには『気になる彼を虜にする方法』などのタイトルが書かれていた。

「まったく、明久も憎い奴じゃ！ これほど想いを寄せられておるにも関わらずまったく気付かんとは」

「うん、ウチもそう思う。でも、そこがまた良いんだあ・・・」

少し顔を赤くしながら、美波が言った。

「それで、告白はいつするのじゃ？」

「えっ!？」

「当たり前じゃろう。明久は気付いておらんが、姫路にも好意を寄せられておる。うかうかしとったら、姫路に取られてしまうぞ？」

「・・・いつかはするわ。できれば、近いうちに」

美波ははつきりとした口調で、そう言った。その言葉に秀吉は笑って、

「まあ頑張るのじゃ。だがその前に素直になつたほうが良いと思うがのう」

「わ、分かつてるわよそんなの!」

美波が言い返したその時。

「きゃああああああ!!」

女性の悲鳴が館内に響き渡つた。秀吉と美波がその方向に目を向けると、灰色の異形――――フライングフィッシュオルフェノクが女性の首を掴んで持ち上げていた。そして、オルフェノクから銚のような物が飛び出し、女性の心臓に突き刺さる。すると、その女性は灰になっていった。その光景を見た周りの利用者から、悲鳴が響く。

「木下! アキに電話して!」

「分かつたのじゃ!」

美波から携帯電話を受け取り、秀吉は急いで明久に電話をかけた。

その頃、明久は家のソファで寝ていた。数日前から考え続けている問題を考えながら。

(・・・僕は一体)

そんな事を考えていると、携帯電話に使っているフェイスフォン

から、電話の着信音が鳴っているのに気付いた。相手は美波だ。

「……………もしもし。どうしたの美n……………」

『あ、明久！ オルフェノクじゃ！』

「!?？ 秀吉!?？ 今どこ!?？」

相手が美波ではなく秀吉だったことにも驚いたが、今はオルフェノクという単語の方が気にかかる。場所を聞くと、ここから近くの図書館だ。明久はフェイスフォンを閉じ、フェイスギアの入ったトランクケースを持ちその図書館に向かった。

明久が図書館につき、中に入ろうとしたとき。

「うわあああああああ!!！」

男の悲鳴が聞こえ、その方向を向くと男の目の前にアルマジロの性質を持つオルフェノク……………アルマジロオルフェノクが立っていた。明久は変身しようとするが、あの時の飛鳥の顔と、自分の考えが明久の動きを邪魔した。

「あつ……………! ぎゃあああああああ!!！」

明久が止まっている間に、男はアルマジロオルフェノクの大剣を受け倒れた。アルマジロオルフェノクはそのまま立ち去ろうとしている。

「まっ……………!!！」

明久が止めようとする、倒れた男が立ち上がって、明久に向かって手を差し伸べながら歩いてきた。そして、明久の前まで来たところで、その男は灰になり、明久に向かって倒れながら死んだ。

「……………!!！」

明久は、倒れるときに自分の掌についた男の灰をただ呆然と見ていた。しかし、館内から悲鳴が響くと明久は館内に向かって走り出した。



そして、明久はファイズフォンを開き、変身コードを押す。

『Standing by』

明久はファイズフォンを天に高く掲げ、

「変身!!!」

『Complete』

ベルトにセットし、紅いフォトンフレームが明久の身を包む。紅い光が館内を照らし、明久は紅き閃光の戦士……ファイズに変身した。

「うおおおおお!!!」

明久がライジングフィッシュオルフェノクに向かって突進し、窓を割り外の駐車場へ飛び降りる。そしてライジングフィッシュオルフェノクの腹を殴り、怯んだところで膝蹴りを何回も叩き込み、最後に拳を頭に叩き落とし地面に倒れさせる。さらに倒れているライジングフィッシュオルフェノクを蹴り転がし、起き上がるライジングフィッシュオルフェノクに蹴りを叩き込む。ライジングフィッシュオルフェノクが水中銃から銃を発射するが、ファイズはそれを弾き落とし、再びライジングフィッシュオルフェノクに拳を叩き込む。

「オオ!!!」

さらに攻撃を加えようとするファイズに、突然現れたアルマジロオルフェノクが羽交い絞めにする。それを見たライジングフィッシュオルフェノクは水中銃を構え、ファイズを撃とうとする。だがファイズはくるりと回り、アルマジロオルフェノクをライジングフィッシュオルフェノクの方角に向ける。

「ゲハッ!」

ライジングフィッシュオルフェノクの銃がアルマジロオルフェノクに当たり、ファイズの拘束が解かれる。ファイズはアルマジロオルフェノクを蹴り飛ばし、アルマジロオルフェノクは車のフロント

ガラスに激突する。ファイズはポインターを外し、ミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

右足に装着し、ファイズフォンを開きENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

フライングフィッシュオルフェノクに向かって高くジャンプしながら空中一回転し、ポインターから赤い円錐状の光が放たれ、フライングフィッシュオルフェノクを拘束・ロックオンする。

「やあああああああ！！」

クリムゾンスマッシュがフライングフィッシュオルフェノクに突き刺さり、ファイズがフライングフィッシュオルフェノクの背後に現れると同時、フライングフィッシュオルフェノクは の記号を浮かび上がらせ、青い炎を上げながら灰になった。

そして次に大剣と盾を持ったアルマジロオルフェノクに殴りかかるうとした瞬間。

ドガ！！

「ぐわああああああ！！」

人型の形態……バトルモードとなったオートバジンが現れ、アルマジロオルフェノクに殴りかかる。さらに前輪、バスターホイールから銃弾を乱射し、アルマジロオルフェノクを地面に倒す。

「ありがとう」

オートバジンに駆け寄りながら、胸部のスイッチを押すと、『ビークルモード』と音声流れながらオートバジンはバイク形態に戻る。そして、左ハンドルのミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

左ハンドルが抜かれ、紅い刀身が生成されハンドルはファイズエッジになり、アルマジロオルフェノクを数回斬り付ける。アルマジロオルフェノクは盾で防ごうとするが、鋭い突きで盾が壊された。そしてファイズエッジと大剣が数回ぶつかり合い、鏝迫り合いになる。

「りゃあ！」

ファイズが下からすくい上げるようにファイズエッジを振るうと、アルマジロオルフェノクの大剣が弾き飛ばされ、空中を舞う。武器を失ったアルマジロオルフェノクを何回も斬りながら、最後に蹴りを入れ吹き飛ばす。そして、ファイズフォンをのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

「はあっ!!！」

ファイズエッジの刀身にフォトンブラッドが注入され、紅色に輝いた刀身をアルマジロオルフェノクに向かって振るう。赤いエネルギー波がファイズとアルマジロオルフェノクの間にあつた車を切り裂き炎上させながら突き進み、アルマジロオルフェノクに当たると円柱形になりアルマジロオルフェノクを拘束する。そのアルマジロオルフェノクに、ファイズは突進し一気に距離を詰める！

「はっ!!！ やあ!!！」

ファイズエッジでオルフェノクを切り裂く技、スパークルカットで数回アルマジロオルフェノクを切り裂き、アルマジロオルフェノクは の記号を浮かべながら青い炎を上げ灰へと変わっていった。

変身を解除した明久は自分の掌をじつと見る。死んだ男の灰は、もうそこに残っておらず、明久はその手を握った。

「アキ！」

横を見ると、美波と秀吉が駆け寄ってきた。

「もう大丈夫かろう？」

「うん、もう大丈夫だよ」

その言葉に、秀吉と美波はほっとした表情を浮かべる。

「良かった・・・。アキが元に戻ってくれて・・・これで遠慮なく殴れるわね」

「・・・僕が元に戻ったから殴ろうとする理由を何でか聞きたいけど、今はいいや」

そして、いつものように三人は笑った。笑っている明久の表情は  
晴れやかで、迷いは無かった。

第十話 迷いと戦いと決意（後書き）

感想お待ちしています。

第十一話 葉月とチャコと最後（前書き）

平成仮面ライダー英雄伝と変身伝を買いました。どちらもライダーファンにとっては面白いものでした。

## 第十一話 葉月とチャコと最後

明るい日差しが差す中、カフェテラスに二人の男が座っていた。

一人はスマートブレイン社長、村上。もう一人はラツキークロバーの一人、クロコダイルオルフェノクのジエイだ。いつも通りチワワのチャコを膝に乗せている。

「今日は別にあなただを責めに来たわけではありません。激励しに来たのです。あなたは『上の上』のオルフェノクだ。それに、三つの命のうちの二つの命を失ったからあなたが怯えているとも思いません。・・・チャコにも会いたかったですしね」

村上はそつとチャコの頭を撫でた。

「・・・しかし、あなたは吉井君の命も、カイザの所有者の命も奪えていない。このままではあなたも裏切り者になってしまう。チャコはあなたの温もりの中で生きてきた。あなたが死んだらチャコは生きていけない。・・・その為にも、早く吉井君を殺したほうが良い。この仕事が終わったとき泊まるホテルはすでに探しています。チャコも連れて行ける極上ホテルをね」

「very good」

ジエイはそう言うと、またチャコを撫でた。村上はそんなジエイとチャコを見て笑みを浮かべていた。

場所を離れて、ジエイはチャコを連れて公園にいた。ジエイの手にはボールがあり、今にもそれを投げようとしている。そしてボールを投げ、チャコはボールを追って消えた。

「・・・チャコ!?」

だが、待つてもチャコが帰ってこない。

「チャコ!」

ジエイは慌ててベンチの下などを探すが、チャコはいない。急いで周りを走ると、一人の少女がチャコを抱きかかえていた。少女はツインテールに、アーモンド状の目を持つ小学生ぐらいの少女・

・島田美波の妹、島田葉月だった。

「チャコ!」

「? このワンちゃん、お兄さんのワンちゃんですか?」

「yes」

「そうだったんですか。それならお返しします! もうチャコちゃんから目を離しちゃダメですよ!」

「ゴメンナサイ」

ジエイは葉月の前に駆け寄りながら目を離してしまったことに謝り、チャコを急いで受け取った。そして葉月に軽くお辞儀すると、その場を去った。

「葉月!、何してるの?」

「あ! お姉ちゃん!」

葉月は自分に近づいてきた美波と合流し、その場を離れた。

「はぁ……。また水と塩の生活か……」

明久は自分の手にあるゲームソフトが入っているゲーム店の袋を見ながら、ため息をついた。仕送りがきてから、即欲しかったゲームを買ったのだ。しかし、これでまた家の食費が苦しくなってしまった。

「……本当にバイトしないとまずいかも。今バイト募集してる所ってあ「バカなお兄ちゃん！」ったかなあ!？」

突然、みぞおちに衝撃が走った。見てみると、葉月が自分の腹に抱きついている。

「バカなお兄ちゃん！ お久しぶりです！」

「な、何だ葉月ちゃんか。久しぶり」

「葉月ー、一体どうしたの……。ってアキ？」

美波が小走りでやってきた。両手にはスーパーの袋がぶら下げられている。

「美波、美波こそどうしたの？」

「別にウチは今日葉月と一緒に買い物に行っただけよ。アキは？」

「僕はゲーム買いに。でもこれでまた食費が無くなっちゃったよ。」

今日の昼はまた塩だよ。はは……」

明久が力無い笑いをすると、美波が何かを考え込むような表情になった。何やらぶつぶつ言っているようだが、どうしたのだろうか？

「ね、ねえアキ」

「？ 何？」

「ちょ、ちよつと食料品買いすぎちゃったの。それで、もし良かったら、ウチがお昼ご飯作ってあげるけど……」

「本当!？」

美波の提案に、明久は迷い無くとびついた。食費がまずい今、その提案は何よりもありがたい。

「ふえ？ お姉ちゃん、確かその量で良かったと……」

「ありがとう美波！ 助かります！」

「べ、別に食材が余っただけだからよ！ そうと決まったら早く

行くわよ！」

美波は顔を赤くしながら、明久の手と葉月の手をつないで明久の家に向かう。

「それで、アキは何を食べたいの？」

明久の家に向かいながら、美波が聞いた。

「うーん……。別に何でもいいけど」

「そういうのが一番困るのよ」

「葉月はオムライスが良いです！」

「オムライス……。うん、僕もオムライスが良いや。そうだ、料理手伝うよ。僕も結構料理してるし」

「いいわよ。今日はウチが作ってあげるわよ」

「でもそれじゃ悪いよ」

流石に女子一人に任せるには悪いと思ったのだろうか明久が言った。

「いいわよ。ウチが言い出したことなんだから」

「でも……」

「いいから！」

「……はい」

ここまで強気に出る美波も珍しい。そこまでして明久に昼ご飯を食べさせてあげたいらしい。そして曲がり角をまがる。

「……！！！」

その時突然、美波が止まった。突然の急停止に、明久と葉月は前につんのめりそうになる。

「どうしたの美波……？」

明久が尋ねながら前を向くと、そこにはクロコダイルオルフェノクが立っていた。手には巨大な大剣を携えている。どうやら最初から戦闘態勢のようだ。

「お、お兄ちゃん……」

明久が下を向くと、葉月が自分のシャツの裾を握っており、目からはつつすらと涙が滲んでいる。明久はしゃがみこみ、葉月と目を

合わせる。

「・・・大丈夫だよ。葉月ちゃんと美波は、絶対に護るから」

明久は改めてジエイと向き直り、ゲーム店の袋を握っている手とは反対側の手に握っているトランクケースからベルトを取り出し、腰に着けながらファイズフォンを開きコードを押す。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

明久はファイズに変身すると、クロコダイルオルフェノクに突進する。クロコダイルオルフェノクは大剣を振るうが、ファイズは身をかめ剣をかわし、腹にパンチする。クロコダイルオルフェノクが横殴りに殴ってくるが右腕で防御する。少し右腕が痛んだがそんな事は気にせず、左腕でまた腹を殴る。

「グオアアアアアアアア！」

クロコダイルオルフェノクが吼え、ファイズに剣を振るいファイズは剣をかわす。しかしその直後にクロコダイルオルフェノクのパンチがファイズの胸に直撃し、ファイズはコンクリートをぶち破りながら地面を転がる。

「あ・・・が・・・」

ファイズはよろよろと立ち上がるが、クロコダイルオルフェノクは即座に距離を詰め、大剣でファイズを何回も切り裂き、キックをファイズの胸に叩き込む。ファイズは火花を散らしながら地面を転がる。そんなファイズにクロコダイルオルフェノクは容赦なく拳を何回も叩き込み、最後に大剣を大きく振りかぶりファイズを吹き飛ばす。

「が・・・！！」

大剣の直撃を受けたファイズは地面を転がりまともに動けなくなつた。

「アキ！！」

美波がファイズに駆け寄ろうとするが、足が動かない。助けたい

のに助けられない。自分はこんな時明久を助けたいというのに、肝心な所で助けられないというのか。美波が唇を噛もうとしたその時「頑張ってください！ バカなお兄ちゃん！」

突然、葉月が叫んだ。その声は明久に届いたのか、指がピクリと動いた。

「負けないでください！ 死んじゃ・・・嫌です・・・！」

葉月の目から涙がこぼれる。その言葉に、美波も叫ぶ。

「頑張つてアキ！ 負けないでアキ！ ううん、そんな事より・・・、死なないで・・・！」

美波も叫びながら、目から涙がこぼれている。その声が聞こえたのか、ファイズはポインターをベルトから外し、ミッションメモリーを挿入し、右足に装着する。そしてファイズフォンを開き、ENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

ポインターにフotonブレードが注入され、右足をクロコダイルオルフェノクに向ける。赤い円錐状の光が放たれ、クロコダイルオルフェノクは両腕で防ぐ構えをとる。

「りゃああああああ！！！」

クリムゾンスマッシュがクロコダイルオルフェノクとぶつかり合い、そのまま激しい音を鳴らしながら、二人の力が拮抗する。

「うおおおおおおお！！！」

激突の末、クロコダイルオルフェノクがファイズを真上に弾き飛ばした。クロコダイルオルフェノクはそこで勝利を確信する。だが、ファイズはまだ諦めていない。真上に弾き飛ばされたファイズはファイズショットを外し、ミッションメモリーをファイズショットに挿入し、出てきたグリップを掴み、ファイズフォンのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

そして、そのまま重力に従って真下に落ちる。その真下には、歓声を上げようとしているクロコダイルオルフェノクが無防備の上に

体を見せていた。

「うおおおおおおー!!」

そのまま落下し、グランインパクトがクロコダイルオルフェノクに直撃する。クロコダイルオルフェノクは倒れ、青い炎を上げながら灰へと変わった。

「・・・あ、危なかった」

ファイズは変身を解除し、明久の姿に戻る。事実、かなり危なかった。はつきり言って、真上に飛ばされなかったら勝ち目がなかっただろう。

「バカなお兄ちゃん!」

「ぐふっ!?!」

クロコダイルオルフェノクとの戦いでボロボロになった明久のみぞおちに、葉月がぶつかってきた。戦いの影響もあつてか、かなり痛い。

「う・・・、バカなお兄ちゃんが、無事で良かったです・・・」

「ま、まったく、あんな相手に苦戦してんじゃないわよ! バカ!

美波が目を真っ赤にしながら言った。美波は知らないが、相手はラッキークローバーと言われる『上の上』のオルフェノクの一体である。それを倒せたのだから、明久は結構実力をつけたことになる。明久が二人をなだめていると、一匹のチワワ、チャコが明久の足元にくっついてきた。

「ん? 何だろこの犬」

「あ! そのワンちゃんはチャコちゃんです!」

「チャコ?」

「はい! 公園で会ったお兄さんのワンちゃんです! だけどチャコちゃんまた一人になっちゃったですか? あのお兄さんはどうしたんですか?」

明久が周りを見渡すが、飼い主らしき人物はいない。となると、チャコというチワワは捨てられてしまったのだろうか? 飼い主を探してもいいが、誰なのか分からないし、そもそも本当に捨てられ

てしまったのかもしれない。

「・・・うーん。仕方ないわね。葉月、飼い主が見つかるまで、ウチ達がこの子の面倒を見てあげましょ。もしかしたら、捨てられちゃったのかもしれないし」

「本当ですか！？　ありがとうございます、お姉ちゃん！」

葉月は花が開くように笑顔を見せた。何だか、その笑顔を見ただけで日常に帰ってきたという気がする。

「でも知らなかったです！　バカなお兄ちゃんは正義のヒーローだったんですね！」

「へっ？」

「葉月たちを護ってくれました！　本当にありがとうございます！　おっしくなったら、絶対に葉月のおむこさんにしてあげるです！」

その言葉に美波は慌てて言った。

「な、何言ってるのよ葉月！　こんなのと付き合っちゃダメよ！

絶対苦労するからやめなさい！　・・・それに、アキのお嫁さんにはウチが・・・」

「えっ？」

「な、何でもないわよ！」

美波は顔を赤くしながら、首を振った。明久は、何故美波が顔を赤くしているのかまったく分からなかった。

- B A R 『クローバー』 -

その時間には、まだ影山しかいなかった。影山が店の準備をしていると、電話がかかってきた。

「はい。もしもし」

『ジェイが倒されました』

電話の相手は村上だった。そして、その言葉は影山の表情を一変させ、その場の空気を張り詰めさせる。

『あなたの出番ですよ。影山さん』

その言葉に、影山は妖艶な笑みを浮かべた。

**第十一話 葉月とチャコと最後（後書き）**

次回予告をしておきます。

次回、『ピザとバイトと音速の戦士』

感想お待ちしております。

第十二話 ピザとバイトと音速の戦士(前書き)

投稿遅くなって本当に申し訳ありません。

## 第十二話 ピザとバイトと音速の戦士

あるビルの屋上に、一人の男が佇んでいた。その男は一見スーツ姿で、どこかの社員に見える。実際は会社の部長なのだが。

「乾杯は済ませたかしら？」

そんな男に、近づいてきた女がいた。女……影山はゆっくりと男に近づく。

「君か？ これを送ってきたのは」

男が手に持っているのは、シャンパンだった。何の知識も無い者が者が見ても、かなり高級なものだと分かるほどに。

「……あなたはオルフェノクでありながら、人間を襲うのを拒んでいる。悪いけど、生かしておくにはいけないわ」

影山はそう言うと、男にさらに近寄ろうとする。男は軽く悲鳴をあげながら影山から遠ざかるうとする。

「どうしたの？ 変身しない気？」

影山が聞くが、男はただ後ろへ下がる。影山はそんな男に失望したように小さく息を吐き、手にワイングラスを出現させる。そしてワイングラスに透明な酒が満たされ、やがてワイングラスからこぼれる。

「う、うわあああああああ！！」

男はその酒にかかり、灰になって消滅した。

「……乾杯」

影山は微笑みながら、ワイングラスを傾け酒を飲んだ。

影山が酒を飲み干すと、携帯電話に着信が入った。相手は村上だ。「どうしたの？ 村上君」

『あなたに吉井君を殺すほかに、もう一つやってもらいたい事があるのです。琢磨さんにも言ったんですが、急いでやらなければなりませんからね』

「・・・ラッキークローバーの欠員の補充かしら？」

『流石です』

ラッキークローバーには、『幸せの四葉』という意味がある。つまり、四人が揃ってなければ意味が無いし、戦力的にも大きくダウンしてしまう。それを防ぐためにも、ラッキークローバーに入れるもう一人のオルフェノクを見つけないければならない。

『しかし、ラッキークローバーに入れる程の力を持つオルフェノクなど、そうそういません。それに、あなたが最優先にやることは吉井君を始末する事です。できたらで良いのでお願いします』  
「分かったわ」

影山は通話を切り、携帯電話をしまいながらその場を去る。ビルの下まで下り、車に乗りエンジンをかけようとしたところで、若い男が車のガラスに顔を出した。

「ラッキークローバーの影山冴子さんですよ？ 実は自分、ラッキークローバーに入りたいんです。何かお手伝いできる事はありますか？」

影山はただ顔に笑顔を浮かべながらこう言った。

「積極的ね・・・、嫌いじゃないわよ」

「なるほど、それでまたバイトを探していると」

「うん。仕送りも使い切っちゃったし。またバイトしなきゃならないんだよ」

明久は昼休みの教室で、アルバイトの相談をしていた。この前にゲームを買ったせいで、また金が底をつこうとしているのだ。しか

もそれだけではない。食費だけでなく、ガス代、水道代、電気代などが払えなくなる状況になりつつある。このままでは唯一の食料である水と塩さえも買えなくなってしまふ。そうなったら明久の辿り着く結果は餓死だ。何としてでも、それだけは避けねばならない。

「そういえば、この前ピザ屋でバイト一人募集してたぞ。何でも店員が辞めたらしくて、その穴埋めらしい。時給は確か、千円だったと思うが」

「結構いい条件だね。でも、どうしてそんなに時給がいいんだろう?」

「何でもその店長のおっさんが中々いい奴の上にピザの味も良いらしくてな。そのおかげでお得意さんと結構いるらしいし、売り上げもそこそこ良いんだってよ。行ってみたらどうだ?」

「……明久に選り好みをする余裕は無い」

ムツツリーニの言うとおり、今の明久にはそんな余裕は無い。命をつなぐ為にもバイトにすぐるしかないだろう。

「じゃあ、今日の帰りに面接に行ってくるよ」

「おう。頑張れよ」

「……（コクリ）」

そんなわけで明久は学校の帰りにそのピザ屋に寄り、その場で面接を受け採用となった。

「お疲れ！ 少し休憩を入れていいぞ！」

「ありがとうございます」

そしてアルバイトの土曜日にアルバイトに行った明久は、何とか午前の仕事を終えていた。今回は前のアルバイトのようにかんだり、転

ばない事に成功した。

「んじゃあ俺はこれからピザの宅配に行ってくるから、悪いけど店番を頼むわ!」

「あ、はい。分かりました」

ピザ屋のマスターはそう言い残し、ピザを宅配のバイクに乗せながら、バイクに乗り出発した。そしてマスターと入れ替わるように、新しいお客さんが入ってきた。

「はい。いらっしやいま・・・」

明久はお客さんを迎えに出ようとしたが、動きが固まる。何故なら、

「よお明久。やってるな」

「アキ。今回はちゃんとやってる? またクビになんてされたら大変な事になるわよ」

入ってきたのはいつものメンバー、雄二、美波、姫路、秀吉、ムツツリー二の五人だった。

「・・・今は明久君一人だけなんですか?」

「他の人たちは皆宅配とかに行ってるよ。ここが有名なのは本当みたい」

「・・・金はどれぐらい貯まった?」

「まだそんなには・・・。まだ働き始めたから仕方ないけどね」

明久たちが雑談をしていると、店に電話が入る。

「はいもしもし。・・・えっ? はい、分かりました。いますぐ行きます」

明久は電話を切るが、どことなく表情が曇っている。

「どうした?」

「うん・・・。今配達の話が来ちゃってさ。行かなきゃならないんだけど、いま他の店員がいないから、店番どうしよう・・・」

明久が頭を抱えていると、タイミングよく数人の店員が帰ってきた。

「あ、ちょうど良かった。すいませーん。ちょっと配達行ってくるんで店番お願いできますかー？」

「ああ分かった。早く行って来い」

「ありがとうございます。じゃあちょっと行ってくるね」

「気を付けて行けよ」

「道を間違えないようにするんじゃぞ」

「……道に迷ったら、交番に尋ねに行け」

「みんなは僕の精神年齢を何歳だと思ってるの？」

「「幼稚園児並」」

「そんなに低くないよ！ もう良いよ！ 行つてきまーす！」

そう言い、明久はピザを持って宅配に行った。ちなみに、ちゃんとファイズギアは持っている。

「……そうだ。明久、待て……。つてもう行つちまったか」

「どうしたの坂本？」

ピザを注文しようとした美波が尋ねた。

「いや、この前花形のおっさんから明久にこれを渡すように頼まれてたんだ。すっかり忘れてたけどな」

雄二が取り出したのは、赤と黒を基調にしたアナログ式の腕時計のようなものだ。だが普通の腕時計とは違って少し大きく、赤いスイッチと黒いスイッチのようなものがついている。

「では早く渡しに追いかけたほうが良いのではないか？ 今から追いかければ追いつくかもしれないぞ」

「……ちつ、仕方ねえな。ピザ俺の分まで残しておけよ」

雄二は店を出て、ヘルメットを被りながらバイク・サイドバツシヤーにまたがり出発した。

この時、雄二たちだけじゃなく、明久も気付かなかった。

店内のカウンターの上に、高級なシャンパンが置かれていることを。

雄二がサイドバツシャーで道を進んでいると、眼鏡をかけた知的な外見の男が道の真ん中で立ちながら詩の本を読んでいた。雄二はサイドバツシャーを止め、ヘルメットを脱ぎながら男に言った。

「おい、危ねえぞ！」

男は雄二に一瞬目を向け、それからまた本に目を戻した。

「・・・あなたがカイザのベルトの持ち主ですか」

その言葉に、雄二の鋭い目つきがさらに鋭くなる。

「・・・テメエ、オルフェノクか？」

「・・・ただのオルフェノクではありませんがね」

男・・・琢磨は本をなぞりながら言った。

「知っていますか？ オルフェノクの力を完全に操る事ができるオルフェノクは、人間の姿でも力を発揮する事ができるんですよ」

琢磨は掌を雄二に向けると、その手から青白い光弾が生み出される。そして、その光弾を雄二に向け放つ。

「うおっ！」

雄二は光弾をかわし、トランクケースからカイザドライバーを取り出し腰につけ、カイザフォンを開きコードを入力する。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

雄二はカイザに変身し、琢磨にパンチを放つ。

「何！？」

カイザは仮面の下で驚愕の表情を浮かべる、何故なら、琢磨が手にした本で自分の拳を止めていたからだ。

「うおおおおお！！！」

カイザはパンチの連打を琢磨に放つが、それら全てが止められてしまった。

「おいおい・・・、マジかよ」

カイザは呆然とした表情で呟いた。明久や自分が今まで戦ってきたオルフェノクとは格が違う。例えるなら、クロコダイルオルフェノク並の強さだ。

そして、琢磨の顔に模様が浮かび、琢磨はムカデの特性を持つオルフェノク・・・センチピードオルフェノクに変身した。

「ふんっ！」

センチスピードオルフェノクは拳を放つが、カイザは左腕で攻撃をいなし、カウンターで右の拳を放つ。しかしその攻撃はお見通しのようなったようで、逆に拳を止められ胸を蹴られる。

「ぐっっ！」

カイザはその蹴りで距離を離される。すると、センチピードオルフェノクは棘のついた鞭を出現させ、カイザを攻撃する。

「ぐああっ!!！」

鞭を胸にくらい、カイザはふらつく。センチピードオルフェノクはそんなカイザに追い討ちをかけるように、光弾を連続で発射する。「がああああっ!!！」

光弾を直撃を受け、カイザは火花を散らしながら地面を転がる。センチピードオルフェノクはカイザに止めを刺すかのように近づいてくる。絶体絶命に思われたその時。

『バトルモード』

サイドバツシャーから音声が発せられ、サイドバツシャーが自動で走ってくる。そして、サイドバツシャーがバトルモード・・・二足歩行重戦車形態に変形する。左腕には六連装ミサイル抱・エクザップバスター、右腕に四連装バルカン抱・フォトンバルカンを装備したその姿は、まさに重戦車と言っても間違いはない。そしてバトルモードとなったサイドバツシャーが、その巨体に似合わぬ速さで、センチピードオルフェノクを殴りつける。

「ぐわああああ!!」

センチピードオルフェノクは吹っ飛び、地面を転がる。カイザはサイドバツシャーに近づくと、高くジャンプし運転席に乗る。

「へっ。あのおっさんも、中々面白い事してくれるじゃねえか。あばよ、お前の事はあと一時間ぐらいは忘れねえ!」

カイザは運転席にある画面を操作し、センチピードオルフェノクに向かつて六発のミサイルを発射、さらに分裂し数十発のミサイルとなりセンチピードオルフェノクに向かう。

激しい轟音が響き、その場に煙が上がる。そして、煙が上がるとそこにはセンチピードオルフェノクの姿はどこにも無かった。

「逃げられたか。っと、今はそんなことより早く明久に渡さないと  
な」

カイザはサイドバツシャーをビークルモードに戻し、道路を走っていった。

その頃、ピザ屋のマスターは配達で道路を走っていた。だが、そのバイクの前に車が立ち塞がった。

「危ねえな! 何をするんだ!」

マスターの怒鳴り声に出てきたのは、サングラスをかけた女と若い男だった。

「乾杯は済ませたかしら?」

「・・・? 何を・・・」

「お前はオルフェノクでありながら人間を襲わない。そんなオルフ

エノクに、生きている価値は無い」

そして女……影山と若い男の顔に模様が浮かび、影山はエビの特性を持ったロブスターオルフェノク、男はさそりの特性を持ったスコールピオンオルフェノクに変身した。

「どうする？ 今ならチャンスとして、人間を襲えば見逃してあげるけど……」

マスターは怯えながらも、しつかりと声を出して言った。

「い、嫌だ、俺は人間だあああ！！」

マスターはそう叫びながら逃げるが、影山はマスターとの距離を一気に詰め、背中を蹴る。

「ぐわっ！」

マスターは地面を転がりながらも逃げようとする。ロブスターオルフェノクは呆れたように言った。

「何してるの？ せめて変身しなさい！」

手に持ったサーベルで攻撃するが、マスターは逃げ回りオルフェノクに変身しようとしないう。そんなマスターに、スコールピオンオルフェノクの先端に分銅がついたフレイルが襲い掛かる。

「うわあああああ！！」

マスターはかろうじてかわすが、腰が抜けて動けなくなってしまった。ロブスターオルフェノクとスコールピオンオルフェノクはマスターにゆっくりと近付いていく。

「もう大好きなピザが焼けなくなるわよ？ それでも良いの？」

「！！」

その言葉は、マスターにとって一番辛い言葉だった。今自分が死ねば、もうピザは焼けなくなってしまふ。そうなるのは絶対に嫌だ。それを防ぐためには、人間を襲うしかない。

「マスター！」

鋭い声が響き渡り、一人の人影が走ってきた。その影は、明久だった。明久はファイズギアを腰につけ、ファイズフォンを開きコードを押す。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

ファイズに変身しロブスターオルフェノクの顔面を殴り、ファイズフォンをフォンブラスターにし、コードを押す。

『Burst Mode』

三発の光弾がスコールピオンオルフェノクに向けて放たれ、スコールピオンオルフェノクが地面を転がっている内に、ファイズはマスターを連れて逃げる。

「大丈夫ですか？ マスター」

ファイズはマスターに聞くが、何やらマスターの様子がおかしい。そう思ったと同時に、マスターが素早く自分から離れた。

「・・・すまない、許してくれ」

マスターは謝ると、マスターの顔に模様が浮かび上がる。

「！？ マスター！？」

ファイズが驚いている前で、マスターはイルカの性質を持つオルフェノク・・・ドルフィンオルフェノクに変わった。

「うおおおおおお！！」

ドルフィンオルフェノクはファイズに襲い掛かり、パンチをファイズに向かって放つ。ファイズはそのパンチをかわし、後ろへ下がると同時にファイズにドルフィンオルフェノクは一気にファイズとの距離を詰め、ファイズを蹴り飛ばす。ファイズは地面を転がり、ちょうど宅配バイクの場所で止まる。ファイズは宅配バイクに積み残していたピザの箱を一つ掴み、ドルフィンオルフェノクに投げる。ドルフィンオルフェノクは投げられたピザの箱を受け取り、その箱を見る。

「何をする！ ピザを粗末にするな！」

ドルフィンオルフェノクは怒ったように叫びながらファイズに殴りかかるが、ファイズはその拳を掴み、ドルフィンオルフェノクに叫ぶ。

「マスター、やめてください！ あなたが人を殺せるはずがない！  
あなたは人間だ！」

「!!!」

その言葉に、ドルフィンオルフェノク……マスターの動きが止まる。本当に心までオルフェノク（化物）になっているなら、ピザの事なんて気につけないだろう。明久がピザを投げて怒ったのは彼の中にピザが好き……人間の心が残っているからだ。無差別に人間を襲うオルフェノクならともかく、まだ人間の心を持っているマスターを、明久は殺す事ができない。

「うわっ！」

突然、ファイズがフレイルによって吹き飛ばされ地面を転がる。転がりながらも目の前を見ると、ロブスターオルフェノクとスコールピオンオルフェノクが追いついてきていた。

「まだピザを焼きたいんでしょ？ なら迷わないで。人間の心なんて捨てなさい」

「……っく！」

ドルフィンオルフェノクはイルカのヒレ状の剣を手にすると、ファイズに斬りかかる。

「ぐっ！」

ファイズは両腕で斬撃をガードするが、その直後にスコールピオンオルフェノクのフレイルが胸にぶち当たる。さらにロブスターオルフェノクのサーベルが襲い掛かり、ファイズは地面を転がる。その位置にフレイルが振り下ろされるが、ファイズは転がりそれを回避する。フレイルが地面に直撃し、ぽっかりと深い穴が空く。ファイズは立ち上がりファイズショットを取り、ミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

ファイズショットにグリップが現れ、それを掴みファイズフォンに手を伸ばす。しかしその前にドルフィンオルフェノクが後ろからファイズを羽交い絞めにし、身動きが取れなくなる。そこにロブス

ターオルフェノクがサーベルで何度もファイズを切り裂き、最後にスコピオンオルフェノクがフレイルを想いつき振り、ファイズを大きく吹き飛ばす。

「うわあああああ!!」

ファイズは火花を散らしながら吹き飛び、地面を何回も転がる。ようやく止まった時、目の前には三体のオルフェノクがじりじりと距離を詰めながら歩いてくる。さすがに三体相手に戦うのは難しく、マスターを除く二体を倒そうにも、マスターも敵に加わっている以上それも難しい。せめて二体の内どちらかを倒そうと思い、ファイズフォンを開こうとする。

『Burst Mode』

音声が後ろから聞こえ、ファイズが後ろを振り返る前に、光弾が後ろから飛んできて三体のオルフェノクに命中する。

「うわっ!」

「くっ!？」

三体のオルフェノクがうめき声を出しながら怯んでいる隙に、ファイズは後ろを見る。そこには、カイザブレイガンを構えているカイザ……雄二の姿があった。

「よお明久。どうしてそんなにボロボロにされてるんだ?」

少し嫌味を込めながらカイザが言った。だがオルフェノク達が走って迫ってくるのを見ると、素早くカイザブレイガンの引き金を引き、オルフェノク達を地面に転がし動きを止める。

「明久! これを使い!」

カイザは叫びながらファイズに向かって何かを投げる。それは、赤と黒を基調にしたデジタル時計のようなものだった。

「使えって……こんなものどうやって使うのさ!」

「知るか! 何とかしろ!」

「そんな無責任な!」

ファイズとカイザがケンカしている間に、オルフェノク達が迫ってきている。ファイズは仕方なく、その腕時計を左腕に装着する。

「・・・？ 何だこれ」

腕時計をよく見ると、ミッションメモリーに似たメモリーカードが装填されている。ファイズは腕時計――腕時計型コントロールデバイス、ファイズアクセルからメモリーカード――アクセルメモリーを外し、ファイズドライバーのミッションメモリーを外した場所に挿入する。

『Complete』

音声が鳴った次の瞬間、ファイズの姿が変わる。胸部アーマー・フルメタルラングが展開し、肩の定位置に収まる。さらにフォトンブラッドはエネルギー値が上昇し、赤色のフォトンブラッドから出力が二番目に強い銀色に変わり、フォトンストリームが銀色のシルバーストリームに変わる。そして、目の色が黄色から真紅に変わる。新たな進化を遂げたそのフォームの名は、『アクセルフォーム』。

その変化には、オルフェノク達も一瞬動きが止まった。ファイズはファイズアクセルの赤いスイッチ・スタータースイッチを押す。

『Start Up』

音声が流れ、ファイズの周りの景色が歪むほどの高熱が発せられ、ファイズはファイズショットを手に、今にも走り出そうとするような構えを取る。それを見て、オルフェノク達も走り出そうと身構える。

「はあああああああつ！！」

ファイズが走り、オルフェノク達もそれを迎え撃とうと走る。だが、気がつくくと、

オルフェノク達の体が、宙を舞っていた。

『Three Two One』

そして、ファイズアクセルの時間表示がゼロになる。

『Time Out』

ファイズはいつの間にかオルフェノク達の後ろに立っており、『Reformation』の音声が流れると通常のファイズの姿に戻った。

何故オルフェノク達が吹き飛ばされたかと言うと、ただ単純にファイズが必殺技・グランインパクトを当てたため吹き飛んだのだ。だが、オルフェノク達の誰もが反応できていなかった。いや、この場合は反応できた方がおかしいのだ。『アクセルフォーム』は十秒間の間に千倍の速度、つまり音速で動く事ができる超音速のフォームだ。今のは言わば音速で走っているファイズにグランインパクトを放たれたのだ。いかにオルフェノクであろうと反応できるはずがない。

「う……わあああ……」

アクセルフォームによるグランインパクト、強化グランインパクトをもろに受けたスコープオンオルフェノクは倒れたまま灰になり、ロブスターオルフェノクは攻撃が直撃する前に何とか両腕に装備されたシエルクラブで防いだが、ダメージは大きいらしく、少し体に電撃を走らせながらその場を離れた。

「う……ぐ……」

だがドルフィンオルフェノクは腹を押さえながらも立ち上がり、マスターの姿に戻る。元の人間の姿に戻ったマスターに、変身を解いた明久が歩み寄る。

「……マスター。あなたは人間として生きてください」

優しい目で言う明久に、マスターははっとした表情で言った。

「……まさか、あれはわざと……?」

実はファイズはマスターにだけ強化グランインパクトではなく、普通のキックをくらわしたのだ。人間の心を持つマスターには死んで欲しくないという明久の心がそうさせたのだ。

「早く店に戻りましょう。友達が待ってるんです」

明久の言葉に、マスターは明久に背を向ける。

「……店で待ってるぞ」

マスターはそのまま背を向けながら、宅配バイクに向かって歩いていった。

「……明久。あれで良かったのか?」

その後姿を見送る明久に、カイザの変身を解除した雄二が歩いてきながら尋ねた。

「マスターには、人の心があるから。きっと人間は殺さないよ」

「そうか。じゃあ問題も解決したし、早く店に戻ろうぜ。腹が減った」

「僕もピザを作り直さなきゃならないし、一回店に戻るよ」

そして明久と雄二は店に戻る。人間の心を持ったオルフェノクが店長の店に。大切な想いがこもった店に。

第十二話 ピザとバイトと音速の戦士（後書き）

次回から五巻に突入します。  
感想お待ちしています。

### 第十三話 姉と勢力と勉強（前書き）

最近中々執筆が進まない・・・。  
初めて一万文字いきました。楽しんでお読みください。

### 第十三話 姉と勢力と勉強

「……………」

昼休みのFクラスで、雄二は一人で卓袱台にひじをつきながら、何やら考え事をしていた。何故か下にはいているのは、ズボンではなく体育用のハーフパンツになっている。

「坂本、何をそんなに悩んでるの？」

「霧島にズボンを取られた事を悩んでおるのか？」

「いや、それも困るが今は違う」

雄二は尋ねてきた美波と秀吉に言った。さらにそこに姫路とムツツリー二が近づいてきた。

「具合が悪いんですか？」

「……………それとも、期末テストの事か？」

「それも違う。俺が今悩んでるのは、これだ」

そう言いながら雄二が出したのは、色々な図が描かれている紙だ。

「……………これは？」

「今の俺達の戦力と、オルフェノクの勢力図だ。考えてみたんだが、明久が前に『オルフェノクの王』について聞いたって言ってたよな」

「うむ」

「今俺達が持つてるベルトはその『オルフェノクの王』を護る為に作られた……………そして、このベルトを作ったのはスマートブレイン。ここまですればもう分かるよな？」

「……………スマートブレインがベルトを作って、オルフェノクの王を護ろうとしてるってわけ？」

美波が呆然と呟いた。その言葉に、雄二は黙って首を縦に振る。

信じられない話だった。日本に住む者なら誰もが知っている大企業が、オルフェノク達を束ねている。そして、その大企業が自分達

の敵という事実には、四人は衝撃を受けた。

「そう考えればつじつまが合う。オルフェノクがあんなに派手に人を殺してるのになんで新聞沙汰にならない理由、警察と結託しているほどの巨大組織……。それほどまでの巨大な権力を持っているのは、スマートブレインしか思いつかねえよ。……。ただ、そうになると少し厄介な事になる」

「厄介な事、ですか？」

「ああ、今オルフェノクに対抗できるのは明久の変身するファイズと、俺が変身するカイザだけだ。花形のおっさんも何かと協力してくれてるが、敵のオルフェノクの戦力は未知数だ。しかも前に明久が戦ったワニのオルフェノクや俺が戦ったオルフェノクは今まで俺達を襲ってきた奴らより強い。敵戦力は未知数の上に、こっちの戦力は少なすぎる。せめて、後一人ぐらい戦力が欲しい」

雄二は険しい顔で言った。そんな雄二に、美波は言った。

「……ねえ坂本」

「何だ？」

「そのベルト、渡しちゃったら？」

「ああ？」

「だって、スマートブレインが狙ってるのってそのベルトなんですよ？ だったら……」

美波の言う事にも一理ある。明久や雄二の命が狙われているのはファイズとカイザに変身してオルフェノクを倒しているからで、ベルトを手に入れてなければこんな事にはなっていない。

だが雄二はため息をついて、

「それができればとづくにやってる。もう俺達は何体かオルフェノクを倒してるし、今さらベルトを渡しても殺されないって事にはならないだろ。……。それに、明久が絶対に譲らないと思うしな」

「……」

その言葉に、美波は口を閉ざす。雄二の言うとおり、明久は美波に今のようなことを言われても、絶対にベルトを渡さないだろう。

オルフェノクに襲われている人々や人を襲うオルフェノク、  
そして、飛鳥やピザ屋のマスターのような、人間の心を持ったオル  
フェノクがスマートブレインから狙われている限り。

「そう言えば、明久はどうしたんだ？」

「む、そう言えば話に来ておらん。いつもならすぐに話しに加わ  
ろうというのに。卓袱台で寝ておるの……！」

明久の卓袱台を見た秀吉が絶句した。

「どうした？ 秀よ……！！」

そして、秀吉に続くように明久の卓袱台を見た雄二も絶句した様  
子で停止した。それを見た姫路達も、同じように卓袱台を見て絶句  
する。

何故なら、

明久が卓袱台に何冊ものノート、教科書を載せ授業の復習、予習  
をしていたからだ。

真面目に、カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ  
カリカリカリという音が聞こえてくる。

「……あ、明久？」

恐る恐ると言った感じで雄二が明久に声をかける。その声に明久  
はグリンツ！！と擬音が聞こえるほどの勢いで雄二たちに目を向  
けた。その凄まじさに、一瞬姫路がひっと悲鳴を上げたほどだ。

「……何？」

「……いや何でもない」

明久は黙ってまたノートに目を戻した。その体から出ている、『  
邪魔をしたら殺す』と言っているようなオーラが怖い。

「（な、何じゃ！？ 明久は一体どうなってしまったのじゃ！）」

「（……今日あたりには隕石が振ってくるかもしれない）」

「（冗談言ってる場合じゃないでしょ！ いくら何でも異常すぎる  
わよ！）」

「（あ、明久君一体どうしたんでしょうか……）」

「（わからねえ、ただ分かるのは明久に何かが起こったことだ！）」

明久が異常な事に四人はすぐに気付いたが、今聞くと自分達の身に危険が襲い掛かってきそうなので今聞くのはやめた。その後、明久は数人の教師から『吉井、病院に行きなさい』と何回も言われた。

放課後になり、クラスのほとんどが帰り支度を始める。

「雄二、ちよつといい？」

明久が帰り支度を始めている雄二に声をかけた。

「ん？ どうした明久」

「今日なんだけどさ、雄二の家に泊めてくれない？ それで、期末テストの出題範囲の勉強を教えて欲しいんだ」

――ザワツ

言った瞬間、教室にざわめきが広がった。

「おい……聞いたか」

「確かに聞いたぜ。俄かには信じ難いことだが……」

「まさか、アイツらがな……」

「ああ。まさかあの吉井と坂本が……」

「『期末テストの存在を知っているなんて……』」

後ろから聞こえてくる声に明久は色々言いたくなかったが、今はそんな場合ではないので後回しにした。

「勉強を教えてほしいだと？」

「うん」

「やれやれ……。お前はまだ七の段が覚えられないのか」

「いやいくら僕でも掛け算は言えるから！」

「ああそうか。三角形の面積の求め方に躓いてるところだったよな」

「底辺×高さ÷二」

「……お前の人生に一体何が起こった？」

「あの、明久君」

雄二と言い合っている明久に、姫路がかばんを抱えてやってきた。

今日はまっすぐ家に帰るのだろうか。「なに、姫路さん？」

「あのですね、九九の覚え方にはコツがあるんですけど、」

「言えるからね！？　いくら僕でも九九ぐらいはきちんと言えるからね！？」

すごく心配してそうな姫路の表情を見て、明久は自分がそこまでバカだと思われるのかと、心の底から思った。

「しかし、急にどうしたのじゃ？　明久が勉強なぞ、特別な理由でもない限り考え難いのじゃが」

近くに座っていた秀吉が特別な理由というところで姫路に意味深な視線を送る。

「急に勉強に目覚めたんだ」

「誰でも分かる嘘をつくなバカ」

「そうよアキ。本当の事を言いなさい」

何故か明久が勉強をすると言っただけで人が集まってきた。だが確かに、勉強嫌いな明久が勉強しただしたら誰でも驚くだろうが。

「あの、明久君。私で良かったら……一緒に勉強、しませんか？」

おずおずといった感じで姫路が手を上げた。いつもの明久なら飛びつく申し出なのだが、雄二の家に泊まるのならともかく、

「姫路さんの家に泊めてもらうわけにはいかないしなあ……」

「

「え？ 明久君、私の家に来たいんですか？」

「あ、いや、そういう訳じゃないよ」

「あう……。そうなんですか」

何故か姫路が残念そうな顔をしているのを見て、明久は首をかしげる。

「それはそうと明久、朝から気になっていたが、どうして俺の家に泊まりたがる？ 自分の家に何かあったのか？」

「あー、えっと、実は」

「嘘をつくな」

「早いよ！ まだ何も言っていないのに！」

「まあ確かに次の試召戦争のこともあるし、勉強ぐらい教えてやらんでもないが」

「え？ ホント？」

「ただし、お前の家で、だ。その方がやり易いだろ」

言った後、雄二はよそを向いて小さな声で「我が家にはあの母親がいるからな……。」と呟いた。「って、僕の家はダメだよ

！今日はちよっと、その、都合が悪いんだ！」

「都合が悪いだと？ 何かあるのか？」

「う、うん。実は今日、家に改装工事の業者が」

「嘘つけ。本当なら今日はお前の家でボクシングゲームをやる予定だったろうが。改装業者が来るはずないだろ」

「じゃなくて、家の鍵を落としちゃって」

「マンションなんだから管理人に言えば開けてもらえるだろ」

「でもなくて……。い、家がオルフェノクに襲われて……！」

「襲われてファイズに変身して撃退しながら弁当用意してYシャツにアイロンかけてきたのか？ お前はどこまで大物すぎるんだよ」

「あー、えーっと、他には他には……！」

「いい加減にしる。お前の嘘は底が浅いんだよ」

「ぐっ……。」

もう嘘のネタが詰まったのか、明久が苦い顔をする。

「分かったよ。今日はおとなしく家に帰るよ……」

明久がかばんを担いで立ち上がる。すると、背を向けた明久の肩を秀吉がグツと掴んでいた。

「待つのじゃ明久。何をそこまで隠しておるのじゃ？」

「うえっ!? いや、別に何も!」

「何があるのかわからんが、このバカがそこまで隠そうとすることか……」。面白そうだな

雄二がニヤニヤといやらしい目で笑った。

「よし。確認しに行ってみるか」

「ちょ、ちよつと雄二!? 何言ってるのさ!?!」

「そうね。何かアキの新しい一面が見られるかもしれないし」

「私も興味があります」

「……家宅捜査」

「テスト期間で部活もないし、ワシも行ってみようかの」

一同の台詞に明久は慌てながら、

「ダメだよ!今日は僕の家はダメなんだ!その、凄く散らかってるから!」

「あの、それならお手伝いしますけど?綺麗にしないとお勉強に集中できませんし」

明久は姫路の優しさに涙目になるが、何か思いついたような表情になった。

「でも、散らかっておるのは2000冊以上のエロ本なんだ!」

「……任せておけ(グツ)」

「しまった!さらにムツツリーニの興味を煽る結果に!?!」

「ものすごい逆効果だ!」

「よし、それじゃ意見もまとまった事だし、明久の家に行くか」

「……おーっ!」

「やめてーっ!」

明久は全力で抵抗をしたが、結局明久は首根っこを?まれ雄二達に連行されて行った。

「何かあるんだろつな」

「ムツツリー二と違って明久は滅多に隠し事をせんからな。何かあるのか楽しみじゃ」

「・・・・・・・・・・隠し事なんて何も無い」

「女物の下着に興味はあるか、ムツツリー二」

「・・・・・・・・・・あるわけがない」

「流石に隠し事に慣れとるだけあるの。嘘も堂に入ったものじゃ」

「・・・・・・・・・・！（ブンブン）」

明久の家に帰る途中、明久以外の全員は凄く楽しそうに会話をしながら歩いていった。

「でも、なんででしょうね？ 明久君がそこまで隠すものって」

「何かしらね。今さらいやらしい本なんて隠すとも思えないし」

「そうじゃな・・・・・・・・・・。急に手作りの弁当を持ってきたこと、

＼シャツにはアイロンがかかっておったおったことなども合わせて

考えると・・・・・・・・・・」

「女でもできたか」

「・・・・・・・・・・っ！？」

雄二の一言に、雄二以外の全員が大きく目を見開く。

「あ、アキツ！ どういうこと！？ 説明しなさい！」

「む、むう・・・・・・・・・・。明久に伴侶か・・・・・・・・・・。友人として

は祝うべきなのじゃが、なんだか釈然とせんというか、妬ましいと

いうか・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・裏切り者・・・・・・・・・・っ！」

「僕、何も言っていないんだけど・・・・・・・・・・」

様々な想像をする秀吉たちに、明久が苦笑しながら言った。

「大丈夫ですよ。明久君が私達に隠れてお付き合いなんて、そんな事をするはずがありません。私は明久君を信じています」

そんな四人の中で、姫路だけが落ち着いた態度を保っている。

「ね、明久君？ 私達に隠れてそんな人がいたりなんて、しませんよね……？」

ただ、目に光が宿っておらず、目も笑っていない、いわばヤレ状態になっているが。

そしてそうこうしているうちに、明久たちは明久の住むマンションに着いた。

「ま、中に入れば全部わかるだろ。ほら明久。鍵を出せ」  
「やだね」

明久はせめてもの抵抗を試みしてみた。

「明久。俺がカイザになってドアを壊すか、裸Yシャツの苦しみを味わうか、どっちがいい」

「何その究極の二択！？ ってどっちも嫌だよ！」

「……涙目で上目遣いだとありがたい」

「ムツツリーニ！ ポーズの指定を出して何する気！？ 売るの！

？ 抱き枕！？ リバーシブルで裏面は秀吉！？」

「なぜそこでワシを巻き込むのじゃ！？」

「土屋君。できれば、Yシャツのボタン上二つは開けてもらえると……」

「値段はできたら安くして」

「姫路さんも最近おかしいからね！？ 美波も何言ってるの！？」

「わかったよ！ 開けるよ！ 開ければいいんでしょ！」

「……ボタンを？」

「家の鍵を！」

明久は少し怯えながら、何かに祈るような感じで家の鍵を開ける。

「本当に彼女がいるのかしら……」

「少々緊張するの……」

「大丈夫です。そんなこと、ありえませんが……」  
一同が固唾を飲んで見守る中、明久は玄関のドアを開けた。  
「それじゃ、あがつてよ」

雄二達を招き入れ、リビングに続くドアを開け放つ。  
そしてその直後、明久達の視界に飛び込んだ物物が。  
「……」

それは、室内に干された……ブラジャーという女物の下着だった。

「いきなりフオローできない証拠があーっ!?!」

明久は凄まじい速さで洗濯物を掴み、別室に放り込む。雄二達の反応を確かめるために、明久がゆっくりと振り返ると、

「……もう、これ以上ないくらいの物的証拠ね……」

「そ、そうじゃな……」

「……殺したいほど、妬ましい……っ!!」

美波達が思い思いの感想を言っていた。

「え、えっと、これは!」

そんな絶望的な状況の中で明久が言い訳のようなものを考えていると、一人落ち着いたままの姫路が笑顔で明久に歩み寄ってきた。

「ダメじゃないですか、明久君」

「え? 何が?」

「あのブラ、明久君にはサイズが合っていないですよ?」

「……コイツ認めない気だ!」

姫路が言ったのは、現実逃避に近い台詞だった。

「姫路さん、これは僕のじゃなくて!」

「あら? これは……」

姫路の視線は、リビングの卓上に向けられていた。そこに置かれているには、女性用のコットンパフだ。

「ハンペンですね」

「「ハンペン!?!」」

化粧用のコットンパフをハンペンと間違えるのも、それはそれで問題だが、姫路はそれほど目の前の現実を見たくないのだろう。そして、姫路はまた別の場所に視線を移した。その目線にあるのは、食卓の上に置かれている女性向けヘルシー向け弁当だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ひ、姫路さん・・・・・・・・? どうしたの・・・・・・・・? そのお弁当が何か・・・・・・・・?」

「しくしくしく・・・・・・・・」

「うええっ!?! どうして急に泣き出すの!?!」

「もう、否定し切れません・・・・・・・・」

「ちよつと待って! どうして女性向けの下着も化粧品もセーフなのにお弁当でアウトになるの!?!」

まさか下着や化粧品の方が女性向け弁当よりもあり得ると思われていたんだろうが、明久は思った。

「はぁ・・・・・・・・。もうこうなったら仕方がないよね・・・・・・・・。正直に言うよ。実は今、姉さんが帰ってきているんだ・・・・・・・・」

「

ここまで見られてしまったからにはもう仕方がないと思ったのか、明久は本当の事を白状した。

明久の告白を聞くと、一同は納得の言ったような顔をした。

「そ、そうよね。アキに彼女なんているわけないもんね」

「・・・・・・・・。早とちりだった」

「ホッとしたぞい」

秀吉たちが胸を撫で下ろしている。だが、何故彼女の存在よりも先に姉の存在という可能性を思いつかなかったのだろうか。

「そうですね。明久君にはお姉さんがいたんですね。良かったです・

「ま、まあ、そんなわけだからお弁当とか制服とかもきちんとしていたんだよ。わかってもらえた？」

明久はそこで話を打ち切ろうとする。

「待て明久」

しかしその行動もむなしく、雄二が何かに気付いたかのように言っただ。

「な、なにかな明久？」

「お前に姉がいるのは分かった。だが、それだけでなぜ家に帰るのを嫌がる？」

「あ、そういえばそうですね」

「確かにおかしいのう」

「……………（こくこく）」

「何かまだ隠してるのかしら？」

美波達が雄二の台詞を聞き、同じように疑問を抱き始めてしまった。

「明久。もう全部ゲロって楽になれよ。な？」

雄二が明久の肩をポンポンと叩く。その言葉を聞き、明久も腹をくくる事にした。

「実は……………僕の姉さんは、かなり、その……………珍妙な人格をしているというか……………常識がないというか……………だから、一緒にいると大変で、色々と減点とかもされるし、それで家に帰りたくなくて……………」

「あ、アキが非常識って言うなんて、どれだけ……………?」

「む……………。恐ろしくはあるが、気になるの……………」

「……………是非会ってみたい」

「そうですね。会ってみたいです」

その場にいる全員が明久の姉に興味を抱き始めたその時。

「あ……………なんだ。お前ら、そういう下世話な興味は良

くないぞ。誰にだって、隠したい姉とか母親とか、そんなもんがいるモンなんだから」

珍しく雄二が明久に助け舟を出した、一体どういう風の吹き回しだろうか。

「ゆ、雄二・・・・・・・・・・！　ありがと・・・・・・・・」  
ガチャッ

その時、確かに玄関のドアが開く音がした。

『あら・・・・・・・・・・？　姉さんが買い物に行っている間に帰ってきていたのですね、アキくん』

「うわわわわっ！　か、帰ってきた！　皆、早く避難を・・・・・・・・」

「明久君のお姉さんですか・・・・・・・・・・？　ど、ドキドキします・・・・・・・・」

「う、ウチ、きちんと挨拶できるかな・・・・・・・・・・？」

「ダメだ！　会う気満々だ！」

明久が祈り、緊張の一瞬の後、扉が開かれる。

「あら。お客様ですか。ようこそいらっしやいました。狭い家ですが、ゆっくりしていつて下さいね」

扉から現れたのは、七分丈のパンツに半そでのカッターシャツ、その上に薄手のベストの格好をしたショートカットの女性だった。

「・・・お、お邪魔してます・・・・・・・・」

普通の格好に普通の挨拶に、拍子抜けといったような表情で雄二達が挨拶する。

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます。ついでに」

深々とお辞儀をする姉に、雄二も慌てて頭を下げる。

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

「……………土屋康太、です」

続いてムツツリー二も挨拶した。

「はじめまして。雄二君に康太君」

笑顔で返す玲に、明久は心の底から感動した。そんな明久に、雄二が小声で話しかけてきた。

（おい明久。普通の姉貴じゃないか。これでおかしいと言うなら、お前はどれだけ贅沢者なんだ。俺なんか、俺なんか……………！）

（あはは……………ふ、普通でしょ？ だから、もう気が済んだら帰ったほうがいいと思うよ？）

明久と雄二の会話をよそに、挨拶が秀吉の番まで回ってきた。

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、ワシは女ではなく……………」

「ええ。男の子ですよね？ 秀吉くん、ようこそいらっしやいました」

「……………っつ！！」

その言葉を聞いて、秀吉が驚いたように玲の顔を見上げる。

「わ、ワシを一目で男だとわかってくれたのは、主様だけじゃ……………！！」

どうやら一目で男だとわかってもらえて感動しているようだ。

「もちろんわかりますよ。だって」

微笑を浮かべて玲が答えた。

「だって、うちのバカでブサイクで甲斐性無しの弟に、女の子の友達なんてできるわけがありませんから」

嫌な確信の仕方である。どうツツコミを入れようかと明久が迷っている、玲はそのまま姫路と美波の方に視線を移し、

「ですから、こちらの二人も男の子ですよね？」

意味のわからない事を言った。

「ちょ、ちょっと姉さん！？ 出会い頭になんて失礼な事を言うの

さ！ 三人ともきちんと女の子だからね！？」

「明久！ ワシは男で合つとるぞ！」

明久は改めて、自らの姉の非常識っぷりに旋律を覚える。そして、明久の言葉に反応したのか、玲がゆっくりと明久に顔を向ける。

「……………女の子、ですか……………？ まさかアキくんは、家に女の子を連れてくるようになっていたのですか……………？」

どうやら家に女子を呼んだ事が気に入らないらしい。何せ手をつなくだけで不純異性交遊とみなすような姉である。恐らく怒っているのだろう。

「あ、あの、姉さん。これには深い深い事情があつて……………」

「……………そうですか。女の子でしたか。変な事を言つてごめん下さい」

「実は……………つて。あれ？」

説明を始めようとする明久を無視し、玲は素直に姫路と美波に頭を下げる。明久は一瞬その光景にポカんとした表情を浮かべる。

「どうかしましたか、アキくん？」

「あ、いや……………。姉さん、怒つてないのかな、つて思つて」

「？ あなたは何を言っているのです？ どうして姉さんが怒る必要があるのですか？」

怒らないのが至極当然と言わんばかりに平然としている。

取り越し苦労かと明久が胸を撫で下ろした明久に、玲は笑顔のまま告げた。

「ところで、アキくん」

「ん？ 何？」

「お客様も大勢いらつしやるようですし、アキくんが楽しみにしていたお医者ごっこは明日でもいいですよね？」

どうやらこの姉は、明久を自殺に追い込む気らしい。

「ね、姉さん何言つてんの！？ そんな言い方はやめてよ！ 僕は

姉さんとそんな事をするぐらいなら死んだほうがマシだからね!？」

「何を慌てているのですかアキくん。それより、昨日アキくんに渡した姉さんのナース服がどこにあるか知りませんか？」

「このタイミングでそんな事を聞くなあーっ!!！」

明久は叫びながら、こんな事になるぐらいなら野宿でも何でもするんだつたと頭を抱えた。

「それと、不純異性交遊の現行犯として減点を150ほど追加します」

「150!? 多すぎるよ! まだ何もしてないのに!」

「……『まだ』? ……200に変更します」

「うわあああああ!!！」

「……すまん、明久。さっきの言葉は訂正させてもらう」

雄二が明久の肩をポンと叩いた。同じ苦勞を味わってきたのか、その目には同情と哀れみの色が混じっている。

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。貴女方お二人のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。明

久君のクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキとはともd……」

友達を言おうとしたのだろうか。美波はそこで一旦言葉を切った。

「……あ、アキとは……」

「アキくんとは?」

赤く頬を染めている美波に、玲が笑顔で迫る。何故か黒いオーラがその笑顔に秘められている。

「……あ、アキとは将来一緒に住む予定です!」

「アキくん、ちょっとこちらに来てください」

「何で!? 何で旅行に行くかもしれないって話なのに僕の首を掴んで別の部屋に行こうとするの!? しかも右手に握ってるメリケンサックは何!? アンタ弟に何する気!？」

「大丈夫ですアキくん。アキくんが女の子に騙されないようにお説

教してあげるだけです。私はアキくんの事を愛してますから。・・・  
一人の異性として」

「その一言は冗談だよね！？ お願いだから冗談って・・・、・・・  
あああああー」

悲鳴らしきものを上げながら、明久は別の部屋に連れて行かれた。  
その部屋からは、ドゴ！ ボキ！ ベキヤ！ ミシ！ ぎゃあああ  
ああああ！！ という音が連続で聞こえてきた。

「・・・冥福を祈る」

「（・・・だが、島田の奴ずいぶんと積極的にいったな）」

「（うむ。恐らく今のままではマズイと思ったのじゃろう。今のところ、明久との距離は島田が一番近いからのう）」

雄二達が言っている側で、美波は顔を真っ赤にし、姫路はそんな美波の顔を見ながら「私もがんばらなくちゃ・・・」と呟いていた。

その後、部屋から戻ってきた玲の提案で、一同は夕食を食べる事になった。作るのは雄二とムツツリー二、そして奇跡的に生還した明久がやることになった。その後、明久は自信の風呂の写真を秀吉と姫路と美波の三人に見せ付けられ、玲の愛しているという宣言を雄二達に聞かれ、異性関係を聞かれたりと大変な目にあいながらも、何とか食事は無事に終わったのだった。

食事を終え、明久たちはてきぱきと後片付けをし、全員がリビングに集まる。そして、いよいよ姫路が今日の本題を切り出した。

「そろそろお勉強を始めましょうか？」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

夕食の支度が早かったせいか、今はまだ七時である。明久自身としてあまりやりたくないが、これをやらなかったら明久の自由は消える。オルフェノクを退治しなければならぬのに、非常識な姉がいるというのはたまったものではない。

「ならば、ワシも一緒に教えてもらおうとするかの」

「……同じく」

いつもFクラスで見せている姿とは全く違う真面目な態度である。この姿を西村先生（鉄人）に見せたら、おそらく目を丸くするだろう。

「皆さんでお勉強ですか。それなら良いものがありますよ？」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片づけていて見つけました。今持って来ますね。そう言いながら、玲はリビングを出て行った。その後何かを取り出す音がして、再び戻ってきた。

「参考書というのかもしれませんが、役に立つかもしれないので」

玲が持ってきた本をテーブルの上に置いた。明久には、何故か見覚えのある本に見えた。

「女子高生 魅惑の大胆写真集」

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがぁ……っ！！」

玲が持ってきたのは、明久が隠していた工口本だった。

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「どうぞ、じゃないっ！ こんなもんが参考になるかーっ！ あと僕の部屋に勝手に入ったね！？ あんなに入らないでって言ったの

に！」

「いいえ、昨日確かにアキくんは部屋に入って良いと言いました」  
「それつてもしかして着替えを取りに行く時のこと！？ あの時の  
会話はこれが目的だったのか！ なんて陰湿卑劣迂遠な作戦なんだ  
！」

「そ、それじゃあ、あくまでお勉強の参考書として……………」  
「そ、そうね。ウチもちよつと勉強しておこうかな……………」  
「姫路さんに美波！？ 無理に姉さんのセクハラに付き合わなくて  
いいんだよ！？ とうにかお願いだから見ないで！」

こんなものを見たら明久の趣味がばれてしまうだろう、明久は必  
死に二人を止めようとする。

「アキくん、ベッドの下に置いてあったほかの参考書も全て確認し  
ましたが、あなたは前はバストサイズが大きく、かつヘアスタイル  
はポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありま  
したね」

「冷静に考察を述べないで！ いくら言い方を変えて取り繕っても  
……………」  
「……………前は？」

突然ムツリーニがそんな事を言い出した。明久は、石になった  
かのように動きを止めた。

「ええ、発行日などを調べてみたら現在アキくんは……………」  
「や、やめろおおおお！！！」

明久が必死に叫ぶが、玲は笑顔で続けた。

「……………バストサイズが小さく、なおかつポニーテールの女子と  
いう範囲を重点的に学習する傾向のようです」

「……………あああああああ！！！！！」



### 第十三話 姉と勢力と勉強（後書き）

また更新が遅くなるかもしれませんが、楽しんで待っていただけたら幸いです。

感想お待ちしております。

第十四話 勉強会と裏切りと嫉妬（前書き）

大変遅くなりました！ 十四話です！

## 第十四話 勉強会と裏切りと嫉妬

「というわけで雄二。今日も楽しく勉強会をしよう！」  
放課後になり、明久は素早く帰り支度を整え、雄二の席に駆け寄った。

「……明久。似合わない台詞が気持ち悪いぞ」

「なんとでも言つてよ。今の僕には体裁を気にしてる余裕はないんだから」

実は明久は、今朝また玲に減点されたのだ。このままではテストでかなりの高得点をとらなくてはならなくなる。

「なんだ。また減点でも食らったのか？」

「うん……。朝からいきなり英語の問題を出されてさ……」

「そうか。それで、今はどのくらいの減点なんだ？」

「確か、合計で290点。もうかなり厳しいんだよね」

「290か。そうになると、期末の総合目標は1090くらいだな」

「そうなんだよ。今までは絶対調でも1000点ちよつとだったから、それに更に50点以上アップさせないと……」

総合で1100点程度となると、Eクラスの中堅レベルである。今のままでは少し心もとない。

「まあ、その程度ならまだなんとかなるだろ」

「え？ そうかな？」

「暗記科目を中心に今から死ぬ気で根性入れたら、それなりに上がるはずだからな。お前の場合、伸び代が残っている世界史あたりが狙い目だ。確か今までは50〜60点程度だったよな？」

「うん。よく覚えてるね」

「一応クラス代表だからな」

どうやら試召戦争の為にクラスメイトの点数をチェックしているようだ。戦力の把握は指揮官として必要最低限の事なのだろう。

「振り分け試験と違って、期末の問題を作るのは田中らしい。お前にはありがたい話だろ？」

「田中先生か……。それなら確かに点数を取り易いかも」

世界史の田中先生はおつとりとした初老の先生で、問題が解き易いと生徒の間では大評判なのだ。いつもなら全員が解き易いと点数に差が出ないので意味がないのだが、今の明久にはありがたい。重要なのは他人との差ではなく、点数そのものだからである。

「下手に理数系に力を入れるよりは、暗記科目に集中したほうが点数には結びつきやすいはずだ」

「そうだね。今から数学なんて勉強してもあまり点数は上がらなそうだし」

そうとなると、明久にとっての期末テストの鍵は世界史が握る事になるだろう。

などとテスト対策の話をしていると、そこに鞆を抱えた秀吉がやって来た。

「なんじゃお主ら。今日も明久の家で勉強会か？」

「僕の家？ う〜ん……。今日からは姉さんが仕事でいないから、それでもいいんだけど……」

「けど？」

「今日は雄二の家にしようよ。たまには僕の家以外にも行ってみたいし、何より僕の部屋には参考書とかの勉強道具があまり揃ってないし」

明久はすかさず雄二の家を提案した。

勉強道具などの話も確かにあるが、会場を雄二の家にしたのは雄二自身を巻き込むためである。雄二は自分の興味ない事には驚くほど冷たいので、こうでもしておかねば勉強を教えてくれない恐れが

あるのだ。一応は次の試召戦争に備えるという狙いもあるので協力してくれてはいるが、念には念を入れておいたほうが良い。

「いいよね、雄二？ 昨日は無理を押し僕の家に来たんだし」

「まあ、確かに昨日は無理やり押し切ったようなもんだしな……」

雄二が少し何か考え出した。

「わかった。今日は俺の家でやるか。幸い、おふくろも温泉旅行で不在だしな」

雄二の母親が不在なのがどうして幸いなのかは分からないが、明久が思ったよりすんなりオーケーが出た。これで今日も勉強を教えてもらえるだろう。

「それならば、ワシも同行させてもらっていいかの？ 一人では勉強をする気が起きんのじゃ」

「勿論オーケーだ。というか、どうせいつものメンツが来るんだろ？ それならさっさとしようぜ」

「そうだね。おい、ムツツリーニ、姫路さん、美波ー！」

まだ教室内に残っている三人に呼びかける。

「はい。なんでしょうか明久君？」

「何か用？」

「……どっかに行くとか？」

勉強道具を鞆にしまっていた三人は、それぞれ鞆を手にこちらにやってきた。

「うん。今日は雄二の家でテスト勉強をしようと思うんだけど、良かったら……」

明久の言葉に、姫路とムツツリーニは二つ返事で参加だったが、美波は表情を曇らせていた。

「美波、今日何かあるの？」

「うん……。今週は仕事が休みだからって母親が家にはずだったんだけど……。ちょっと急な仕事が入って今日は家にいられなくなったの」

「あ、そうなの？ それじゃ、葉月ちゃんが家に一人つてこと？」  
「そうね。悪いけど、今日はウチは帰るわ。勉強はまた今度ね」  
残念ではあるが、そういうことなら仕方ない。葉月はまだ小学生である。小学生の少女を家に一人しておくには可哀想だろう。  
美波が鞆を手にして部屋を出ようとする。

そんな美波を雄二が引き留めた。

「待て島田。それなら、場所をお前の家に変更しないか？」

「え？ ウチの家？」

「それは良いのう。島田の妹とは全員が顔見知りじゃし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「……なんなら、夕飯も作る」

雄二の提案に、一同は乗り気だった。

「美波さえ良かったら、どうかな？」

「う……。そ、そうね……」

だが、他の全員が乗り気なのに対し、何故か美波はあまり乗り気ではないようだ。

「じゃ、じゃあ、ウチの家にしましょうか……」

少し考えた後、美波の承認が下りた。これで葉月も寂しくなくなり、勉強も無事に全員でできるだろう。

「ただし！ 絶対にウチの部屋に入っちゃダメだからね！」

美波は何故か明久の目を見てそう言った。ムツツリー二より警戒されたことに、明久は少し心外だった。

「よしっ！ そうと決まれば早速移動だ！ チビツ子も一人じゃ寂しいだろうからな！」

雄二の一言で、明久達は教室を出て美波の家に向かった。

「ただいまー。葉月、いる？」

玄関のドアを開けて美波が呼びかける。すると、

「わわっ、お姉ちゃんですかっ。お、お帰りなさいですっ」

廊下に面した部屋から、小さな影が勢いよく飛び出してきた。

アーモンド状の少し吊り上がった目にツインテールのツインテールの少女、島田美波の妹、島田葉月である。

「？ 葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」

「どうやら今葉月が飛び出してきたのは美波の部屋らしい。」

「あ、あう……。実はその……。独りで寂しかったから、お姉ちゃんの家に行って……。」「

言いにくそうに葉月は少し手をもじもじとさせた。

「ぬいぐるみでも取ってこようと思ったの？ そのくらい、お姉ちゃんは別に怒らないのに」

「そ、そうですね？ お姉ちゃん、ありがとですっ」

よしよし、と美波は葉月の頭を撫でた。

二人の会話が落ち着くのを見計らって、明久は美波の背中から一歩出て葉月に挨拶した。

「葉月ちゃん、こんにちわ」

「あっ！ バカなお兄ちゃんっ！」

姿を見せるなり、ドンツと勢いよく腰にしがみつけられる。そしてそのまま葉月は額を明久の腹に当ててきた。何故か前のように、額が的確に鳩尾に食い込んでいる。

「キャンっ！」

そこに、犬の鳴き声らしき音が聞こえてきた。明久が前を見ると、小さなチワワ犬、チャコが明久達に寄ってきた。

「あ、チャコちゃん、起きたんですか」

「寝てたの？」

「はいです。起こしちゃ可哀想だと思ったので、寝かしといてあげてたんです」

チャコは明久達に吼えたりもせず、ただそこに座っている。

「こんにちは、葉月ちゃん。お邪魔しますね」

「わあつ。綺麗なお姉ちゃんたちまで。今日はお客さんがいっぱいですっ」

やっぱり小学生に留守番は寂しかったのだろうか、明久達を見ると、葉月は満面の笑みどころか全身で喜びを表現した。相変わらず天真爛漫という言葉が良く似合う。

「ほらほら、葉月。アキから離れなさい。皆が中に入れないでしょ？」

「あ、はいです。それじゃ、バカなお兄ちゃん達、こっちにどうぞっ」

「つとと、そんなに引つ張らなくても大丈夫……ん？」

葉月に手を引かれながら廊下を歩いていくと、その途中にある部屋のドアが開いていて少し見えた。所狭しとぬいぐるみが並べられている。おっして、その中央では見覚えのある大きなキツネが何かを抱えて座っていた。

抱えられている物を明久が見ようとしたその時。

「ちよ、ちよつとアキっつ!？」

「ほえ？」

突然の声に明久が振り返ると、その瞬間に明久の脳天・鼻先・下あごの三ヶ所に衝撃が走り、バランスを崩したところで両手首の関節が一瞬で外された。まさに一瞬の早業。アクセルフォームでもないといけない高度な技だろう。

「何見てるのよ!?!？」

おそらく明久は今、地獄を見ているのだろう。

「いい? この部屋は絶つっつ対に、入ったらダメだからねっ!」

美波は大急ぎで扉を閉め、外された両手首をムツツリー二手首を

はめてもらっている明久に指を突きつけた。明久は、その扉が地獄の扉だということを即座に理解した。

「やれやれ。お前らは何をやっているんだか……。チビっ子、元気だったか？」

「はいですつ。おつきいお兄ちゃん」

「そうかそうか。それは良かった」

雄二は葉月の頭にポンポンと手を載せた。身長差のせい、雄二は葉月の頭に手を載せるのが好きなようだ。

「それで、リビングはこっちでいいのか？」

「はいですつ。こっちですつ」

葉月に案内され、明久達はリビングに入った。

「とりあえず適当に座ってもらえる？ 今テーブル持ってくるから明久達を通すと、美波が勉強道具を広げる為のテーブルを取りに行こうとする。」

「？ お姉ちゃん、テーブルなんて何するです？ トランプですか？」

葉月が首を傾げたのを見て、明久はまだ自分が何も話していないことに気付いた。

「葉月。今日はお姉ちゃん達ね、うちでテストのお勉強をするの。美波がそう言つと、葉月は少し寂しげに目を伏せた。

「あう……。テストのお勉強ですか……。それじやあ、葉月は自分のお部屋でおとなしくしてるです……」

察しが良いのか、気が回るのか。葉月は明久たちが何かを言う前に、勉強の邪魔にならないために部屋に行こうとする。それはそれで良い行為なのかも知れない。

だが、

「待って葉月ちゃん。良かったら、僕らと一緒に勉強しようか？ 学校の宿題とか、予習とかはないかな？」

一人で部屋にいるのは寂しいだろうと思ったのか、明久が言った。「えっ？ 葉月も一緒で勉強していいですか？」

パツと葉月の顔が輝く。

「勿論だよ。ね？」

「ああ。どうせ一人に教えるのも二人に教えるのも変わらないからな」

「雄二。それは僕が小学校五年生レベルだと言っているのかな？」

「葉月ちゃん。一緒にお勉強しましょうね」

「ワシはあまり教えてやれることはないかもしれんが、一緒に勉強するのは大歓迎じゃ」

「……………保健体育なら教えてあげられる」

ムツツリー二の台詞は、ギリギリでアウトだ。美波が本気なら、恐らく殺される事だろう。

（アキ、いいの？ 今度のテストはかなり頑張らないといけないはずなのに）

美波が葉月に聞こえないように明久に小声で呼びかけてきた。明久のテストの事を心配しているのだろう。

明久が気を遣いすぎだよと言うと、美波ははにかんだように、  
（……………ありがとう、アキ）

と明久に囁いた。美波の優しい目に、明久は自分の心臓の脈が早まるのを感じた。

「葉月、一緒にお勉強したいですっ」

「おう。それなら勉強道具を持ってくるといい」

「はいですっ」

軽い足音を立てながら、葉月はリビングを出て行く。ただ一緒に勉強するだけなのだが、彼女にはそれがよっぽど嬉しかったのだろう。

「さてと。そんじゃ、テーブルを持ってくるんだろ？ 手伝うぞ島

田

「あ、大丈夫よ。ウチ一人で」

「そうか。まあ、誰かの写真でも飾ってあるのなら、下手に歩き回れたくないだろうから無理に手伝うとは言わないがな」

「ななな何言ってるのよ坂本!? あんたまさか、さつき部屋の中が見えてたの!?!」

「いや、ジョークのつもりだったんだが……………」

「島田は存外乙女じゃな」

「……………毎度御鼻屑に、どうも」

「どうやらいつのまにか美波もムツリーニと写真の取引をしていたようだ。恐るべきはムツリーニの人脈だろう。」

「ところで、テーブルはいいとして夕食はどうする?」

「……………何か作る?」

「僕は別にそれでもいいけど」

現在の時刻は午後五時だ。何かを作るのなら今から買い物に行かねば遅くなってしまふ。

「今日はピザでも取りましょ。作る時間が勿体無いし」

「そうですね。特に明久君は頑張らないといけませんから、ご飯を作っていちやダメです」

二人の気遣いが、明久にはありがたかった。今の明久には少しながら金があるので、勉強を優先できるのは正直助かる話だった。

「なんじゃ。ワシはてつきり島田が手料理を振舞うのかと思っただのじゃが」

「昨夜、プライドを打ち砕かれたからちよつと、ね……………」

「そうかな? 美波の料理おいしいと思うけど」

「何だ、まるで食った事があるような言い方だな?」

明久の言葉に疑問を抱いたのか、雄二が尋ねた。

「うん、前にオムライスご馳走になったことがあるんだ。それがすごく美味しくてさ」

「ちよ、ちよつとアキ」

「……………裏切り者……………! (ギリツ)」

その話題を聞いていたムツリーニが怒りに歯を噛み締め、美波が少し頬を赤くする。それを知らずに、明久は続きの言葉を言った。

「あんなにおいしいなら、僕毎日食べたいよ。ははっ」



「あとはまた今度にするとして、今日は帰ろうぜ」

「そうですね。美波ちゃん、今日はありがとうございました」

「あ、ううん。こっちこそ色々ありがとうございます。ほら葉月、お礼を言いなさー。ー葉月？」

「ZZZZZ・・・」

「あはは。疲れちゃったみたいだね」

葉月はいつの間にか明久の膝の上で眠ってしまった。

「もう、葉月ってば・・・。アキ、悪いけどこっちに寝かしてもらえる？」

「あ、うん。そうしたんだけど・・・」

ソファアの上に寝かそうとしても、葉月が明久のシャツを握って眠っている。この状態では帰れそうにない。

「こら葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ？」

美波が葉月の肩を叩く。

「んう・・・」

すると葉月は少しだけ目を開け、

「帰っちゃ、嫌です・・・」

そう言つて更に強くシャツを握り締めた。

「葉月。あんまり我が儘言つと、お姉ちゃん怒るからね」

美波の口調が少しだけ強くなる。この様子を見ると、優しいだけでなく怒る時には怒る良い姉という感じが伝わってくる。

「・・・お姉ちゃんには、わからないです・・・」

「え？ 何が？」

「・・・お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるからいいです・・・でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒にいられないです・・・」

「・・・」

寝ぼけているからこそ聞けた葉月の本音に、明久達は思わず顔を見合わせた。そして、葉月がそこまで明久の事を慕っているという事が分かった。

「あのさ、美波。良かったら、僕はもう少しここで勉強していてもいいかな？」

「え？」

「だな。今のチビツ子の台詞を聞いたら、明久は残るべきだよな」

「そうじゃな。明久よ、モテる男は辛いもの」

「……人気者」

雄二達に口々にかかわれるが、悪い気はしなかった。最近はおルフェノクとの殺し合い、常軌を逸した姉などの攻撃的な人々と接していたので、そういった純粋な好意は嬉しかった。

「そ、それじゃあ、悪いけどもう少し葉月に付き合ってもらえる？」

「うん」

美波の許可も下りたので、明久はもう少しここにいる事にした。

「あ、あのっ、それなら私も……っ！」

「え？ 姫路さんはダメだよ。女の子があまり遅い時間に出歩いや危ないからね。雄二にでも送ってもらって早く帰らないと」

「でも、心配なんです。その、イロイロと……」

「心配なのはわかるけど」

「いいえっ。明久君は私が何を心配しているのか全然わかってませんっ」

「????？」

姫路の言葉に、明久は首を傾げた。

「俺が姫路を送るなら、ムツツリー二は秀吉を送るってことでいいか？」

「……引き受けた」

「ワシはいまいち釈然とせんが、致し方あるまい……」

ぼやぼやしていると更に時間が遅くなってしまふ。姫路のような女子が外を一人で歩くのはあぶないだろう。秀吉も外見は女子そのものなので、用心しなければならぬ。

「あの、やっぱり私も……っ！」

それでも尚、姫路は食い下がる。

「いくら言っても、ダメなものはダメだからね姫路さん」  
「でもでもっ」

「諦める姫路。こうなると明久は考えを曲げないぞ」

「………うう………。そんなぁ………」

いくら何でも女子が外を出歩くにはもう時間が経ちすぎている。

ここは明久に任じたほうが良いだろう。

「それじゃ、島田。今日はありがとうな」

「大勢で押しかけてすまなかったのう」

「………ありがとう」

「美波ちゃん、ありがとうございました」

どこか納得できていない姫路を含め、雄二達はお礼を言って玄関に向かう。

「じゃ、また明日。皆」

明久は葉月を膝の上に乗せ寝かしているので、座ったまま挨拶した。

「待って、外まで送るわ」

美波は立ち上がって雄二達についていった。

「さて。それじゃ、続きをやるかな」

一気に人気のなくなったりビングで姫路特製のプリントを手に取る。綺麗な字で読みやすい上に、要点がわかるようにまとめられている優れたものだ。これさえあれば、成績向上は間違いないだろう。色つきのシートを当て、内容を覚えていく。

「すう、すう………」

膝の上からは穏やかな寝息が聞こえてくる。今の明久にとって、葉月に甘えられているというのが幸せだった。最近はおルフェノクの出現に、ファイズに変身しておルフェノクと戦い、更には玲にテストだの生活態度だの口うるさく言われてたのでなおさらだった。

………だが、明久には怖かった。この好意を向けられるのが。誰かを好きになるのが。誰かと友達になるのが。前はこんな事全然思いもしなかったが、おルフェノクという存在を知ってからこ

んな事を考えるようになった。・・・これも、全て自分が――

「ごめんね、アキ。迷惑かけちゃったわね」

そんな事を考えていると、雄二達を送り出した美波が戻ってきた。  
「ううん。別に迷惑でもなんでもないよ」

「・・・ありがとう」

明久の隣に座りながら美波は葉月の頭を撫でた。

「・・・美波」

「何？ アキ」

「・・・美波は、誰かを裏切るのが怖い？」

その言葉に、美波はキョトンとした顔になった。

「・・・どうしてそんな事を聞くの？もしかして、アキがいつも坂本に裏切られたりしてるから？それでウチもアンタを裏切るかもしれないって訳？・・・別に、裏切るのが怖いって訳じゃないけど・・・」

「違うんだ・・・。僕は皆に裏切られるのが怖いんじゃない。

・・・僕は、僕が誰かを裏切るのが怖いんだ」

「・・・どうしてそんな事を考えるの？アキがウチ達を裏切るわけないじゃない。まあ確かに試召戦争なら仕方ないかもしれないけど、オルフェノクが関わってる時に、アキが裏切るなんて思わないわ。・・・だって、アキはアキだもん・・・」

美波は下をうつむきながら言った。こうも言い切れるのは、明久の性格を熟知しているからだろ。どんな時でも優しい明久なら、命が関わってる状況で自分達を裏切るはずがない。

「・・・ありがとう」

明久はまだ少し暗い表情だが、それでも無理に笑顔を浮かべながら言った。何故か、美波にはその笑顔が痛々しく見えた。

「・・・ねえアキ、さっきウチの部屋を見た時、ぬいぐるみが見えたでしょ？」

「うん」

「誰が写っていたのか、知りたくない……?」  
「ふえ?」

明久と美波の間に、意味深な会話が繰り広げられる。明久は葉月が家族の集合写真が入っているとばかり思っていたが、どうもそうではないらしい。だとすると、考えられるのは美波の好きな人物の写真が入っているのかもしれない。

「んにゅっ!」  
「ひゃあっ!!」

その時突然寝ていた葉月が身体を起こし、二人は驚き思わず変な声を出す。

「にゅう……」  
そして、再び葉月は身体を横たえた。ただ寝ぼけただけかもしれない。

「あ、あはは……びっくりしたよね」

「そ、そうね。びっくりしたよね」  
少しの間、二人でぎこちなく笑いあう。

「あ。今で葉月ちゃんが手を離してくれたみたいだ」  
「え? あ、ホントね」

どうやら寝ぼけて身体を起こした時に手を離れたようだ。

「それじゃ、僕もそろそろ帰るよ」

葉月の体を抱き上げてソファーに横たえる。

「そう。じゃあ、また明日ね」  
「うん」

勉強道具を鞆にしまい、リビングのドアに手をかける。

そして、ドアを開けて出て行こうとしたところで、

「……アキ」  
「ん?」

「……ウチの部屋の写真……見て帰っても、いいから」

「う、うん」

明久は思わず何かに気おされて頷く。

美波はそれ以上は何も言う事無く、よそを向いてしまった。

「そ、それじゃあ……」

リビングのドアを閉めて、玄関に向かう。

「……」

だが、玄関に向かう前に美波の部屋の前に立つ。心の中で、あんな事を言われたら見ないで帰るわけにはいかないという気持ちと、見たくないという気持ちがあつかり合う。しかし、明久は美波の部屋のドアを開け、中を覗き込み写真立てを確認した。

「あ、アキは見たかしら……。あの写真……。見たら、流石にあのバカでもわかるわよね……。それで、そうしたら……」

「んにゅ……」

「あ。葉月、起きた？」

「はいです……」

「それなら、きちんと着替えてお部屋で寝なさい。一人が寂しいなら、一緒に寝てあげるから」

葉月に優しい声でそう言いながら、美波は窓の外の夜空を眺めながら思った。

（……アキ、ウチは絶対にアキを裏切ったりしないから。だから、アキも寂しい顔をしないで。いつでも、ウチはアキの隣にいるから）

「・・・・・・・・」

明久は夜の道をただ一人で歩いてきた。美波の部屋にあったのは、自分の写真だった。それは、美波が明久に好意を持っているということになる。しかし、明久は喜ばなかった。それどころか、恐れていた事が起こってしまった、という感じだ。別に誰かからの好意を否定する気はないし、したくもない。ただ、自分がその人を裏切るのがとても怖い。

「・・・・・・・・大丈夫だよ」

明久は、そんな感情から目を背け家路を急ぐ。オルフェノクが現れる前までしてきたように。

美波での勉強会から数日後、明久は家路を辿っていた。ついさっきまで雄二達と一緒に霧島家で泊りがけで勉強をしていて、今帰っ

ているところなのだ。

「そう言えば、今日は姉さんと一緒の夕食になるのか」

玲の仕事は午前中なので、今は家にいるはずなのだ。そうとなると、夕食は水だけというわけにはいかないだろう。

「やっぱり、日本食でも作ってあげようかな………?」

明久としてはご馳走を作って玲を喜ばせたいし、勉強会のかいあってテスト対策もはかどっているので、夕食を作るくらいなら玲も許してくれるだろう。

「鍋は………時期じゃないし、てんぷらは暑そうだし………」

頭の中でメニューを考えながら家へと向かうが、中々いい献立が考え浮かばない。

そんな事を考えているうちにマンションに辿り着き、エントランスを通過してエレベーターに乗る。荷物が多くなりそうなので、一旦家に戻ってから買い物に行こうとする。

「ただいまー」

「………に、………すか」

明久が家のドアを開けると、リビングから玲の声が聞こえてきた。どうやら誰かと電話中らしい。自分の荷物を置くため、通話の邪魔をしないためそつと自分の部屋に行こうとした。……こんな声が聞こえるまでは。

「………人の弟を騙そうとして、よくそんなことが言えますね」

玲のその声に、明久はギョツとした。内容ではない。声が、冷たすぎるのだ。今まで聞いた事のないぐらいに。

「アキくんを騙そうとしたって、そんな簡単にはさせませんよ?」

……あなたのような性悪な泥棒猫の考えなどお見通しです。アキくんは渡しませんし、二度とアキくんには触れさせませんし、会わせもさせません。……美波さん」

気がつくとも明久は、リビングのドアを勢いよく開け、電話を玲か

らひつたくり通話を切った。

「・・・何やってるんだよ、姉さん」

怒りを隠しきれずに、少し怒気がこもっている声で明久は言った。だが玲は涼やかな表情で、

「電話ですよ、アキくん。・・・アキくんを騙そうとした泥棒猫に、忠告の電話をしてたんです。あ、ちなみに番号は悪いとは思いますが、アキくんの携帯電話から知りました」

「・・・美波はそんなことをしない。美波は普通の女の子だ」「何でそんな事がわかるんですか？　もしかしたら裏で何か考えてるかもしれませんが？　あなたが魅了的に映る事はありませんし、もしいるならあなたを騙そうとしている悪い人だけです。彼女も、あなたを騙そうとしている性悪な」

「黙れっ！！」

明久はとうとう叫んだ。怒りがこもった目で、目の前の姉を睨みつける。

「姉さんに何がわかる・・・、ずっと海外にいて、久しぶりに帰ってきたと思ったら僕の成績の事ばかり心配してる姉さんに。しかもあげくには美波の事を性悪扱い。どうせ姉さんにとって僕とのコミュニケーションや体の心配よりテストの方が重要なんですよ！　わかったよ！　お望みどおり勉強してくるさ！　絶対に凄い点数を取って姉さんを向こうに帰らせてやる！！」

明久は怒鳴り終わると、ドアを乱暴に閉め部屋に向かう。もしかしたら自分は、オルフェノクとの戦いや学校生活で疲れていた所に玲が帰ってきたのが嬉しかったのかもしれない。だが、姉の反応はテストの心配や明久には嫌がらせとしか思えない行為、しかも美波にわざわざ電話をかけ性悪扱い。それらの原因が重なり、明久は怒りで頭がいっぱいになった。そして部屋にこもり、翌朝まで飲まず食わずで勉強をした。



第十四話 勉強会と裏切りと嫉妬（後書き）

次回はあの人が出ます。  
感想お待ちします。

第十五話 テスト当日と名前忘れと姉の想い。(前書き)

大変遅くなりました！ 十五話です！

## 第十五話 テスト当日と名前忘れと姉の想い。

いよいよテスト当日となり、明久は教室に一番乗りで来ていた。そして教科書を広げ、最後の仕上げをする。

「おはよ、アキ」

「・・・・・・美波」

美波が明久に挨拶してきたが、明久はどういう態度で美波に接すれば良いか分からなかった。昨日、玲が美波に言った台詞に罪悪感がわいてきて、どう言えば良いのか分からないのだ。玲とは朝顔も見せずにマンションを出し、一言も喋らなかった。夕食をどしたかも分からない。しかし、玲は美波に性悪や泥棒猫など失礼極まりない事を言っていたので、明久として謝る気はサラサラ無かった。正直、今でもまだ怒りが収まらない。

「・・・もしかして、昨日の玲さんの事？」

「・・・・・・」

無言で明久が顔を上げると、美波は少し悲しそうな顔をしていた。・・・別に大丈夫よ。玲さんがアキの事を心配してるのは知っているし、ウチも葉月がいるから兄妹を想う気持ちは分かるの」

「だけど、いくら何でも美波にあんな事・・・・・・」

昨日玲が美波に言った台詞を思い出し、再び怒りが沸々と沸いてくる。

「ウチは本当に大丈夫よ。だから気にしないで」

「・・・・・・本当にごめん。今度姉さんによく言っておくから」

「ありがとう、テスト頑張りなさいよ」

「うん、美波も頑張ってね」

美波は明久と別れると、自分の卓袱台に向かった。明久はその後姿を眺めながら、復習を続ける。

今日の科目は現代国語・英語・<sup>リーディング</sup>世界史・数学？・科学・保健体育の六科目で、残りの科目は明日の二日目となっている。一時間目の現代国語や二時間目のリーディングについてはいつもどおりやれば良いだろう。勝負は三時間目の世界史である。ここで良い点数を取れるかどうかで全てが決まる。

「よしお前ら、席につけ。今日は期末テストの一日目だが……」

いつもの時間通りにやってきた鉄人が簡単に連絡事項を告げ、大した話も無かった為に五分もせず朝のHRが<sup>ホームルーム</sup>終了した。一時間目のテストが始まるまではまだ時間があるので、復習を続ける事にした。勝負の鍵は世界史が握っているのも、一つでも多くの単語を覚えなければならぬ。

「はい、勉強道具をしまつて下さい。一時間目のテストを始めますよ」

夢中になって勉強をしていると、ついに監督の教師がやってきた。言われたとおりに勉強道具をしまい、テストの用紙が回されてくるのを待つ。勝負は世界史にかかるとはいえ、他の科目にだるうと気は抜けない。ここで良い点数をとれたら、玲を追い返すのが楽になるからだ。

「毎度の事ですが、注意事項です。机の上には筆記用具以外は置かない事。また、机に何かが書かれている場合はカンニングと見なされる場合がありますので、自分で書いた覚えがなくても確認するようにして下さい。それと、途中退室は無得点扱いとなりますので、よほどの事がない限りは……」

テストお決まりの常套句を聞き流し、前の席から回ってきたテスト用紙を受け取り、裏面にしたまま後ろの席に回す。

「いよいよ、期末試験の始まりだ。」

現代国語と英語を特に失敗も無く終え、ついに最大の山場である世界史のテストに時間を迎えた。

「よしお前ら。テストを始めるぞ。筆記用具以外は全部しまっように」

監督の教師は鉄人のようで、野太い声が聞こえる。

「一枚ずつ取って後ろに回すように。問題用紙はチャイムが鳴るまで伏せておく事。いいな？」

前の席から問題用紙と解答用紙が回ってくる。明久は言われたとおりそれぞれ一枚ずつ取り、紙の束を更に後ろの人に回した。

そして、授業開始のチャイムが鳴る。

「始めなさい」

鉄人の合図と共に、シャープペンを手にとって解答用紙に手をかける。まずは何度も間違えてしまった箇所OfYearと出来事を走り書きでメモし、一通り書き終えた後で問題用紙を表にする。

解ける問題だけを素早く解き、解けない問題が目立ち始めたら最初に戻りじっくりと考える。これは問題数が無制限かつ先に進むにつれ難易度が上がる文月学園のテストならではの解き方だ。解けない問題が目立ち始めたら、そこから先は解けない問題しか出てこないと見てほぼ間違いない。そうなると問題文を読む次官が勿体無いから、考えたら分かりそうな問題のところまで戻って解いていく。このやり方は、雄二と姫路から教わったものだ。この方法でやってみると、それだけで点数に差が出る。テストは本番のやり方一つでも変わるようだ。

夢中で問題を解き、解けそうな問題も無くなってきた頃、テスト終了のチャイムが鳴り響く。

「よし。ペンを置き。解答用紙を後ろの生徒が集めてくるように」  
クラスの皆が大きく息を吐く音が響き、鉄人に言われたとおり一番後ろに座っている人が解答用紙を回収して行く様子が見える。その中に、解答用紙を渡さずに粘っている朝倉の姿が見えた。その様子を見た明久は自分も解答用紙を見直す。

そして、ある一つの箇所が気にかかった。

「吉井。回収してくぞ」

「あ」

修正するどころか、懇願する暇もなく解答用紙が回収される。

壇上に集められた解答用紙は鉄人の手で一つにまとめられると、専用の袋に詰められ教室から姿を消した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

為す術も無く去り行く鉄人の背中を、明久は黙って見送った。

「おう明久。勝負の世界史はどうだった？ きちんと解けたのか？」  
そんな明久のところに席を立て雄二がやってきた。

「ああ、うん。ちょっと間違えちゃったけど、今までで一番良くできたよ」

明久が答えると、雄二は小さく肩をすくめた。

「そうか。それはつまらんな。折角お前が真っ青になって今後の対策を考える姿を笑いにきたつてのに」

「何を言ってるのさ雄二。まったく洒落にならないよ」

事実、明久の間違いは洒落にならなかった。

「まあ、あれだけ勉強したもんな。点数が下がるわけがないよな」

「まったくだよ。やだなあ。あはははっ」

「ははっ。そうだよな」

雄二と二人で笑い合いながら、さっきしてしまった解答用紙に思いをはせる。

そのミスは、名前の欄に自分の名前ではなくこう書き込んでしまったのだ。

アレクサンドロス大王、と。

明久は、自分の一人暮らしに別れを告げた。

「まったく、貴方という人は……アキくん、いえ。アレクサンドロス大王と呼んだ方が良いでしょうか？」

家に帰って、昨日の喧嘩で気まずいのも我慢して今日の成果を報告すると、玲は呆れたように言った。

「う……。て、点数はそれなりに良かったと思うんだ。ただ、無記名で0点になっちゃうってだけで……」

あれだけ大見得を切ってこの有様なのだから立場が無い。当然昨日のように強く出ることも出来ず、明久は玲の前に正座し項垂れていた。

「もし名前を記入していたら高得点だったとして、だからどうしたと言っんですか。アレクサンドロスは受験の本番で同じミスをしてしまったら、そうやって試験管の人に言えば許してもらえると思っているのですか？」

「うぐ……」

確かに、受験の時にそんな言い訳は通用しないだろう。文月学園は常に実社会で通用する生徒の育成をスローガンにしているので、本番の時に通用しない言い訳は一切聞いてもらえない。だからこそ、姫路の振り分け試験の途中退場にも温情が与えられなかったのだ。

「うう……、僕なりに頑張ったのに……」

「ですから、頑張った結果がこれなのでしょう？」

「ごめんなさい……」

「別に謝る事はありません。姉さんは最初からアキくんにも何も期待していませんでしたから」

「ううう……」

何となく期待されていないんだろっとな、と思っただけだが、実際に聞くとなかなか傷つく。

「一応、努力していたことは評価に値するとは考えていますが」

「え？ そ、そう？」

「ですが、結果を残せないようでは意味がありません。努力というものには結果の為の過程に過ぎず、いくらその行動が尊いものであるうとも、過程自体を誇るようになっては何の意味もないのです」

その考えは、何となく明久には分かった。結果を残すというのは、明久で言えば、オルフェノクから人間達と人の心を持ったオルフェノクを護る事だ。オルフェノクを倒す事では決して無い。だから、玲の言う事はどこか納得できた。

「そもそもアキくん。貴方は平日頃から勉学を疎かにしているからこのような事態になるのです。テスト前にバタバタと慌てて勉強を始めるのではなく、きちんと毎日の積み重ねを……」

玲のありがたい説教が続く。

「聞いているのですか、アキくん。だいたいあなたはいつも……」

「

玲がその続きを言おうとしたが、時計の電子音が鳴った事で説教が止まった。

「あら？ もう七時ですか。お説教に夢中になっていて時間が経つのを忘れてしまいましたね。そろそろお夕飯にしましょうか」

その言葉に、明久は胸を撫で下ろす。その様子に玲は目を細めて「アキくんのテストは明日もあるようですし、続きは明日の夜にします」

玲の放った言葉に、明久の動きが凍ったように動かなくなる。

「それじゃ、何か簡単な物でも作るよ……」

「いいえ。今日は外で済ませましょう。時間も時間ですし」

そこまで空腹なわけではないが、家庭料理好きの玲にしては珍しく外食が提案される。これは明久が夕食を作り結果が出せなかったら困る、などという理由によるものなのだろうか。

「行きますよ、アキくん」

「う、うん」

財布をポケットにねじ込み、念のためにファイズギアが入ったトランクケースを手にし、明久達はマンションを出た。

「……………」

（……………き、気まずい……………!!）

さっきの説教の最中に食事に行く事が決まったうえ、特に話すこともないので重苦しい沈黙がその場を支配する。明久がため息をしながらそばに置いてあった車のサイドミラーを見る。

その瞬間、明久の呼吸が停止する。

何故なら、そのサイドミラーには灰色の異形……………オルフェノクが写っていたからだ。明久がその光景に身を固めていると、オルフェノクは反対側の道へ姿を消した。

「ごめん姉さん！ ちょっと忘れ物！」

「えっ？ アキく……………」

明久はそのオルフェノクが消えた道に走り、後を追う。辿り着いた先は、どこかの工場の近くのようなだった。明久が辺りを見渡すと、眼鏡をかけた男……………琢磨とサラリーマン風の男が現れた。

「初めまして、吉井さん……………あなたの命をもらいます」

そう言うところ琢磨はセンチピードオルフェノクに、サラリーマン風の男はナマコの性質を持つオルフェノク……………シーキュカンバーオルフェノクに姿を変える。

明久はトランクケースからファイズドライバーを取り出し、腰につける。そしてファイズフォンを開き、変身コードを入力する。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

明久はファイズに変身し、センチピードオルフェノクに殴りかかろうとするが、その前にシーキュカンバーオルフェノクが襲い掛かる。ファイズは攻撃をかわしシーキュカンバーオルフェノクを殴り飛ばすが、直後にセンチピードオルフェノクがファイズの胸を蹴る。そしてファイズがよろけた隙にシーキュカンバーオルフェノクがファイズの顔面を殴り、センチピードオルフェノクが鞭でファイズを攻撃する！

「うわああああ!!」

ファイズは火花を散らしながら地面に転がる。そんなファイズにさらに追い討ちをかけようとシーキュカンバーオルフェノクが攻撃しようとするが、ファイズは倒れたままシーキュカンバーオルフェノクを蹴り飛ばす。シーキュカンバーオルフェノクは大きく吹き飛ばされ、階段の上まで飛ばされる。ファイズは急いで立ち上がり、階段の上までジャンプし、シーキュカンバーオルフェノクと格闘になる。シーキュカンバーオルフェノクから放たれた拳をかわしながら、腹に拳を叩き込む。

「はあっ!!」

格闘の最中にセンチピードオルフェノクから鞭が放たれ、ファイズは間一髪でその攻撃をかわし、ファイズフォンを取り出す。そしてフォンブラスターにしながらコードを押す。

『Burst Mode』

フォンブラスターをセンチピードオルフェノクに向け、引き金を押す。アンテナから光弾が三発放たれ、センチピードオルフェノクに直撃する。

「ぐわああ!!」

センチピードオルフェノクは地面に転がり、ファイズは次に銃口をシーキュカンバーオルフェノクに向け三発の光弾を放つ。それを受けたシーキュカンバーオルフェノクが怯み、ファイズはさらに拳による追いつちをかける。

「ふん!!」



れる。

「やあああああああつ!!」

そして、強化クリムゾンスマッシュがシーキュカンバーオルフェノクに突き刺さり、今度はセンチピードオルフェノクに赤い円錐が向けられる。

「うつつ!」

センチピードオルフェノクは体を回転させる事で何とか強化クリムゾンスマッシュの直撃を避けるが、体には電撃が走る。

『Three Two One』

冷淡に発せられるその音声は、まるで哀れなオルフェノク達の死の秒読みをしているようだった。

『Time Out』

音声が発せられると同時に、シーキュカンバーオルフェノクは赤いの記号を浮かべながら灰になり消滅した。

『Reformation』

その音声でファイズは通常の姿に戻り、センチピードオルフェノクはふらつきながら逃走した。

「ふう……」

ファイズは変身を解除し、明久の姿に戻る。

「……アキくん?」

「!?!?」

突然かけられた声に明久が振り返ると、そこには玲が困惑気味の表情で立っていた。

「ねえ……さん……! いつから……いたの?」

「……あなたが『変身!』と叫んだときからです。何やら忘れ物した程度ではすまないような顔をしていたので、後を追ってみたのです」

つまり、最初から見られていたというわけか。明久が頭を抱えると、玲が明久の服の襟を掴んだ。

「……良かった」

「えっ？」

「・・・アキくんが無事で、本当に・・・」

状況を把握できていないが、今の命を懸けた戦いという事は分かったらしい。そして、顔を下に伏せる。心なしか、声が震えているように聞こえる。

「・・・心配、してくれたの？」

「・・・当たり前でしょう・・・。弟を心配しない姉などどこにもいません。・・・あなたが病院に入院した時だって、どれだけ心配したか・・・」

恐らく明久が病院に入院したときの事を言っているのだろう。その声に、明久は唇を噛む。

昨日は好き勝手な事を言ってしまったが、この姉は明久の心配をしている。常に厳しく言っている言葉も、明久を思っている事なのだろう。

「ごめん・・・」

明久には、ただそれだけしか言えなかった。

「良いです。アキくんが無事なら」

それでも、玲はそう言った。明久は、初めて姉の『弱さ』を見たような気がした。

そして、どれだけ自分が思われているかも。

二人は再び道を歩いていった。綺麗な夕日が二人を照らしている。さっきの事はあまり追及されなかった。ただ、明久が何か大変な事に巻き込まれていることは分かったようだが。

「あのね、姉さん」

「はい」

明久は玲の横顔に話しかけた。少しぶっきらぼうに見える。

「心配してくれてありがとう。僕……姉さんの事、大好きだよ」  
「にやにを」

噛んだ。玲は一呼吸する。

「いきなり何を言い出すのですか」

「あはは。勿論、家族としての好き、だけどね」

「……そんな事を言っでご機嫌を取っても、明日のお説教はやめませんし、いつか本当の事を話してもらいますからね」

「そっか、それは残念」

「当然のことです」

「当然、ね」

「当然です」

「……」

「……」

それつきり押し黙ってしまった玲と、夕暮れの中を並んで歩く。

こうして二人で出かけるのは何年ぶりのことだろう。

「……」

「ん？ 何、姉さん」

「そのうち、気が向いたら私が夕食を作っであげてもいいでしょう」

「え？ 本当？」

「ええ。美味しすぎてアキくんが驚くようなものを作っであげます」

「そっか。それは楽しみだね」

「ただし、気が向いたら、ですが」

きっと気が向くのは当分先になるだろう。結果を求めるくせに料理が全然ダメなのだ。人前に出せるようになるまで練習時間がたっぷりと必要になるだろう。

明久はそんな姉を見て、軽くため息を吐く。

「姉さん」

「なんですか？」

「姉さんは料理の一番のスパイスって、何だか知ってる？」  
すると、玲はその言葉ににっこりと微笑み、

「愛情、ですよね？」

「えっ？」

明久は少し驚いた。玲はそういう問題には弱い節があるので、答えられないと思っていたのだ。そんな明久を見て、玲はクスクスと笑いながら言った。

「外国で会った人が言っていました。どんな調味料にも食材にも勝るものがある。それは料理を作る人の愛情だって」

「へえ・・・どんな人？」

「とても料理が上手な方で、自分の事を『天の道を住いぎ、総てを司る男』と言っていました」

「す、凄い人だなあ・・・」

そこまで言い切るとは、かなりの自信家だろう。

「ですが、それでもアキくんには美味しい物を食べてもらいたいですから・・・いつになるかは分かりませんが、楽しみにしてください」

「うん、楽しみにしてるよ」

二人が楽しそうに歩く道は、とても温かだった。

明久たちが外食を終え帰ってきた夜、明久が風呂に入っている隙

に、玲は一本の電話をかけた。

『はい、もしもし』

その声は、美波だった。玲は美波のところに電話をかけたのだ。  
「もしもし、美波さん？」

『・・・玲さん？』

美波の声は、どこかキョトンとしているようだった。

「昨日は申し訳ありません。少し言い過ぎました」

『えっ？ い、いえ。ウチは』

「・・・ですが」

そこで、玲の雰囲気が変わる。

「それでも、アキくんを渡しません。絶対に。アキくんを愛してるのは私ですから」

『・・・！ う、ウチもアキを絶対に諦めません！ あ、玲さんには絶対に渡しません！』

玲の声に、美波は強めに言い返す。

「・・・良いでしょう。島田美波さん。私は今日より、あなたを『恋敵』と認識する事にします」

『望むところです！ ぜえったいにアキは渡しませんから！』

「はい。私も望むところです。美波さん。それでは」

そして、通話が途切れる。明久の知らないところで、明久を愛する二人の戦いが行われようとしていた。果たして、この戦いに勝利するのは誰なのか。それは、まだ誰も分からない。

・・・そして、もう一つの運命も動き出す。

「じゃ、社長！ 大変です！」

スマートブレインの社長席に、秘書が慌てて駆け込んできた。社長席に座っている村上はゆっくりと秘書に目を向ける。

「どうしました？ やけに騒々しいですが」

その言葉には、余裕が込められていた。しかし次の瞬間に放たれた秘書の言葉に、その余裕は吹き飛ぶ事になる。

「デルタのベルトが・・・、盗み出されました！」

「!? 犯人は!?」

さすがの村上も、顔に焦りが生じている。

「社内のオルフェノクです。すでに逃走されています！」

「・・・クソッ！ すぐに追っ手を使い、ベルトを取り戻してくださいー！」

「はいっ！」

その言葉に、秘書は急いで社長室を出る。村上は、歯を噛み締めながら憤怒の表情を浮かべた。

「はあはあ・・・」

ある路地裏に、一人の男が逃げていた。男の顔は青く、何かに怯えているような感じだ。

「ようやく見つけたぞ」

そんな男の目の前に、ニット帽をかぶった男が立ち塞がる。

「馬鹿なことをしたな？ まさか、デルタのベルトを盗むとは。悪いが、お前を倒してベルトを回収すれば、俺はラッキークローバー

入りだ。・・・死ね」

「う、うわあああああ！！」

その言葉に恐怖しながら、男はナメクジの性質を持つオルフェノク……スネイルオルフェノクに変わるが、それより早くニット帽の男はミミズの性質を持つオルフェノク、ワームオルフェノクに変わり、一気に距離を詰め、三日月状の刃でスネイルオルフェノクを切り裂く。スネイルオルフェノクは青い炎を上げながら、灰になり消滅した。ワームオルフェノクは元の男の姿に戻るが、そこである異変に気がつく。

「・・・デルタのベルトが無いな。まさか、別の場所に隠したのか？・・・用心深いやつだ」

男は灰を見ながら、忌々しげに呟いた。

スネイルオルフェノクが倒されたその時、スネイルオルフェノクとワームオルフェノクのいた場所から遠く離れた道に、一つのトラックケースが落ちていた。どうやらスネイルオルフェノクは隠していたわけではなく、逃げている時に追っ手に殺されるかもしれない恐怖で落としてしまったらしい。そして、そのトラックケースに近づくと影が一つあった。

「・・・？ これは・・・」

その影は。

ドリル状のツインテールをした影だった。



第十五話 テスト当日と名前忘れと姉の想い。(後書き)

感想お待ちしています

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5132v/>

---

バカとテストと紅き閃光

2011年10月2日03時16分発行